



|              |                                                                                     |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 令和五年度 退職教員略歴・主要業績                                                                   |
| Author(s)    |                                                                                     |
| Citation     | 大阪大学大学院人文学研究科紀要. 2024, 1, p. 277-397                                                |
| Version Type | VoR                                                                                 |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/94808">https://hdl.handle.net/11094/94808</a> |
| rights       |                                                                                     |
| Note         |                                                                                     |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 令和五年度 退職教員略歴・主要業績

|                          |               |    |                               |
|--------------------------|---------------|----|-------------------------------|
| あき た<br>秋田               | しげる<br>茂      | 教授 | 人文学専攻・グローバルヒストリー・地理学講座（西洋史学）  |
| いし い<br>石井               | まさ ひこ<br>正彦   | 教授 | 日本学専攻・基盤日本語学講座                |
| い い づ か<br>飯塚            | かず ゆ き<br>一幸  | 教授 | 日本学専攻・日本史学講座                  |
| おか だ<br>岡田               | さだ ゆ き<br>禎之  | 教授 | 人文学専攻・文学・言語学講座（比較・対照言語学）      |
| か み や ま<br>神山            | た か お<br>孝夫   | 教授 | 人文学専攻・文学・言語学講座（比較・対照言語学）      |
| か わ い<br>川合              | やす し<br>康     | 教授 | 日本学専攻・日本史学講座                  |
| こ ぐ ち<br>小口              | いち ろ う<br>一郎  | 教授 | 言語文化学専攻・第二言語教育学講座             |
| さ か う ち<br>坂内            | ち さ と<br>千里   | 教授 | 言語文化学専攻・理論言語学・デジタルヒューマニティーズ講座 |
| た き た<br>瀧田              | え み<br>恵巳     | 教授 | 言語文化学専攻・コミュニケーション論講座          |
| た の む ら た だ は る<br>田野村忠温 |               | 教授 | 日本学専攻・基盤日本語学講座                |
| よ ね だ<br>米田              | の ぶ こ<br>信子   | 教授 | 外国学専攻・アジア・アフリカ講座（スワヒリ語）       |
| わ た な べ<br>渡邊            | か つ あ き<br>克昭 | 教授 | 外国学専攻・ヨーロッパ・アメリカ I 講座（英語）     |
| わ た な べ<br>渡邊            | し ん じ<br>伸治   | 教授 | 言語文化学専攻・コミュニケーション論講座          |

## 秋田 茂 履歴・研究業績

### 略歴

- 1977年3月 広島県立福山誠之館高校・卒業
- 1977年4月 広島大学文学部・史学科西洋史学専攻・入学
- 1981年3月 広島大学文学部・史学科西洋史学専攻・卒業（文学士）
- 1983年3月 広島大学大学院文学研究科・博士課程前期 西洋史学専攻・修了（文学修士）
- 1985年3月 広島大学大学院文学研究科・博士課程後期 西洋史学専攻・中退
- 1985年4月 大阪外国語大学・外国語学部・助手に採用
- 1988年1月 大阪外国語大学・外国語学部・講師に昇任
- 1991年1月 大阪外国語大学・外国語学部・助教授に昇任
- 1994年4月-95年8月 ロンドン大学SOAS訪問研究員 同・歴史学研究所客員研究員
- 1994年4月-95年1月 文部省在外研究員（若手）
- 2001年4月-2002年3月 ロンドン大学LSE客員教授
- 2003年10月 大阪大学大学院文学研究科・世界史講座・教授、博士（文学）（大阪大学）
- 2015年5月-2022年10月 アジア世界史学会(Asian Association of World Historians) 会長
- 2015年10月- 大阪大学未来戦略機構（現・先導的学際研究機構）グローバルヒストリー部門長
- 2016年5月-6月 南洋理工大學招聘教授（シンガポール・人文社会科学研究科）
- 2018年9月- 東アジアブリテン史学会（East Asian Society of British History）共同会長
- 2018年10月-2019年1月 ハイデルベルク大学招聘教授（Center for Trans Cultural Studies）
- 2022年4月- 大阪大学人文学研究科・グローバルヒストリー・地理学大講座・教授
- 2022年11月- 大阪大学栄誉教授

### 受賞

- 2004年6月 第20回大平正芳記念賞（大平正芳記念財団）
- 2013年7月 第14回読賣・吉野作造賞（読売新聞社・中央公論新社）
- 2014年7月 大阪大学総長顕彰（研究部門）
- 2022年11月 紫綬褒章

## 【著書】

### (単著)

- 1 『イギリス帝国盛衰史—グローバルヒストリーから読み解く』 幻冬舎、2023年、425頁。
- 2 『帝国から開発援助へ—戦後アジア国際秩序と工業化』 名古屋大学出版会、2017年、242頁。
- 3 『イギリス帝国の歴史—アジアから考える』 中央公論新社（中公新書2167）、2012年、288頁。
- 4 （郭海良訳）『極簡英帝国史来自亞洲的思考』 中国出版集團東方出版中心、2020年、245頁。
- 5 『イギリス帝国とアジア国際秩序—ヘゲモニー国家から帝國的な構造的権力へ』 名古屋大学出版会、2003年、358頁。

### (共著・共編著)

- 1 『高等学校 世界史探求』（文部科学省検定済教科書 高等学校地理歴史科用）第一学習社、2023年2月、280頁。
- 2 『高等学校 歴史総合』（文部科学省検定済教科書 高等学校地理歴史科用）第一学習社、2022年2月、232頁。
- 3 『高等学校 新歴史総合—過去との対話、つなぐ未来』（文部科学省検定済教科書 高等学校地理歴史科用）第一学習社、2022年2月、208頁。
- 4 (ed.), *American Empire in Global History*, London and New York: Routledge, 2022/01, 244p.
- 5 With Hong Liu and Shiro Momoki (eds.), *Changing Dynamics and Mechanisms of Maritime Asia in Comparative Perspectives*, Singapore: Palgrave Macmillan, 2021/09, 258p + ix.
- 6 『駒形丸事件—インド太平洋世界とイギリス帝国』 ちくま新書、2021年1月、270頁、（細川道久と共著）はじめに 11-17頁、第1章 19-53頁、第2章 100-108頁、第4章-終章 175-241頁。
- 7 『人口と健康の世界史』（MINERVA世界史叢書8）、ミネルヴァ書房、2020年8月、380頁、（脇村孝平と共編著）序章「人口と健康の世界史」1-19頁。
- 8 『グローバルヒストリーから考える新しい大学歴史教育—日本史と世界史のあいだで—』 大阪大学出版会、2020年3月、350頁、（桃木至朗と共著）序論「グローバルヒストリーから考える新しい大学歴史教育—日本史と世界史のあいだで—」1-16頁、第4章「世紀転換期のインド系移民排斥と「インド太平洋世界」の形成」72-99頁。
- 9 『グローバル化の世界史』（MINERVA世界史叢書3）、ミネルヴァ書房、2019年3月、

- 400頁、序章「グローバル化の世界史」1-17頁、第5章「19世紀「パクス・ブリタニカ」の世界171-210頁、第9章「アジア太平洋の世紀」329-356頁、終章「地球社会の行方と課題」377-383頁。
- 10 『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 地理歴史編』文部科学省、2018年7月、（東洋館出版社、2019年3月、451頁）歴史総合、世界史探究の該当箇所。
  - 11 『「大分岐」を超えて—アジアからみた19世紀論再考』ミネルヴァ書房、2018年3月、310頁、第1章「アジアからみる19世紀像再考」3-16頁、第2章（秋田茂訳）「インドと19世紀の世界経済」17-32頁、第4章「19世紀末インド綿紡績業の発展と「アジア間競争」」55-80頁。
  - 12 『グローバルヒストリーと戦争』大阪大学出版会、2016年4月、351頁、（桃木至朗と共著）序論「グローバルヒストリーと戦争」1-22頁、第2章「冷戦とアジアの経済開発」55-78頁。
  - 13 『新しく学ぶ 西洋の歴史—アジアから考える』ミネルヴァ書房、2016年2月、420頁、第7章総論・4節169-170頁、177-178頁、第9章4節229-230頁、第11章4節286-287頁、南塚信吾・高澤紀恵と責任編集。
  - 14 宇山智彦編『ユーラシア近代帝国と現代世界—シリーズ・ユーラシア地域大国論4』ミネルヴァ書房、2016年2月、169-189頁、第7章「経済開発・工業化戦略と脱植民地化—1940年代末-60年代中葉のインドと香港」。
  - 15 Antoinette Burton and Dane Kennedy (eds.), *How Empire Shaped Us*, London and New York: Bloomsbury Academic, 2016/01, 216p. (pp.117-128, Chap.11, Shigeru Akita, “From South Asian Studies to Global History: Searching for Asian Perspectives”).
  - 16 大阪大学歴史教育研究会・公益財団法人史学会編『史学会125周年リレーシンポジウム 1 教育が開く新しい歴史学』山川出版社、2015年11月、223頁、第I部 桃木至朗・堤一昭・飯塚一幸と共著「阪大史学系の歴史教育改革」、10-35頁。
  - 17 With Gerold Krozewski, and Shoichi Watanabe et al. (共編著), *The Transformation of the International Order of Asia: Decolonization, the Cold War, and the Colombo Plan*, London and New York: Routledge, 2014/10, 255p. (pp.1-12, “Introduction: the Colombo Plan, aid relations, and the international order of Asia, 1950-65” ; pp.111-130, “The transformation of the Colombo Plan and the sterling area in the late 1950s and early 1960s”).
  - 18 大阪大学歴史教育研究会編（共著）『市民のための世界史』大阪大学出版会、2014年4月、

- 311頁、第5、7-13章。
- 19 渡辺昭一編『コロombo・プラン—戦後アジア国際秩序の形成』法政大学出版局、2014年3月、271-298頁、第10章「コロombo・プランプランの変容とスターリング圏—1950年代後半から1960年代初頭」。
  - 20 菅英輝編『冷戦と同盟—冷戦終焉の視点から』松籟社、2014年3月、53-79頁、第1章「冷戦・開発主義とシンガポールの工業化」。
  - 21 『アジアからみたグローバルヒストリー』ミネルヴァ書房、2013年11月、346頁、1-22頁、序章「長期の18世紀」から「東アジアの経済的再興」へ）、197-224頁、第7章「経済援助・開発とアジア国際秩序」。
  - 22 『グローバルヒストリーと帝国』大阪大学出版会、2013年3月、9-43頁、序章「グローバルヒストリーと帝国」（桃木至朗と執筆）、239-267頁、第8章「綿業が紡ぐ世界史—日本郵船のボンベイ航路」。
  - 23 Toyin Falola and Emily Brownell et al. (共著), *Africa, Empire and Globalization—Essays in Honor of A.G. Hopkins*, Carolina Academic Press, 2011/04, pp.417-431 (Chap. 20: Shigeru Akita, “The British Empire as ‘Imperial Structural Power’ within an Asian International Order”).
  - 24 菅英輝編『東アジアの歴史摩擦と和解可能性—冷戦後の国際秩序と歴史認識をめぐる諸問題』凱風社、2011年4月、346-367頁、第12章「南アジアにおける脱植民地化と歴史認識—インドのコモンウェルス残留」。
  - 25 『近代イギリスの歴史—16世紀から現代まで』（木畑洋一と共編）ミネルヴァ書房、2011年3月、107-133頁、第五章「帝国主義の時代」コラムV、337-338頁、「あとがき」。
  - 26 近藤和彦編『イギリス史研究入門』山川出版社、2010年9月、272-293頁、第12章「帝国」。
  - 27 樺山紘一編『新・現代歴史学の名著—普遍から多様へ』中央公論新社、2010年3月、200-214頁、オブライエン『帝国主義と工業化1415-1974』。
  - 28 Antony Best et al. (共著), *The International History of East Asia, 1900-1968: Trade, Ideology and the Quest for Order*, Routledge-Curzon, 2010/02, pp. 153-167 (Chap.10: Shigeru Akita, “The East Asian international economic order in the 1950s”).
  - 29 With Nicholas J. White et al. (共編著), *The International Order of Asia in the 1930s and 1950s*, Ashgate Publishing Limited, 2010/01, pp. 1-13 (“Introduction: The International Order of Asia in the 1930s and 1950s: Context, Hypotheses and Scope” , with Nicholas White), pp. 17-48; (Chap.1: Shigeru Akita, “British Economic Interests and the International Order of Asia in the 1930s”).

- 30 『歴史学のフロンティア—地域から問い直す国民国家史観』大阪大学出版会、2008年10月、9-32頁、「序章」桃木と共同執筆、112-135頁、第四章「イギリス帝国とヘゲモニー」。
- 31 水島司編『グローバル・ヒストリーの挑戦』山川出版社、2008年8月、102-113頁、第7章「アジア国際秩序とイギリス帝国、ヘゲモニー」。
- 32 懷徳堂記念会（編）『世界史を書き直す 日本史を書き直す—阪大史学の挑戦』和泉書院、2008年6月、191-232頁、第六章「イギリス帝国と近代アジア・日本」。
- 33 西村成雄・田中仁編『中華民国の制度変容と国際秩序：現代中国文化研究 上』汲古書院、2008年3月、193-208頁、第2部第1章「1930-50年代の東アジア国際経済秩序」。
- 34 桃木至朗編『海域アジア史研究入門』岩波書店、2008年3月、158-166頁、第二部III-（6）「近世から近代へ 近世後期の世界システム」。
- 35 Patrick Manning (ed.), *Global Practice in World History: Advances Worldwide*, Princeton: Markus Wiener Publishers, 2008/02, pp.57-68 (Chapter 4: Shigeru Akita, 'Creating Global History from Asian Perspectives').
- 36 渡辺昭一編『帝国の終焉とアメリカ—アジア国際秩序の再編』山川出版社、2006年5月、134-165頁、第5章「1950年代の東アジア国際経済秩序とスターリング圏」。
- 37 『パックス・ブリタニカとイギリス帝国』ミネルヴァ書房、2004年、381頁、「総論 パックス・ブリタニカとイギリス帝国」、1-17頁、および第5章「自由貿易帝国主義と英領インド」153-186頁。
- 38 山本有造編『帝国の研究—原理・類型・関係』名古屋大学出版会、2003年、396頁。第7章「帝國的な構造的権力—イギリス帝国と国際秩序」257-290頁。
- 39 (ed.), *Gentlemanly Capitalism, Imperialism and Global History*, London and New York: Palgrave, 2002, 255p. Introduction: from Imperial History to Global History, pp.1-18; Chapter 8: "The International Order of Asia in the 1930s" with Naoto Kagotani, pp.143-168.
- 40 秋田茂・籠谷直人編『1930年代アジア国際秩序』溪水社、2001年、330頁、「総論」（籠谷直人と共同）、5-15頁 および第11章「ジェントルマン資本主義と東アジア—日本・中国の工業化に対するイギリスの認識 1890-1930年代」299-323頁。
- 41 川北稔・指昭博編『周縁からのまなざし—もうひとつのイギリス近代』山川出版社、2000年、301頁、Ⅲ・2「ネイボッピー—その虚像と実像」161-184頁。
- 42 川北稔・木畑洋一編『イギリスの歴史—帝国・コモンウェルスへの歩み』有斐閣、2000年、302頁。第3章「パックス・ブリタニカの時代」115-167頁。
- 43 濱下武志・川北稔編『地域の世界史11 支配の地域史』山川出版社、2000年、361頁。第

- Ⅱ部・第2章「帝国と軍隊—イギリスの植民地支配とインド軍」176-212頁。
- 44 Ray Dumett(ed.), *Gentlemanly Capitalism and British Imperialism: The New Debate of Empire*, London and New York: Longman, 1999, 234p. Chapter 6: “British Informal Empire in East Asia 1880s-1930s: A Japanese Perspective”, pp.141-156. [ほぼ同文が、*Discussion Paper, Suntory-Toyota International Centre for Economics and Related Disciplines*, London School of Economics and Political Science(LSE), University of London, IS/95,287,1995に収録]
- 45 木畑洋一編『大英帝国と帝国意識—支配の深層』ミネルヴァ書房、1998年、284頁。第8章「植民地エリートの帝国意識とその克服—ナオロジとガンデイーの場合」179-200頁。
- 46 『岩波講座世界歴史18・工業化と国民形成 18世紀末—20世紀初』岩波書店、1998年、281頁。「論点と焦点：イギリス帝国とアジア」165-186頁。
- 47 川北稔編『新版・世界各国史11・イギリス史』山川出版社、1998年、536頁。第8章「パクス・ブリタニカの盛衰」295-334頁。
- 48 池田修監修、大阪外国語大学特定研究プロジェクトチーム編著『世界地域学への招待—大学院への研究案内』嵯峨野書院、1998年、462頁。Part 4: 地域研究の課題—ヨーロッパ・アメリカ—「イギリス帝国史研究の射程」299-310頁。
- 49 岡本明編『支配の文化史—近代ヨーロッパの解説』ミネルヴァ書房、1997年、320頁。第3章「ジェントルマン社会の変容と海外膨張—世紀転換期イギリスのジェントルマン社会」67-92頁。
- 50 歴史学研究会編『講座世界史5・強者の論理—帝国主義の時代』東京大学出版会、1995年、406頁。特論3「帝国主義批判の思想—ホブソンの『帝国主義論』を中心として」213-225頁。
- 51 望田幸男・野村達朗・藤本和貴夫・川北稔・若尾祐司・阿河雄二郎編『西洋近現代史研究入門』名古屋大学出版会、1993年、増補改訂版・1999年、490頁。第1章・第5節「イギリスと帝国—インド」43-47頁、378-380頁。
- 52 松田武・阿河雄二郎編著『近代世界システムの歴史的構図』溪水社、1993年、240頁。第5章「第二次ボア戦争とインド」109-137頁。
- 53 村岡健次・木畑洋一編『世界歴史大系・イギリス史3』山川出版社、1991年、505頁。第5章「帝国主義時代の到来」169-219頁。

## 【論文】

- 1 「「近代世界の誕生」と阿部正弘公」『第19回全国藩校サミット福山大会』第19回全国藩校サミット福山大会実行委員会・一般社団法人漢字文化振興協会、2022年11月、38-49頁。

- 2 'American Empire in Global History', *The Journal of Imperial and Commonwealth History*, Vol.49, No.3, 2021/06, pp.401-413. DOI: 10.1080/03086534.2021.1920799
- 3 'Global History Studies at Osaka University', *Bulletin of Asia-Pacific Studies*, Vol.22, 2020/03, pp.25-41.
- 4 「アジアからグローバル・ヒストリーを問い直す」『歴史学と世界文学』臨川書店、2020年3月、33-46頁。
- 5 'Intra-Asian Competition and Collaboration against the West: The N.Y.K. Bombay Line, Tata & Sons, and Indian Cotton at the End of the Nineteenth Century', *Asian Review of World Histories*, 6-2 (2018), pp. 277-293, ISSN: 2287-9811 (Scopus). DOI:10.1163/22879811-12340038
- 6 'Japanese Efforts to Overcome Eurocentric Paradigms in the Study of Global History', Sven Beckert and Dominic Sachsenmaier (eds.), *Global History, Globally*, London: Bloomsbury Academic, 2018/02, chap. 14, pp.283-294, ISBN 978-1-3500-3635-2.
- 7 「序論 グローバルヒストリーから見た世界秩序の再考」『国際政治』第191号、2018年3月、1-15頁。
- 8 「補遺・1960年代の米印経済関係—PL480と「緑の革命」の起源」『ヨーロッパ文化史研究』第18号、東北学院大学ヨーロッパ文化総合研究所、2017年3月、53-76頁。
- 9 「1960年代の米印経済関係—PL480と食糧援助問題」『社会経済史学』Vol. 81、No. 3、2015年11月、25-42頁。
- 10 "The Aid-India Consortium, the World Bank, and the International Order of Asia, 1958-1968", *Asian Review of World Histories*, 2-2 (2014), 2014/07, pp.217-248.
- 11 「ボンベイの建築様式とイギリス帝国」藤田治彦編『アジアをめぐる比較芸術・デザイン学研究—日英間に広がる21世紀の地平』大阪大学文学研究科、2013年3月、10-16頁。
- 12 「亜洲国際経済秩序与大英帝国及英鎊集団（1930-1950年代）」田中仁・江浦・許育銘（主編）『現代中国変動与東亜新格局』社会科学文献出版社、2012年8月、3-12頁（金晶 訳）。
- 13 "The British Empire and the International Order of Asia in the 1930s and 1950s", *Yongkuk Yonku (The Korean Journal of British Studies)*, (Yongkuksda Hakhoe [The Korean Society of British History]), Vol.26, 2011/12, pp.69-91.
- 14 「「長期の18世紀」から「東アジアの経済的再興」へ」『待兼山論叢』45、2011年12月、1-26頁。
- 15 "World History and the Emergence of Global History in Japan", *Chinese Studies in*

- History*, Vol.42, No.3, 2010/04, pp.84-96.
- 16 “Die internationale Wirtschaftsordnung in Asien und Hongkong während der 1930er und 1950er Jahre aus komparativer Perspektive”, Frank Hatje und Klaus Weber (eds.) *Hamburger Wirtschafts-Chronik*, (Wirtschaftsgeschichtlichen Forschungsstelle Hamburg e.V.), Neue Folge Band 7, Verlag Hanseatischer Merkur, 2008/12, pp. 189-211.
  - 17 “Creation of a New Global History and British Imperial History: Japanese Perspectives” *Yongkuk Yonku (The Korean Journal of British Studies)*, (Yongkuksa Hakhoe [The Korean Society of British History] ), Vol. 20, 2008/12, pp. 325-348.
  - 18 「1930年代のイギリス「非公式帝国」と東アジア世界」『東北学院大学ヨーロッパ文化史研究』 8、2007年3月、185-232頁。
  - 19 “Recent Japanese Historiography on British Imperial and Commonwealth History” , *The Korean Journal of British Studies*, Vol.14, 2005/12, pp.427-444.
  - 20 「イギリス帝国史研究と地域史の対話」『歴史科学』大阪歴史科学協議会、179-180合併号、2005年5月、21-27頁。
  - 21 「イギリス帝国と国際秩序」『歴史学研究・増刊号』歴史学研究会、794、2004年10月、6-15頁。
  - 22 「グローバルヒストリーとアジア世界」『えくす・おりえんて』（大阪外国語大学言語社会学会）Vol.10、2004年、75-99頁。
  - 23 「関税改革とインドー「アジア間貿易」、インドの工業化をめぐるイギリスの認識」(1999年度大会共通論題報告：論題；イギリス帝国主義と世紀転換期の世界)『西洋史研究』第29号、2000年11月、244-254頁。
  - 24 「シンガポールと「アジア太平洋圏」 科研報告書基盤研究A 『「アジア・太平洋圏」文明の構築をめざしてー相互認識を通しての共通の価値観の模索ー』 代表：赤木攻、大阪外国語大学、1998年3月、31-41頁。
  - 25 “‘Gentlemanly Capitalism,’the British Empire and the Intra-Asian trade 1890-1930s: an interpretation of Japanese industrialization,” *Proceedings of the 8<sup>th</sup> Tsukuba Annual Seminar on Canadian Studies: Canada and the British Empire*, Tsukuba University, 1997, pp.41-52.
  - 26 「ジェントルマン資本主義と「開かれたアジア間貿易論」ー日本の工業化に対するイギリスの認識 1890～1930年代」『史学研究』第216号、1997年6月、1-19頁。
  - 27 “‘Gentlemanly Capitalism’, Intra-Asian Trade and Japanese Industrialization at the

Turn of Last Century", *Japan Forum*, Vol.8, No.1, 1996/04, pp.51-65. 以下に再録:  
Kenneth Pomeranz (ed.), *The Pacific in the Age of Early Industrialization* (The Pacific World: Lands, Peoples and History of the Pacific, 1500-1900 Vol. 11), Ashgate, 2009, chapter 8, pp.175-189.

- 28 「国家アイデンティティ」を模索する現代イギリス社会」『大阪外国語大学・アジア太平洋論叢』第6号、1996年3月、163-192頁。
- 29 "The Second Anglo-Boer War and India", *Journal of Osaka University of Foreign Studies*, New Series, No.8, 1993/03, pp.117-135.
- 30 「『帝国主義経費論争』をめぐる」『大阪外国語大学・アジア学論叢』第2号、1992年3月、123-141頁。
- 31 「インド軍海外派遣問題とイギリスの帝国外交政策-1878年～83年-」『西洋史学』第152号、1989年3月、38-55頁。
- 32 「グラッドストーンのイギリス帝国認識-第二次デズレリー内閣の帝国外交政策批判を中心に」『大阪外国語大学・英米研究』第15号、1987年2月、261-280頁。
- 33 「1870年代末のインド政策とイギリス政党政治-第二次アフガン戦争を中心に」『大阪外国語大学学報』第72-3号、1986年11月、1-16頁。
- 34 「1870年代半ばのインド統治政策-インド相ソールズベリーとインド総督ノースブルックの政治的対立を中心に」『史学研究』第165号、1984年9月、61-82頁。
- 35 「『自由貿易帝国主義時代』のインド支配-チャールズ・ウッド卿のインド統治政策をめぐる」『史学研究』第161号、1983年9月、47-68頁。

#### 【翻訳】

- 1 ジョン・ダーウィン著「第一章 オリエンテーション」(秋田茂・川村朋貴・中村武司・宗村敦子・山口育人訳)『ティムール以後 世界帝国の興亡1400-2000年 上』国書刊行会、2020年11月、23-84頁。
- 2 イリヤ・V・ガイドゥク著「二つの戦争の間の平和攻勢-フルシチョフのアジア政策、1953-1964年」渡辺昭一(共著)『コロンボ・プラン-戦後アジア国際秩序の形成』法政大学出版局、2014年3月、251-270頁。
- 3 渡辺昭一編『帝国の終焉とアメリカ-アジア国際秩序の再編』山川出版社、2006年5月、106-133頁、第4章・N.J.ホワイト「帝国の残影 イギリスの影響力と東南アジアの脱植民地化」。
- 4 松田武・秋田茂編『ヘゲモニー国家と世界システム：20世紀をふりかえって』山川出版社、2002年4月、336頁。「序」執筆、第二章・パトリック・オブライエン「バクス・

- ブリタニカと国際秩序1688-1914」、第四章・ブルース・カミングス「アメリカの台頭 1939-1941」、第五章・ジョバンニ・アリギ「近代世界システムの形成と変容におけるヘゲモニー国家の役割」。
- 5 パトリック・オブライエン著『帝国主義と工業化—イギリスとヨーロッパの視点から』ミネルヴァ書房、2000年4月、230頁。玉木俊明氏との共訳。「訳者解説」執筆、第二章・パトリック・オブライエン「海外帝国がヨーロッパ人にもたらした利益とコスト」。
  - 6 ジェームズ・メイオール著「世界の一体化とナショナリズムの将来」松田武監修『世紀の終わりに—過去に未来を探る—国際シンポジウムより』国際交流基金日米センター、1998年12月、309-321頁。
  - 7 P.J.ケイン、A.G.ホブキンズ著『ジェントルマン資本主義の帝国 I—創生と膨張1688～1914』、名古屋大学出版会、1997年、480頁。竹内幸雄氏との共訳。第Ⅲ部「広大な世界」を担当。
  - 8 ビル・ルビンSTEIN「現代イギリスの貴族社会と政治への影響力」『大阪外国語大学・アジア学論叢』第5号、1995年3月、99-116頁。
  - 9 P.J.ケイン、A.G.ホブキンズ著『ジェントルマン資本主義と大英帝国』、岩波書店、1994年、189頁。竹内幸雄氏との共訳。「訳者解説」執筆、I-2「新帝国主義1850-1945年」。
  - 10 ピーター・ケイン著「イギリスの経済的帝国主義 1919-1939年：新たな解釈に向けて」『大阪外国語大学・アジア学論叢』第4号、1994年1月、217-231頁。

#### 【書評・解説など】

- 1 書評 ウィリアム・ダルリンブル著（小坂恵理訳）『略奪の帝国 東インド会社の興亡』河出書房新社、2022年『日本経済新聞』（2022年9月3日・朝刊）
- 2 書評 C.A.ベイリ著（平田雅博・吉田正弘・細川道久訳）『近代世界の誕生—グローバルな連関と比較 1780-1914—』上・下巻（名古屋大学出版、2018年）『西洋史学』No.273、2022年6月、49-51頁。
- 3 書評 中村哲著『東アジア資本主義形成史論』（汲古書院、2019年）『歴史学研究』No.1014、2021年10月、56-58頁。
- 4 Book Review: Kiyonori Kanasaka, *Isabella Bord and Japan: A Reassessment*, Trans. Nicholas Petwee. Folkestone, UK: Renaissance Books, 2017; Kiyonori Kanasaka, *Unbeaten Tracks in Japan: Revisiting Isabella Bird. New Abridged Edition with Notes and Commentaries*. Trans. Nicholas Petwee. Folkestone, UK: Renaissance Books, 2020, *Asian Review of World Histories*, 9-2, 2021/07, pp. 293-296. DOI:10.1163/22879811-12340096

- 5 書評 島田竜登編『1789年—自由を求める時代』（山川出版社、2018年）『西洋史学』No.271、2021年6月、88-90頁。
- 6 書評 杉原薫著『世界史のなかの東アジアの奇跡』（名古屋大学出版会、2020年）世界史研究所「世界史の眼」No.15、2021年6月1日、<https://riwh.jp/2021/06/01/>。
- 7 解説 『世界市場の形成』の魅力」松井透著『世界市場の形成』ちくま学芸文庫、2021年3月、473-481頁。
- 8 書評 スニール・アムリス著（秋山勝訳）『水の大陸 アジアーヒマラヤ水系・大河・海洋・モンスーンとアジアの近現代』（草思社2021年）『日本経済新聞』（2021年3月27日・朝刊）。
- 9 「脱・中国依存」と「自国ファースト」 コロナ後の世界を占う The Asahi Shimbun Globe、電子版、2020年5月12日、<https://globe.asahi.com/article/13364056> (access 2020/5/12)。
- 10 書評 水島司・加藤博・久保亨・島田竜登編『アジア経済史入門』（名古屋大学出版会、2015年）『社会経済史学』Vol.83、No.4、2018年2月、100-102頁。
- 11 Book Review: *Toushi-Shakai no Bokkou—Zaisei-Kinyuu Kakumei no Hukyu to Igrisu* [*The Rise of the Investing Society—The Spread of the Financial Revolution in Britain*], written by Yuichiro Sakamoto, *Asian Review of World Histories*, 6-1, 2018/01, pp. 212-214.
- 12 インタビュー「アジア・西洋関係に新歴史観」『日本経済新聞』（2016年11月21日・朝刊・19面 NIKKEI Asian Review）。
- 13 書評 K・ポメラント著（川北稔監訳）『大分岐』（名古屋大学出版会、2015年）『日本経済新聞』（2015年7月19日・朝刊・読書欄）。
- 14 書評 パンカジ・ミシュラ著（園部哲訳）『アジア再興』（白水社、2014年）『日本経済新聞』（2015年1月11日・朝刊・読書欄）。
- 15 Book Review: *Atarashii Sekaishi e—Chikyu-Shimin no tame no Kosou* [*Towards New World History: A Conception for Global Citizenship*], *Asian Review of World Histories*, 1-1, 2013/01, pp.164-167.
- 16 編集・解説 デニス・フリン『グローバル化と銀』山川出版社、2010年5月、5-28頁、「銀の流通からみた世界史の構築」（西村雄志と共同執筆）。
- 17 書評 永原陽子編『「植民地責任」論』（青木書店、2009年）をめぐって(II) グローバルヒストリー研究から見た「植民地責任」論の問題点」歴史学研究会（編）『歴史学研究』865、2010年3月、20-22頁。

- 18 学界展望「2004年の歴史学界—回顧と展望—ヨーロッパ・現代・一般」『史学雑誌』114-5、2005年3月、370-373頁。
- 19 書評 東田雅博著『大英帝国のアジア・イメージ』（ミネルヴァ書房、1996年）『英米研究』（大阪外国語大学英米学会）第23号、1999年3月、191-195頁。
- 20 書評 川北稔著『民衆の大英帝国—近世イギリス社会とアメリカ移民』（岩波書店、1990年）『史林』75巻1号、1992年1月、127-132頁。
- 21 書評 木村和男著『カナダ自治領の生成—英米両帝国下の植民地』（刀水書房、1989年）『土地制度史学』第130号、1991年1月、62-64頁。
- 22 書評 桑原完爾・井上巽・伊藤昌太編『イギリス資本主義と帝国主義世界』『西洋史研究』19号、1990年10月、107-116頁。
- 23 「1987年の歴史学界—回顧と展望—現代イギリス」『史学雑誌』第97編5号、1988年5月、378-382頁。
- 24 研究ノート 川北稔著『工業化の歴史的的前提—帝国とジェントルマン』をめぐって『史学研究』第169号、広島大学西洋近代史連合読書会、1985年9月、66-74頁。

## 石井正彦 履歴・研究業績

### 略歴

1958（昭和33）年12月 福島県南会津郡下郷町生まれ

（学歴）

1977（昭和52）年3月 福島県立会津高等学校卒業

1977（昭和52）年4月 東北大学文学部入学

1981（昭和56）年3月 同上卒業（文学士）

1981（昭和56）年4月 東北大学大学院文学研究科博士前期課程入学（国語学）

1983（昭和58）年3月 同上修了（文学修士）

1983（昭和58）年4月 東北大学大学院文学研究科博士後期課程進学（国語学）

1983（昭和58）年4月 同上中途退学

2007（平成19）年10月11日 博士（文学）（東北大学，文第240号）

（職歴）

1983（昭和58）年5月 国立国語研究所研究員（言語計量研究部）

1993（平成5）年4月 国立国語研究所主任研究官（言語体系研究部）

1995（平成7）年1月 国立国語研究所室長（言語体系研究部）

1999（平成11）年10月 大阪大学助教授（大学院文学研究科）

2007（平成19）年4月 大阪大学准教授（大学院文学研究科）

2009（平成21）年4月 大阪大学教授（大学院文学研究科）

2022（令和4）年4月 大阪大学教授（大学院人文学研究科）

（学会活動等）

日本語学会 庶務委員（1988年5月～1992年9月），編集委員・大会運営委員（1998年6月～2001年5月），大会企画運営委員（2006年6月～2009年5月），大会企画運営委員長（2012年6月～2015年5月），評議員（2009年6月～現在）

計量国語学会 編集委員（1997年4月～1999年3月）

### 主要研究業績

#### 【著書】

##### （1）単著

1. *Exploratory Corpus Linguistics : Data-Oriented Research on the Japanese Language*.  
Osaka University Press, 2024年2月

2. 『探索的コーパス言語学－データ主導の日本語研究・試論－』（大阪大学出版会），2019年9月

3. 『現代日本語の複合語形成論』（ひつじ書房），2007年3月

## （2）共著

1. 『マルチメディア・コーパス言語学－テレビ放送の計量的表現行動研究－』（共著者：孫栄爽）（大阪大学出版会），2013年2月

2. 『テレビ放送の語彙調査Ⅲ－計量的分析－（国立国語研究所報告115）』（共著者：中野洋[他]）（大日本図書），1999年3月

3. 『テレビ放送の語彙調査Ⅱ－語彙表－（国立国語研究所報告114）』（共著者：中野洋[他]）（大日本図書），1997年3月

4. 『テレビ放送の語彙調査Ⅰ－方法・標本一覧・分析－（国立国語研究所報告112）』（共著者：中野洋[他]）（秀英出版），1995年12月

5. 『高校・中学校教科書の語彙調査 分析編（国立国語研究所報告99）』（共著者：土屋信一[他]）（秀英出版），1989年3月

## （3）編著

1. 『語彙の原理－先人たちが切り開いた言葉の沃野－』（朝倉書店），2019年10月

## （4）共編著

1. 『日本語語彙へのアプローチ－形態・統語・計量・歴史・対照－』（共編著者・斎藤倫明）（おうふう），2015年5月

2. 『これからの語彙論』（共編著者・斎藤倫明）（ひつじ書房），2011年12月

3. 『語構成（日本語研究資料集第1期第13巻）』（共編著者・斎藤倫明）（ひつじ書房），1997年4月

## 【論文】

1. 「現代新聞における語結合の慣用化」『阪大日本語研究』35号（大阪大学），1-26頁，2023年2月

2. 「現代新聞語彙における副用語の“非基本語化”－使用率減少と散布度増加の関係からみた量的類型－」『現代日本語研究』14（大阪大学），44-60頁，2022年12月

3. 「現代新聞語彙における“基本語化”と“非基本語化”－使用率・均等度の平均変化率を用いた量的検討－」『阪大日本語研究』34号（大阪大学），1-25頁，2022年2月

4. 「新聞社説の叙述系基本語彙」『現代日本語研究』13（大阪大学），65-84頁，2021年12月

5. 「語彙調査における高頻度語の分離に関する計量的検討」『現代日本語研究』12（大阪大

- 学), 54-73頁, 2020年12月
6. 「語彙調査の裏側－基本語彙から周辺語彙へ－」『日本語学』38-12 (明治書院), 12-23頁, 2019年12月
  7. 「コロケーションの成立と変化に関する事例的検討－新聞『デフレ+動詞』句の通時的頻度調査から－」『現代日本語研究』11 (大阪大学), 107-126頁, 2019年3月
  8. 「探索的コーパス言語学のための覚書」『現代日本語研究』10 (大阪大学), 81-98頁, 2018年3月
  9. 「文の長さの統計モデル」『現代日本語研究』9 (大阪大学), 109-123頁, 2017年3月
  10. 「名詞の表現による文内情報提示の構造：新聞社説の抽象名詞『方針』を例に」『待兼山論叢 (日本学篇)』50 (大阪大学), 21-48頁, 2016年12月
  11. 「リジット解析：計数データを用いた言語研究への適用」『計量国語学』30-6 (計量国語学会), 357-377頁, 2016年9月
  12. 「無性格語は実在するか－特化係数とその散布度による検討－」『日本語語彙へのアプローチ－形態・統語・計量・歴史・対照－』(共編著者・斎藤倫明)(おうふう), 147-163頁, 2015年5月
  13. 「“臨時一語”の研究と教育－文章とのかかわりを中心に－」『高知大学留学生教育』第8号, 13-42頁, 2014年3月
  14. 「マルチメディア・コーパスの作成と分析 (特集ことば研究の道具2013)」『日本語学』32-14 (明治書院), 148-161頁, 2013年11月
  15. 「探索的データ解析による言語変化研究－蛇行箱型図によるS字カーブの発見－」相澤正夫 (編)『現代日本語の動態研究』(おうふう), 129-150頁, 2013年10月
  16. 「日本語の攻防 和語・漢語・外来語－基本語彙に見る攻防－」『日本語学』32-11 (明治書院), 80-92頁, 2013年9月
  17. 「臨時的な四字漢語の形成－文章論的な視点から－」野村雅昭 (編)『現代日本漢語の探究』(東京堂出版), 146-166頁, 2013年7月
  18. 「『不良債権処理』ができるまで－新聞にみる語彙化現象の動態－」『日本語学』31-14 (明治書院), 50-61頁, 2012年9月
  19. 「『新しい歴史教科書』の言語使用－中学校歴史教科書8種の比較調査から－」『阪大日本語研究』24号 (大阪大学), 1-34頁, 2012年2月
  20. 「日本語コーパス言語学の新展開」『日本言語文化』第16輯 (韓国日本言語文化学会), 5-21頁, 2010年4月
  21. 「借用の『位相』－J S T・科学技術文献情報の「ユビキタス」を例に－」『待兼山論叢

- 日本学篇』43号（大阪大学），73-90頁，2009年12月
22. 「テレビ放送のマルチメディア・コーパス—映像・音声を利用した計量的言語使用研究の可能性—」『阪大日本語研究』21（大阪大学），1-20頁，2009年2月
23. 「語彙・計量研究（小特集「国立国語研究所の60年」）」『日本語科学』24（国立国語研究所），117-124頁，2008年10月
24. 「仮名遣い改定初案から『現代かなづかい』制定まで」『国語論究13 昭和前期日本語の問題点』（明治書院），41-65頁，2007年9月
25. 「複合語の形成と『意味表示』の二重性—複合語形成論における『くみあわせ性』と『ひとまとまり性』」『月刊言語』36-8（大修館書店），50-58頁，2007年8月
26. 「日本語研究における探索的データ解析の有用性」土岐哲先生還暦記念論文集編集委員会（編）『日本語の教育から研究へ』くろしお出版，227-237頁，2006年11月
27. 「語構成研究と連語」『国文学解釈と鑑賞』70-7（至文堂），130-140頁，2005年7月
28. 「現代日本語語彙の『中心』と『周縁』—語彙の構造を動的にとらえる—」『日語日文学研究』50-1〔日本語学・日本語教育学篇〕（韓国日語日文学会），1-18頁，2004年8月
29. 「コーパスによる語彙の研究」『日本語学』22-5（明治書院），188-199頁，2003年4月
30. 「マス・コミュニケーションにおける送り手の語彙と受け手の語彙—基本語彙選定との関係において—」『国語学研究』42（東北大学），82-69頁，2003年3月
31. 「『既製』の複合動詞と『即席』の複合動詞—小説にみる現代作家の語形成—」『国語論究10 現代日本語の文法研究』（明治書院），256-287頁，2002年12月
32. 「テレビの単語使用—番組と話者からみた多様性—」『国語論究9 現代の位相研究』（明治書院），238-271頁，2002年1月
33. 「『文章における臨時一語化』の基本類型」玉村文郎（編）『日本語学と言語学』（明治書院），112-122頁，2002年1月
34. 「臨時一語と文章」『日本語学』20-8（明治書院），16-29頁，2001年8月
35. 「複合動詞の語構造分類」国語語彙史研究会（編）『国語語彙史の研究 二十』（和泉書院），316-304頁，2001年3月
36. 「『文章における臨時一語化』の諸形式—新聞における四字漢語の場合—」『現代日本語研究』8（大阪大学），1-34頁，2001年3月
37. 「語彙調査—日本語研究にもたらしたもの」『国文学解釈と鑑賞』66-1（至文堂），71-78頁，2001年1月
38. 「単語の使用頻度と文章—高校『物理』教科書の使用頻度“2”の語を例に—」遠藤好英（編）『語から文章へ』（「語から文章へ」編集委員会），69-82頁，2000年8月

39. 「情報処理研究とターミノロジーから見た『分類語彙表』」(共著者: 柏野和佳子・中野洋)『情報知識学会誌』9-4 (情報知識学会), 12-28頁, 2000年2月
40. 「テレビの社会方言－単語使用の性差を見出す－」『日本語学』18-13 (明治書院), 279-291頁, 1999年11月
41. 「阪倉篤義の『語構成論』」佐藤武義 (編)『語彙・語法の新研究』(明治書院), 393-380頁, 1999年9月
42. 「文章における『臨時一語化』と『脱臨時一語化』－脱臨時一語化の形式を中心に」『日本語研究』19 (東京都立大学), 1-15頁, 1999年4月
43. 「歌謡曲の聞き手はどんな単語を好むか」『表現研究』69 (表現学会), 35-44頁, 1999年3月
44. 「語彙の調査」『日本語学』17-10 (明治書院), 12-20頁, 1998年9月
45. 「テレビ放送における呼称」(共著者: 小沼悦)『日本語学』17-9 (明治書院), 27-31頁, 1998年8月
46. 「流行語と語彙」(共著者: 小沼悦)『国文学』42-14 (学燈社), 73-78頁, 1997年12月
47. 「Syntagmaticな臨時一語化－文章における先行表現の臨時一語化について－」加藤正信 (編)『日本語の歴史地理構造』(明治書院), 327-313頁, 1997年7月
48. 「専門用語の語構成－学術用語の組み立てに一般語の造語成分が活躍する－」『日本語学』16-2 (明治書院), 21-30頁, 1997年2月
49. 「テレビにおける単語使用の実態－国立国語研究所『テレビ放送の語彙調査』から－」『日本語学』15-10 (明治書院), 64-76頁, 1996年9月
50. 「使用頻度“1”の語と文章－高校『物理』教科書を例に－」『国立国語研究所研究報告集』17 (秀英出版), 23-55頁, 1996年3月
51. 「言語研究からみた専門用語の課題－教科書にみる“仲間うちのことば”・“広場のことば”－」『専門用語研究』9 (専門用語研究会), 11-17頁, 1995年3月
52. 「臨時一語と文章の凝縮」『国語学』173 (国語学会), 1-14頁, 1993年6月
53. 「語構成における生産性」『国文学解釈と鑑賞』58-1 (至文堂), 58-64頁, 1993年1月
54. 「造語モデルについての覚え書き」『文化言語学－その提言と建設』(三省堂), 626-609頁, 1992年11月
55. 「造語力をはかるために」『日本語学』11-5 (明治書院), 16-24頁, 1992年5月
56. 「動詞の結果性と複合動詞」『国語学研究』31 (東北大学), 88-76頁, 1992年4月
57. 「専門概念の命名」『日本語学』10-6 (明治書院), 24-28頁, 1991年6月
58. 「専門用語を抜き出す試み」『専門用語研究』3 (専門用語研究会), 32-37頁, 1991年5月

月

59. 「同音語の諸相」『日本語学』10-1（明治書院），13-27頁，1991年1月
60. 「専門語にも一般語にも用いられる造語成分について」国語語彙史研究会（編）『国語語彙史の研究 十一』（和泉書院），左31-58頁，1990年12月
61. 「学術用語の量的構造」（共著者・野村雅昭）『日本語学』8-4（明治書院），52-65頁，1989年4月
62. 「接辞化の一類型－複合動詞後項の補助動詞化－」『方言研究年報』30（和泉書院），281-296頁，1988年10月
63. 「造語モデルの構築とその問題点」『日本語日本文学』14（中華民国輔仁大学），1-17頁，1988年6月
64. 「辞書に載る複合動詞・載らない複合動詞」『日本語学』7-5（明治書院），33-43頁，1988年5月
65. 'Economy in Japanese Scientific Terminology'. *Terminology and Knowledge Engineering*, Proceedings of the First International Congress, Trier. Frankfurt: Indeks-Verlag, Vol.I, pp.123-136, 1987年09月
66. 「漢語サ変動詞と複合動詞」『日本語学』6-2（明治書院），46-59頁，1987年2月
67. 「銘柄の変遷に見る日本酒のネーミング」『言語生活』421（筑摩書房），62-65頁，1986年12月
68. 「複合名詞の語構造分析についての一考察－学術用語を例に－」『国語学』144（国語学会），112-99頁，1986年3月
69. 「複合動詞の成立－V＋Vタイプの複合名詞との比較－」『日本語学』3-11（明治書院），81-94頁，1984年11月
70. 「機械工学用語の語種構造」（共著者・野村雅昭）『計量国語学』14-4（計量国語学会），163-175頁，1984年3月
71. 「現代語複合動詞の語構造分析－＜動作＞・＜変化＞の観点から－」『国語学研究』23（東北大学），55-44頁，1983年12月
72. 「現代語複合動詞の語構造分析における一観点」『日本語学』2-8（明治書院），79-90頁，1983年8月

#### 【概説・展観・書評等】

1. 「〔特集：日本語学を創った人々〕 宮島達夫」『日本語学』39-1（明治書院），126-129頁，2020年3月

2. 「〔追悼〕偉大な“linguist” 宮島達夫先生を偲ぶ」『計量国語学』30-4（計量国語学会），237-239頁，2016年3月
3. 「〔書評〕斎藤倫明著『語彙論的語構成論』」『日本語の研究』3-2（日本語学会），54-60頁，2007年4月
4. 「複合語はなぜ字面以上の意味を表すのか」『国文学』51-4（学燈社），56-59頁，2006年4月
5. 「これから試みられてよい学際的切り口は何か」『国文学』51-4（学燈社），126-128頁，2006年4月
6. 「コーパス言語学と『キーワード』」『月刊言語』3-12（大修館書店），91-90頁，2004年12月
7. 「日本語の学習サイト」『月刊言語』33-6（大修館書店），71-70頁，2004年6月
8. 「（巻頭言）専門(用)語研究の新たな展開のために」『情報知識学会誌』12-1（情報知識学会），1-2頁，2002年5月
9. 「〔参考資料3〕テレビ放送の語彙調査」『新「ことば」シリーズ12言葉に関する問答集－言葉の使い分け－』（国立国語研究所），75-68頁，2000年3月
10. 「（学界展望）国語学近代・現代（文章・文体）」『文学・語学』161（全国大学国語国文学会），84-85頁，1998年10月
11. 'Review of Melby & Warner (1995): The Possibility of Language: A Discussion of the Nature of Language, with Implications for Human and Machine Translation', *TERMINOLOGY* 4:1, pp.166-168, 1997年
12. 「プログラムを書かずにできる言語処理－エディタで頻度表・KW I C・抄録文を作る－」『日本語学』11-10（明治書院），114-124頁，1992年9月
13. 「平成2年・3年における国語学界の展望語彙（理論・現代）」『国語学』169（国語学会），42-52頁，1992年6月
14. 「語構成（言語研究・言語教育と用例・実例）」『国文学解釈と鑑賞』54-1（至文堂），37-45頁，1989年1月
15. 「複合語の処理（ワープロのための日本語学）」『日本語学』7-12（明治書院），175-179頁，1988年11月

#### 【講座等分担執筆】

1. 「第5章 語形」斎藤倫明（編）『講座言語研究の革新と継承1 日本語語彙論Ⅰ』（ひつじ書房），135-165頁，2016年9月

2. 「第1章 コーパスを用いた日本語研究の特徴－語彙・文法を中心に－」(共著者・杉本武) 田野村忠温(編)『講座日本語コーパス6 コーパスと日本語学』(朝倉書店), 1-20頁, 2014年12月
3. 「第4章 多様なコーパスの可能性」田野村忠温(編)『講座日本語コーパス6 コーパスと日本語学』(朝倉書店), 69-101頁, 2014年12月
4. 「8 語種・品詞」「9 命名・造語」多門靖容・半沢幹一(編集)『ケーススタディ日本語の表現』(おうふう), 48-59頁, 2005年11月
5. 「第9章 語彙と文章」斎藤倫明(編)『朝倉日本語講座4 語彙・意味』(朝倉書店), 191-207頁, 2002年10月
6. 「日本語の形態論」飛田良文・佐藤武義(編)『現代日本語講座5 文法』(明治書院), 22-37頁, 2002年4月
7. 「レポート⑤ ジャンルから見た『土左日記』の語彙の特徴・解説」青葉ことばの会(編)『日本語研究法〔古代語編〕』(おうふう), 77-94頁, 1998年4月
8. 「第5章 語彙」佐藤武義(編著)『展望 現代の日本語』(白帝社), 107-136頁, 1996年12月
9. 「専門用語の実態と漢字」佐藤喜代治(編)『漢字講座10 現代生活と漢字』(明治書院), 226-249頁, 1989年9月
10. 「語構成」玉村文郎(編)『講座日本語と日本語教育6 日本語の語彙・意味(上)』(明治書院), 167-193頁, 1989年8月
11. 「第3章第4節 複合名詞の構造と機能」水谷静夫(編著)『朝倉日本語新講座1 文字・表記と語構成』(朝倉書店), 145-173頁, 1987年12月
12. 「ケース10 複合動詞の成立条件」寺村秀夫[他](編集)『ケーススタディ日本文法』(桜楓社), 56-61頁, 1987年4月

#### 【科研費成果報告】

1. 『探索的データ解析による日本語研究法の開発』, 2007年3月
2. 『臨時一語の構成に関与する文章論的諸特徴の記述的研究』, 1998年3月
3. 『複合動詞の成立条件解明のための語構成論的研究』, 1996年3月
4. 『学術用語語基表』(共著者・野村雅昭) 特定研究「言語データの収集と処理の研究」成果報告書, 1989年3月
5. 『学術用語語基連連接表』(共著者・野村雅昭) 特定研究「言語データの収集と処理の研究」成果報告書, 1988年3月

6. 『複合動詞資料集』 特定研究「言語データの収集と処理の研究」 成果報告書, 1987年3月

#### 【口頭発表・講演】

1. 「現代新聞における語結合の慣用化－記事データベースを用いた時事的な動詞句の調査から－」 第397回日本近代語研究会2022年度秋季発表大会（オンライン）, 2022年11月
2. 「慣用連語「デフレから脱却する」の成立－連語の単位性をめぐる事例的検討－」 中国海洋大学日語言語学国際学術研討会（中国海洋大学）, 2019年9月
3. 「連語の慣用性はいかに獲得されるか－新聞の「デフレ～」連語を例に－」 2017年台湾大学日本語文創新国際学術研討会（台湾大学）, 2017年12月
4. 「現代新聞における和語の基本語化」 日本語学会2017年度春季大会ワークショップ「近現代「基本語化」現象の記述と理論化－書きことばの叙述語を中心に－」（関西大学）, 2017年5月
5. 「連語の慣用性はいかに獲得されるか：新聞における個別連語の流行現象を手がかりに」 国語学研究会第401回記念発表会（東北大学）, 2017年3月
6. 「文の長さの統計モデル」 計量国語学会第60回大会（日本大学）, 2016年10月
7. 「映像KWICによる言語行動の直観的探索－対談番組のマルチメディア・コーパスを例に－」（共同発表者：孫栄爽） 日本語学会2016年度春季大会（学習院大学）, 2016年5月
8. 「現代新聞における和語動詞の叙述基本語化－談話引用動詞"話す"の場合－」 国立国語研究所共同研究プロジェクト「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」研究発表会（国立国語研究所）, 2016年1月
9. 「交互平均法とリジット解析」 計量国語学会第59回大会（神戸大学）, 2015年9月
10. 「〔講演〕コーパス日本語学の基礎－「言語的連結パターン」によるマルチレベル分析－」 韓国日本語学会第30回国際学術発表大会（韓国・カトリック大学校）, 2014年9月
11. 「〔講演〕"批判的コーパス言語学"の試み－単語の「イデオロギー的意味」の発見－」 中京大学文学会秋季大会（中京大学）, 2013年11月
12. 「〔講演〕“臨時一語”の研究と教育－文章とのかかわりを中心に－」 2013年度高知大学国際・地域連携センター国際連携部門講演会&ワークショップ（高知大学）, 2013年6月
13. 「同格連体名詞の外来語－文法機能からみた外来語の基本語化－」（共同発表者・金愛蘭） 韓国日本語学会, 韓国サンミョン大学校, 2012年3月
14. 「無性格語が特徴語になるとき－国立国語研究所「高校教科書の語彙調査」から－」 計量国語学会第55回大会（名古屋大学）, 2011年9月

15. 「マルチメディア・コーパスと言語使用」日本語学会2010年度秋季大会ワークショップ,  
2010年10月
16. 「〔講演〕日本語コーパス言語学の新展開」韓国日本言語文化学会2009年度秋季国際学術  
シンポジウム（韓国・明知大学校），2009年11月
17. 「借りる／借りない」の最前線－JST・科学技術文献情報の場合－」語彙辞書研究会第  
34回研究発表会（エステック情報ビル），2008年11月
18. 「テレビ放送のマルチメディア・コーパス」計量国語学会第52回大会（武庫川女子大学），  
2008年9月
19. 「文章顕現型の臨時一語化－その基本類型と多様性－」第94回漢字・漢語研究会，2007  
年7月
20. 「外来語の20世紀」日本語学会2007年度春季大会シンポジウム，2007年5月
21. 「テレビの単語使用－外来語を中心に－」国立国語研究所第31回「ことば」フォーラム，  
2007年3月
22. 「現代日本語語彙の『中心』と『周縁』－語彙の構造を動的にとらえる－」韓国日語日  
文学会2004年度国際学術大会（韓国・霊山大学校），2004年8月
23. 「日本語コーパス言語学における探索的データ解析の有用性」漢語語彙学第1回国際学  
術シンポジウム（中国・武漢大学），2004年4月
24. 「臨時的な複合動詞の語構造」土曜ことばの会（大阪大学），2001年4月
25. 「臨時一語発生の一要因－『～の』連続の回避－」計量国語学会第42回研究発表会（国  
立国語研究所），1998年9月
26. 「（シンポジウム『《はやりうた》の表現》）『はやり』にかかわる言語的特徴を探る」表  
現学会第35回全国大会（大妻女子大学），1998年6月
27. 「阪倉篤義氏の『語構成論』から学ぶべきもの」語彙・辞書研究会第12回研究発表会（三  
省堂文化会館），1997年11月
28. 「学術用語の造語成分の意味分類－『分類語彙表』を使って－」第5回国立国語研究所  
国際シンポジウム第1専門部会（国立オリンピック記念青少年総合センター），1997年8  
月
29. 「語彙調査の新展開」名古屋大学国語国文学会春季大会（名古屋大学），1997年7月
30. 「（テレビ放送の語彙調査）調査の概要」平成7年度国立国語研究所公開研究発表会（国  
立国語研究所），1995年12月
31. 「度数“1”の語の文章論的諸特徴について－高校「物理」教科書を例に－」第273回東  
北大学国語学研究会（東北大学），1995年11月

32. 「言語研究からみた専門用語の課題－教科書にみる“仲間うちのことば”・“広場のことば”－」専門用語研究会第8回シンポジウム, 1994年11月
33. 「語彙調査におけるデータ作成とその利用」情報処理学会自然言語処理シンポジウム (ICOT), 1993年1月
34. 「専門用語を抜き出す試み－高校・中学Z教科書の語彙調査から－」第4回専門用語シンポジウム (国立国語研究所), 1990年12月
35. 「語の圧縮からみた文章の凝縮度」国語学会秋季研究発表大会 (茨城大学), 1989年10月
36. 「科学技術の基本語彙－学術用語の語構成要素をもとに－」国語語彙史研究会第三十回記念大会 (京都教育大学), 1988年12月
37. 「造語モデルの構想」特定研究「言語情報処理の高度化」研究会 (福岡大学), 1987年12月
38. 'Economy in Japanese Scientific Terminology'. International Congress on Terminology and Knowledge Engineering (西ドイツ・トリア大学), 1987年9月
39. 「和語動詞性要素をもつ複合名詞の語構造」国語学会秋季研究発表会 (宮城学院女子大学), 1985年10月

以 上

## 飯塚一幸 履歴・研究業績

### 【略歴】

- 1977年 3 月 長野県立木曽西高等学校卒業
- 1977年 4 月 京都大学文学部入学
- 1982年 3 月 京都大学文学部国史学専攻卒業
- 1982年 4 月 京都大学大学院文学研究科研究員
- 1983年 4 月 京都大学大学院文学研究科博士前期課程国史学専攻入学
- 1985年 3 月 京都大学大学院文学研究科博士前期課程国史学専攻修了
- 1985年 4 月 京都大学大学院文学研究科博士後期課程国史学専攻進学
- 1988年 3 月 京都大学大学院文学研究科博士後期課程国史学専攻単位取得退学
- 1988年 4 月 京都大学研修員（1993年 3 月まで）
- 1993年 4 月 国立舞鶴工業高等専門学校専任講師（1996年 9 月まで）
- 1996年10月 佐賀大学文化教育学部学校教育課程助教授（2007年 3 月まで）
- 2007年 4 月 大阪大学大学院文学研究科文化形態論専攻准教授（2009年12月まで）
- 2010年 1 月 大阪大学大学院文学研究科文化形態論専攻教授（2022年 3 月まで）
- 2014年 4 月 大阪大学アーカイブズ室長（2018年 3 月まで）
- 2018年 6 月 博士（文学）（大阪大学）
- 2022年 4 月 大阪大学大学院人文学研究科日本学専攻教授（現在に至る）

### 【学会・自治体等委員歴】

- 1990年10月 宮津市史編さん調査執筆委員（2005年 3 月まで）
- 1992年 4 月 加茂町史執筆委員（1994年 3 月まで）
- 1995年 4 月 彦根市史専門部会委員（近代史部会）（2009年 3 月まで）
- 1999年 1 月 伊万里市史執筆委員会執筆委員（2007年 3 月まで）
- 2001年 5 月 鳥栖市史執筆委員会執筆委員（2009年 3 月まで）
- 2003年 4 月 久美浜町史編纂に係る調査執筆委員（2004年 2 月まで）
- 2006年 1 月 基山町史編さん編集委員・執筆委員（2010年 3 月まで）
- 2006年 4 月 佐賀新聞紙面批評委員（2007年 3 月まで）
- 2010年10月 日本史研究会編集委員長（2012年 3 月まで）
- 2011年 4 月 枚方市史編さん者（現在に至る）
- 2011年 6 月 八尾市史編集委員（現在に至る）

- 2011年 7月 摂津市史編さん委員（現在に至る）  
 2012年 6月 大阪歴史学会事務局長（2014年 6月まで）  
 2013年 6月 史学研究会評議員（現在に至る）  
 2015年 6月 大阪歴史科学協議会委員長（2021年 6月まで）  
 2015年11月 歴史科学協議会理事（2022年11月まで）  
 2019年 4月 大阪府公文書館懇談会委員（2023年 3月まで）  
 2020年 6月 公益財団法人竜王会館理事（現在に至る）  
 2021年11月 吹田市立博物館協議会委員（現在に至る）  
 2022年 4月 高知県史編さん近代部会委員（現在に至る）  
 2022年10月 日本史研究会代表委員（現在に至る）

### 【著書】

- 1) 朝尾直弘・吉川真司・石川登志雄・水本邦彦・飯塚一幸著『京都府の歴史』（山川出版社、274～330頁、1999年 8月）
- 2) 「明治地方自治制の変容過程の研究」（科学研究費補助金研究成果報告書、研究代表者飯塚一幸、全62頁、2002年 3月）
- 3) 菅原憲二・飯塚一幸・西山伸編『田中秀央 近代西洋学の黎明－『憶い出の記』を中心に－』（京都大学学術出版会、全373頁、2005年 3月）
- 4) 飯塚一幸編『小城鍋島家の近代』（佐賀大学文系基礎学研究プロジェクト、全110頁、2005年10月）
- 5) 懷徳堂記念会百年誌編集委員会編『懷徳堂記念会百年誌 1910～2010』（財団法人懷徳堂記念会、19～48頁、2010年11月）
- 6) 『日本史B』（実教出版社、218～275頁、2014年 1月）
- 7) 『日本近代の歴史 3 日清・日露戦争と帝国日本』（吉川弘文館、全243頁、2016年12月）
- 8) 『金森順次郎第十三代大阪大学総長回顧録』（大阪大学出版会、全184頁、2017年 3月）
- 9) 『明治期の地方制度と名望家』（吉川弘文館、全308頁、2017年10月）
- 10) 「名誉教授への聞き書き 川北稔名誉教授に聞く」（『大阪大学大学院文学研究科紀要』別冊、大阪大学共創機構社会学共創本部アーカイブズ、全74頁、2018年 3月）
- 11) 『岸本忠三第十四代大阪大学総長回顧録』（大阪大学出版会、全209頁、2018年 3月）
- 12) 飯塚一幸編『近代移行期の酒造業と地域社会－伊丹の酒造家小西家－』（吉川弘文館、全279頁、2021年11月）
- 13) 『日本史探究』（実教出版社、221～279頁、2023年 1月）

## 【論文】

- 1) 「連合町村会の展開と郡制の成立」(『日本史研究』326、日本史研究会、3～35頁、1989年10月)
- 2) 「『対外硬』派・憲政本党基盤の変容－京都府丹後地域を中心に－」(山本四郎編『近代日本の政党と官僚』東京創元社、371～444頁、1991年11月)
- 3) 「近代日本の青年団体－京都府丹後地域を事例に－」(『史林』第75巻第1号、史学研究会、1～41頁、1992年1月)
- 4) 「日露戦後の地域秩序と組合法」(『日本史研究』379、日本史研究会、112～137頁、1994年3月)
- 5) 「日清・日露戦争と農村社会」(井口和起編『近代日本の軌跡3 日清・日露戦争』吉川弘文館、122～148頁、1994年10月)
- 6) 「裁判制度形成期の代言人と地域－木村恕平・菊池侃二と丹後伊根浦との関係を中心に－」(朝尾直弘教授退官記念会編『日本社会の史的構造－近世・近代－』思文閣出版、337～356頁、1995年4月)
- 7) 「日清戦後の地方制度改革－府県制郡制改正をめぐる政党と官僚－」(『史林』第79巻第1号、史学研究会、1～31頁、1996年1月)
- 8) 「日清・日露戦間期の地方制度改革構想－市制町村制改正案の形成過程を中心に－」(山本四郎編『日本近代国家の形成と展開』吉川弘文館、186～226頁、1996年10月)
- 9) 「濃尾震災後の災害土木費国庫補助問題」(『日本史研究』412、日本史研究会、78～105頁、1996年12月)
- 10) 「田中良馬の思想遍歴について」(科学研究費補助金研究成果報告書、研究代表者菅原憲二『漁村文書の総合的研究』、129～140頁、1999年3月)
- 11) 「原忠順小考」(『葉隠研究』第49号、88～100頁、2003年3月)
- 12) 「明治中後期の知事と議会」(『日本史研究』488、日本史研究会、55～75頁、2003年4月)
- 13) 「京都府自由民権運動研究の新段階－国会開設運動の始まりをめぐる－」(『新しい歴史学のために』256号、京都民科歴史部会、1～13頁、2005年1月)
- 14) 「国会期成同盟第二回大会の再検討」(『九州史学』第143号、九州史学研究会、1～24頁、2005年12月)
- 15) 「日露戦後地域政治史研究の視角－京都府域を事例に－」(『新しい歴史学のために』263号、京都民科歴史部会、1～13頁、2007年3月)
- 16) 「佐賀の乱の再検討－周辺の視点から－」(『九州史学』第149号、九州史学研究会、13～35頁、2008年2月)

- 17) 「京都府庁文書の来歴をめぐって」(科学研究費補助金研究成果報告書『京都府行政文書を中心とした近代行政文書についての史料学的研究』(研究代表者小林啓治)、13～31頁、2008年3月)
- 18) 「自由党成立後の杉田定一」(『経済史研究』第12号、大阪経済大学日本経済史研究所、110～136頁、2009年2月)
- 19) 「京都府における国会開設運動の展開－私擬憲法案「大日本国憲法」の成立と沢辺正修－」(『史林』第92巻第2号、史学研究会、75～103頁、2009年3月)
- 20) 「日露戦後の舞鶴鎮守府と舞鶴港」(坂根嘉弘編『軍港都市史研究Ⅰ舞鶴編』、清文堂、93～127頁、2010年1月)
- 21) 「国会期成同盟第二回大会と憲法問題」(『大阪大学大学院文学研究科紀要』第51巻、49～85頁、2011年3月)
- 22) 「初期議会と民党」(明治維新史学会編『講座明治維新』第5巻立憲制と帝国への道、有志舎、53～86頁、2012年11月)
- 23) 「日清戦争論の現在－帝国化の起点をめぐって－」(秋田茂・桃木至朗編『グローバルヒストリーと帝国』、大阪大学出版会、214～238頁、2013年3月)
- 24) 「佐賀の乱後の憂国派」(『待兼山論叢』第47号、大阪大学文学会、1～23頁、2013年12月)
- 25) 「大阪大学に残る戦争遺跡」(木戸衛一編『平和研究入門』、大阪大学出版会、27～37頁、2014年4月)
- 26) 「原敬社長時代の『大阪新報』－日露戦争期を中心に－」(伊藤之雄編『原敬と政党政治の確立』、千倉書房、95～149頁、2014年7月)
- 27) 「地域社会の変容と地方名望家」(『歴史科学』219、大阪歴史科学協議会、18～31頁、2015年2月)
- 28) 「軍拡・軍縮と舞鶴鎮守府－三舞鶴町の盛衰－」(原田敬一編『地域のなかの軍隊4近畿古都・商都の軍隊』、吉川弘文館、113～140頁、2015年4月)
- 29) 「明治の技師山本小源太の軌跡－府県農事試験場から韓国統監府へ－」(今西一・飯塚一幸編『帝国日本の移動と動員』、大阪大学出版会、51～82頁、2018年1月)
- 30) 「日露戦争時の軍事郵便－陸軍歩兵中尉南檜一郎宛書簡を中心に－」(『枚方市史年報』21、1～15頁、2019年3月)
- 31) 「近代都市史研究の展開と原田都市史」(原田敬一編『近代日本の政治と地域』、吉川弘文館、1～20頁、2019年6月)
- 32) 「自治体史編纂から見た公文書保存」(大阪大学アーカイブズ編『アーカイブズとアーキビスト－記録を守り伝える担い手たち－』、大阪大学出版会、133～157頁、2021年3月)

- 33) 「文明開化と稲葉市郎右衛門」(京都府立大学文化遺産叢書第26集、山田洋一・東昇編『京丹後市久美浜町太刀宮文書(久美浜代官所郡中代等文書)・佐治家資料調査と御用留横断研究』、京都府立大学文学部歴史学科、24～28頁、2022年11月)
- 34) 「民力休養」(山口輝臣・福家崇洋編『思想史講義【明治篇Ⅱ】』、ちくま新書、75～90頁、2023年2月)

### 【資料集・自治体史・年表】

- 1) 山中永之佑監修、山中永之佑・中尾敏充・白石玲子・居石正和・飯塚一幸・奥村弘・馬場義弘編『近代日本地方自治立法資料集成』1〔明治前期編〕(弘文堂、全877頁、1991年10月)
- 2) 『網野町史』上巻(京都府竹野郡網野町、489～619頁、1992年3月)
- 3) 吉田清成関係文書研究会(代表山本四郎)『吉田清成関係文書』一書翰編1(思文閣出版、全360頁、1993年12月)
- 4) 山中永之佑監修、山中永之佑・中尾敏充・白石玲子・居石正和・飯塚一幸・奥村弘・三阪佳弘・中野目徹・馬場義弘・住友陽文編『近代日本地方自治立法資料集成』2〔明治中期編〕(弘文堂、全683頁、1994年2月)
- 5) 『加茂町史』第三巻近現代編(京都府相楽郡加茂町、10～42頁、1994年3月)
- 6) 山中永之佑監修、山中永之佑・中尾敏充・白石玲子・居石正和・飯塚一幸・奥村弘・三阪佳弘・中野目徹・馬場義弘・住友陽文・高岡裕之・古田愛編『近代日本地方自治立法資料集成』3〔明治後期編〕(弘文堂、全878頁、1995年2月)
- 7) 山中永之佑監修、山中永之佑・中尾敏充・白石玲子・居石正和・飯塚一幸・奥村弘・三阪佳弘・中野目徹・馬場義弘・住友陽文・高岡裕之・古田愛編『近代日本地方自治立法資料集成』4〔大正前期編〕(弘文堂、全963頁、1996年2月)
- 8) 吉田清成関係文書研究会(代表山本四郎)『吉田清成関係文書』二書翰編2(思文閣出版、全367頁、1997年2月)
- 9) 山中永之佑監修、山中永之佑・中尾敏充・白石玲子・居石正和・飯塚一幸・奥村弘・三阪佳弘・中野目徹・馬場義弘・住友陽文・高岡裕之・坂江愛・林真貴子編『近代日本地方自治立法資料集成』5〔昭和前期編〕(弘文堂、全925頁、1998年2月)
- 10) 吉田清成関係文書研究会(代表山本四郎)『吉田清成関係文書』三書翰編3(思文閣出版、全381頁、2000年8月)
- 11) 『宮津市史』史料編第四巻(宮津市、99～194、208～216、548～563、640～687、723～769、800～835、904～949頁、2001年2月)

- 12) 『佐賀県議会史続二』(佐賀県議会、1～139、674～871頁、2002年3月)
- 13) 『新修彦根市史』第8巻史料編近代一(彦根市、239～449、604～622、650～664、670～687、852～874、892～898頁、2003年3月)
- 14) 『久美浜町史』資料編(京都府熊野郡久美浜町、559～880頁、2004年2月)
- 15) 『宮津市史』通史編下巻(宮津市、593～597、619～624、626～665、670～683、767～781、803～819、921～928、937～943頁、2004年5月)
- 16) 『新修彦根市史』第9巻史料編近代2・現代(彦根市、40～109、178～179、186～187、197、202～205、209～212、297～303、305～310、324～330頁、2005年2月)
- 17) 鳥栖市誌資料編第10集『新聞でみる鳥栖の変遷1』(鳥栖市、全511頁、2006年3月)
- 18) 伊万里市史編さん委員会編『伊万里市史』資料編(伊万里市、411～560頁、2007年3月)
- 19) 伊万里市史編さん委員会編『伊万里市史』近世近代編(伊万里市、645～671、747～798、891～911、969～996頁、2007年3月)
- 20) 吉田清成関係文書研究会(代表山本四郎)『吉田清成関係文書』四書翰篇4(思文閣出版、全458頁、2008年8月)
- 21) 彦根市史編集委員会編『新修彦根市史』第三巻通史編近代(彦根市、259～261、331～363、369、401～404、522～526、538～558頁、2009年1月)
- 22) 鳥栖市教育委員会編『鳥栖市誌』第4巻近代・現代編(鳥栖市、13～25、87～103、193～209、277～298頁、2009年3月)
- 23) 基山町史編さん委員会・基山町史編集委員会編『基山町史』下巻(基山町、199～235頁、2009年9月)
- 24) 家近良樹・飯塚一幸編『杉田定一関係文書史料集』第一巻(大阪経済大学日本経済史研究所、全309頁、2010年3月)
- 25) 佐賀近代史研究会編『佐賀新聞に見る佐賀近代史年表』明治編下(佐賀新聞社、全507頁、2011年3月)
- 26) 京丹後市編さん委員会編『図説京丹後市の歴史』(京丹後市長中山泰、99～103、105～115、117～123、125～134頁、2012年10月)
- 27) 吉田清成関係文書研究会(代表山本四郎)『吉田清成関係文書』五書類編1(思文閣出版、全567頁、2013年2月)
- 28) 家近良樹・飯塚一幸編『杉田定一関係文書史料集』第二巻(大阪経済大学日本経済史研究所、全350頁、2013年3月)
- 29) 飯塚一幸監修『新修摂津市史史料集1 昭和28年台風13号災害写真集』(摂津市、全66頁、2013年10月)

- 30) 佐賀近代史研究会編『佐賀近代史年表大正編』大正元年8月～大正2年12月（佐賀大学地域学歴史文化研究センター、全160頁、2014年3月）
- 31) 枚方市史編纂委員会編『新版郷土枚方の歴史』（枚方市教育委員会、206～266頁、2014年3月）
- 32) 佐賀近代史研究会編『佐賀近代史年表大正編』大正3年1月～大正3年12月（佐賀大学地域学歴史文化研究センター、全109頁、2015年3月）
- 33) 吉田清成関係文書研究会（代表山本四郎）『吉田清成関係文書』六書類篇2（思文閣出版、全648頁、2016年1月）
- 34) 大阪大学会沢正志斎書簡研究会（代表飯塚一幸）編『会沢正志斎書簡集』（思文閣出版、全327頁、2016年3月）
- 35) 佐賀近代史研究会編『佐賀近代史年表大正編』大正4年1月～大正4年12月（佐賀大学地域学歴史文化研究センター、全135頁、2016年3月）
- 36) 佐賀近代史研究会編『佐賀近代史年表大正編』大正5年1月～大正5年12月（佐賀大学地域学歴史文化研究センター、全169頁、2018年3月）
- 37) 吉田清成関係文書研究会（代表山本四郎）『吉田清成関係文書』七書翰篇5・書類篇3（思文閣出版、全573頁、2018年10月）
- 38) 飯塚一幸監修、枚方市教育委員会文化財課編『禁野火薬庫爆発遭難手記』（枚方市教育委員会、全244頁、2019年8月）
- 39) 佐賀近代史研究会編『佐賀近代史年表大正編』大正6年1月～大正6年12月（佐賀大学地域学歴史文化研究センター、全165頁、2020年3月）
- 40) 八尾市史編纂委員会・八尾市史編集委員会編『新版八尾市史』近代・現代史料編（八尾市、44～305、392～506頁、2021年3月）
- 41) 佐賀近代史研究会編『佐賀近代史年表大正編』大正7年1月～大正7年12月（佐賀大学地域学歴史文化研究センター、全193頁、2022年3月）
- 42) 摂津市史編さん委員会編『新修摂津市史』第二巻近世・近代（摂津市、474～526、558～598、637～647、664～692、701～726、800～814、841～853頁、2023年3月）

### 【史料目録】

- 1) 京都府古文書調査報告書『丹後国与謝郡宮津元結屋三上家古文書目録』（京都府教育委員会、全338頁、1988年3月）
- 2) 京都府古文書調査報告書『丹後漁業関係古文書目録』（京都府教育委員会・京都府立丹後郷土資料館、全528頁、1994年3月）

- 3) 田中家文書調査会編『愛媛県宇和島市三浦田中家文書目録』(田中家資料保存委員会、全321頁、1995年8月)
- 4) 田中家文書調査会編『愛媛県宇和島市三浦田中家文書目録(第二集)』(田中家文書調査会、全427頁、1999年3月)
- 5) 『丹後国与謝郡宮津元結屋三上家古文書目録(続)』(京都府教育委員会、全236頁、2001年2月)
- 6) 田中家文書調査会編『愛媛県宇和島市三浦田中家文書目録第三集』(田中家史料保存委員会、全341頁、2003年7月)
- 7) 飯塚一幸編『小城鍋島文庫目録近代文書編』(佐賀大学文系基礎学研究プロジェクト、全117頁、2005年3月)
- 8) 田中家文書調査会編『愛媛県宇和島市三浦田中家文書目録第四集』全二冊(田中家文書保存委員会、全686頁、2006年7月)
- 9) 菅原憲二編『丹後国加佐郡上安久村安久家文書目録』(千葉大学文学部史学科菅原研究室、全429頁、2007年3月)
- 10) 『京都府熊野郡久美浜 稲葉家資料調査報告書』(第一分冊～第四分冊)(京丹後市教育委員会、第一分冊1～576頁、第二分冊577～1168頁、第三分冊1169～1648頁、第四分冊1649～1663頁、2008年3月)
- 11) 菅原憲二編『丹後国加佐郡上安久村安久家文書目録』第二集(千葉大学文学部史学科菅原研究室、全135頁、2009年3月)
- 12) 菅原憲二編『丹後国加佐郡上安久村安久家文書目録』第三集(千葉大学文学部史学科菅原研究室、全133頁、2010年3月)
- 13) 菅原憲二編『丹後国加佐郡上安久村安久家文書目録』第五集(千葉大学文学部史学科菅原研究室、全131頁、2012年3月)
- 14) 菅原憲二編『丹後国加佐郡上安久村安久家文書目録』第六集(全409頁、2019年3月)

### 【書評・紹介】

- 1) 「紹介 中島利雄・原田久美子編『日本民衆の歴史10 丹後に生きる－京都の人びと』(三省堂)」(『日本史研究』311、日本史研究会、78～79頁、1988年7月)
- 2) 「書評 安在邦夫著『立憲改進黨の活動と思想』(校倉書房)」(『日本歴史』第547号、日本歴史学会、106～107頁、1993年12月)
- 3) 「書評 神立春樹著『近代岡山県地域の都市と農村』(御茶の水書房)」(『岡山地方史研究』74、岡山地方史研究会、18～21頁、1994年6月)

- 4) 「紹介 上条宏之著『変革における民衆－『夜明け前』の実像－』(銀河書房)」(『日本史研究』396、日本史研究会、84～86頁、1995年8月)
- 5) 「書評 困民党研究会編『民衆運動の＜近代＞』(現代企画室)」(『歴史学研究』678、歴史学研究会、70～73頁、1995年11月)
- 6) 「書評 山中永之佑著『近代市制と都市名望家－大阪市を事例とする考察－』(大阪大学出版会)」(『日本史研究』411、日本史研究会、80～87頁、1996年11月)
- 7) 「書評 阿部恒久著『近代日本地方政党史論－「裏日本」化の中の新潟県政党運動－』(芙蓉書房出版)」(『歴史評論』574、歴史科学協議会、90～94頁、1998年2月)
- 8) 「書評 高久嶺之介著『近代日本の地域社会と名望家』(柏書房)」(『日本史研究』453、日本史研究会、76～84頁、2000年5月)
- 9) 「『本庄村史歴史編－神戸市東灘区深江・青木・西青木のあゆみ－』をめぐって」(『歴史科学』199、大阪歴史科学協議会、12～18頁、2009年11月)
- 10) 「書評 広川禎秀編『近代大阪の地域と社会変動』(部落問題研究所)」(『部落問題研究』191、部落問題研究所、43～58頁、2009年12月)
- 11) 「書評 竹田健二著『市民大学の誕生－大坂学問所懷徳堂の再興－』(大阪大学出版会)」(『懷徳』79、懷徳堂記念会、43～51頁、2011年1月)
- 12) 「書評 居石正和著『府県制成立過程の研究』(法律文化社)」(『日本史研究』586、日本史研究会、54～62頁、2011年6月)
- 13) 「書評 中西啓太著『町村「自治」と明治国家－地方行財政の歴史的意義－』(山川出版社)」(『歴史学研究』988、歴史学研究会、59～62頁、2019年10月)
- 14) 「書評 中元崇智著『明治期の立憲政治と政党』(吉川弘文館)」(『歴史評論』838、歴史科学協議会、90～94頁、2020年2月)
- 15) 「書評 前田亮介著『全国政治の始動－帝国議会開設後の明治国家－』(東京大学出版会)」(『日本史研究』707、日本史研究会、68～75頁、2021年7月)
- 16) 「書評 三村昌司著『日本近代社会形成史 議場・政党・名望家』(東京大学出版会)」(『日本歴史』888、日本歴史学会、101～103頁、2022年5月)

#### 【学会動向等】

- 1) 「1993年の歴史学界－回顧と展望－日本近現代三」(『史学雑誌』第103編第5号、150～152頁、1994年5月)
- 2) 「二〇一五年度日本史研究会大会報告批判」(『日本史研究』644、日本史研究会、60～66頁、2016年4月)

- 3) 「2016年の歴史学界－回顧と展望－日本近現代三政治・社会（明治）」（『史学雑誌』第126編第5号、148～152頁、2017年5月）

### 【その他】

- 1) 「近代化で村はどのように変わったか ●文明開化と農村社会」（吉村武彦・池享・吉田伸之・原田敬一編著『日本の歴史を解く100話』、文英堂、324～327頁、1994年9月）
- 2) 「原敬 ●原はどのような政策を行ったか」（吉村武彦・池享・吉田伸之・原田敬一編著『日本の歴史を解く100人』、文英堂、352～355頁、1995年9月）
- 3) 「郡制」、「郡制廃止問題」、「郷村社」、「白根専一」、「部落」、「部落有財産」、「前田正名」（朝尾直弘・宇野俊一・田中琢編『新版日本史辞典』、角川書店、326、366、544、926、927、978頁、1996年11月）
- 4) 「近世文書あるところ近代文書あり」（アエラムック『日本史がわかる。』、朝日新聞社、46～48頁、2000年11月）
- 5) 「「日本海時代」の夢と宮津」（宮津市教育委員会文化振興室『市史編さんだより』第17号、4～5頁、2001年3月）
- 6) 酒田正敏著『近代日本における対外硬運動の研究』（東京大学出版会）（黒田日出雄・加藤友康・保谷徹・加藤陽子編『日本史文献事典』弘文堂、541～542頁、2003年12月）
- 7) 「丹後における国会開設運動の成立と展開」市制五十周年特別記念事業 宮津市歴史資料館二〇〇四年秋期特別展図録『天橋義塾－小室信介と沢辺正修－』、宮津市歴史資料館、5～10頁、2004年10月）
- 8) 「佐賀県の歴史環境」（環境教育開発研究プロジェクト成果報告書『「総合的環境教育佐賀プラン」開発の基礎研究』、82～101頁、2005年3月）
- 9) 「民権ネットワーク【京都府】二〇〇八年の研究状況」（町田市立自由民権資料館紀要『自由民権』第22号、町田市教育委員会、107～108頁、2009年3月）
- 10) コラム「舞鶴鎮守府と東郷平八郎」（坂根嘉弘編『軍港都市史研究Ⅰ舞鶴編』、清文堂、128～132頁、2010年1月）
- 11) 「民権ネットワーク【京都府】二〇〇九年の研究状況」（町田市立自由民権史料館紀要『自由民権』第23号、町田市教育委員会、118～120頁、2010年3月）
- 12) 「香月経五郎」（宮地正人・櫻井良樹・佐藤能丸編『明治時代史大辞典』第一巻、吉川弘文館、521～522頁、2011年12月）
- 13) 「民権ネットワーク【京都府】二〇一〇年・二〇一一年の研究状況」（町田市立自由民権史料館紀要『自由民権』第25号、町田市教育委員会、128～132頁、2012年3月）

- 14 「石濱文庫の書簡類の整理をめぐって」(平成23年度大阪大学文学研究科共同研究研究成果報告書『石濱文庫の学際的研究—大阪の漢学から世界の東洋学へ—』、4頁、2012年3月)
- 15 「高校日本史教科書の改定を巡って考えたこと」(大阪歴史教育者協議会『大阪の歴史教育』第45号、3～18頁、2012年5月)
- 16 「島義勇」「鍋島直大」「鍋島直彬」(宮地正人・櫻井良樹・佐藤能丸編『明治時代史大辞典』第二巻、吉川弘文館、192、976～977頁、2012年7月)
- 17 「秀島家良」(宮地正人・櫻井良樹・佐藤能丸編『明治時代史大辞典』第三巻、吉川弘文館、227頁、2013年2月)
- 18 講演録「記念講演『維新雑誌』の可能性」(『市史研究ふくおか』第8号、福岡市博物館市史編さん室、64～73頁、2013年3月)
- 19 コラム「杉田定一」(高島千代・田崎公司編著『自由民権<激化>の時代—運動・地域・語り—』、日本経済評論社、117～118頁、2014年10月)
- 20 「〔報告〕阪大史学系の新しい教育」(桃木至朗・堤一昭・秋田茂との共同報告)(『史学雑誌』第124編第1号、史学会、94～95頁、2015年1月)
- 21 「阪大史学系の歴史教育改革」(桃木至朗・堤一昭・秋田茂との共同執筆)(大阪大学歴史教育研究会・公益財団法人史学会編『史学会125周年リレーシンポジウム2014 教育が開く新しい歴史学』山川出版社、10～35頁、2015年11月)
- 22 「自由党「広域蜂起派」と愛知県の自由民権運動」(愛知県史編さん委員会編『愛知県史』通史編6近代1の「愛知県史のしおり」、愛知県、1～4頁、2017年3月)
- 23 「原敬の白露戦争認識」(『宝積』第11号、原敬を想う会、4～5頁、2017年3月)
- 24 「書評へのリプライ」(『歴史科学』238、大阪歴史科学協議会、34～39頁、2019年9月)
- 25 「〔巨大塩田地主野崎家史料の総合的研究〕プロジェクトの概要」「塩業界の巨人 野崎武吉郎」(『近代岡山殖産に挑んだ人々2』、公益財団法人山陽放送学術文化・スポーツ振興財団、108～112、138～160頁、2022年2月)
- 26 「小西新右衛門氏文書の概要及び萬歳蔵文書の科研費調査」(新宮由真氏と共著)(『伊丹市史料集14小西酒造萬歳蔵史料 近世伊丹の学び舎—明倫堂・橋本香坡書簡集—』、伊丹市都市活力部まち資源室文化振興課、127～129頁、2023年3月)
- 27 「書評へのリプライ」(『歴史科学』253、大阪歴史科学協議会、58～63頁、2023年5月)

## 岡田禎之 履歴・研究業績

### 略歴

- 1983年3月 奈良県立奈良高等学校卒業  
 1983年4月 大阪大学文学部入学  
 1987年3月 大阪大学文学部文学科卒業  
 1987年4月 大阪大学大学院文学研究科博士前期課程入学  
 1989年4月 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程入学  
 1991年3月 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学  
 1991年4月 大阪大学助手文学部（英語学講座）  
 1993年4月 岡山大学講師教養部（英語科）  
 1994年10月 岡山大学講師文学部（言語文化学科）  
 1996年10月 金沢大学助教授文学部（英語英米文学科）  
 1998年4月 神戸市外国語大学外国語学部助教授（英米学科）  
 2001年9月 大阪大学より博士（文学）を取得  
 2005年10月 大阪大学大学院文学研究科助教授（西洋文学・語学講座）  
 2010年4月 大阪大学大学院文学研究科教授（西洋文学・語学講座）  
 2013年4月 大阪大学大学院文学研究科教授（言語生態論コース）  
 2022年4月 大阪大学大学院人文学研究科教授（人文学専攻 比較・対照言語学コース）  
 2024年3月まで

### 学会役員等

- （1）日本英語学会事務局書記 大会準備委員会担当 1998/4～2000/3  
 （2）日本英文学会 編集委員 2007/4～2010/3  
 （3）日本英文学会関西支部 編集委員 2007/4～2010/3, 2012/4～2014/3  
 （4）日本英文学会関西支部 理事 2013/4～2015/3, 2015/4～2017/3, 2017/4～2019/3  
 （5）日本英語学会 編集委員会外部査読委員 2009/9～2010/6, 2010/9～2011/6  
 （6）日本英語学会 編集委員 2011/7～2013/9, 2019/7～2024/2  
 （7）日本英語学会 副編集委員長 2019/11～2021/8  
 （8）日本英語学会 編集委員長 2021/9～2024/2  
 （9）日本英語学会 評議員 2013/4～現在に至る  
 （10）日本英語学会事務局長補佐 2013/4～2013/8

- (11) 日本英語学会 事務局長 2013/9 ～ 2015/4
- (12) 日本英語学会 学会賞委員 2013/9 ～ 2015/3, 2020/4 ～ 2023/11
- (13) 日本英語学会 学会賞選考委員 2015/7 ～ 2015/8
- (14) 日本英語学会 監事 2016/4 ～ 2018/3
- (15) 日本英語学会 理事 2018/4 ～ 2022/3
- (16) 日本認知言語学会 大会発表査読委員 2016/4 ～ 2018/3, 2019/4 ～ 2021/3
- (17) 日本認知言語学会 大会優秀発表賞審査委員 2017/9
- (18) 日本語用論学会外部査読委員 2012/9
- (19) 言語系学会連合 監査委員 2016/4 ～ 2018/3
- (20) 関西言語学会 査読委員 2017/10, 2018/10
- (21) Ad hoc reviewer for WORD (International Linguistic Association) 2000/10
- (22) Ad hoc reviewer for *Japanese/Korean Linguistics* 23 ～ 30, 2013/6 ～ 2022/9
- (23) Ad hoc reviewer for *International Cognitive Linguistics Conference* 15, 2018/11
- (24) 文部科学省 大学設置・学校法人審議会専門委員（文学専門委員会） 2015/11 ～ 2018/10
- (25) 日本学術振興会 科学研究費委員会専門委員 2013/12 ～ 2014/11
- (26) 同 特別研究員等審査会委員（書面審査委員 DC2担当） 2020/7 ～ 2022/6
- (27) 同 特別研究員等審査会委員（書面審査委員 外国人特別研究員（一般）） 2022/5 ～ 2022/6
- (28) 財団法人語学教育研究所 市河賞選考委員会委員 2016/4 ～ 2017/3

#### 受賞等

- (1) 第37回 市河賞 財団法人 語学教育研究所 2003.
- (2) 10 papers selection: *ANNUAL REPORT of Osaka university academic achievement 2009-2010*. 大阪大学2010.

#### 著書

- (1) 『現代英語の等位構造』 大阪大学出版会 日本学術振興会研究成果公開促進費補助金 交付図書 課題番号145152 x+336頁 2002.12.10

#### 共著

- (1) 『構文間の交替現象』 ネイティブ英文法 第5巻 東京：朝倉書店 第6章から第10章

執筆担当（共著者：岸本秀樹）2020.12.1

### 共編著

- （１）『意味と形式のはざま』（共編著者：大庭幸男）阪大英文学会叢書第6巻 vii+305頁  
2011.4.25 東京：英宝社.
- （２）*Osaka University Papers in English Linguistics*. Vol. 19.（共編著者：田中英理）243頁.  
2019.12 大阪大学文学部英語学研究室.

### 編著

- （１）*Osaka University Papers in English Linguistics*. Vol.16 228頁 2013.9（編者：岡田禎之）
- （２）『言葉のしんそう（深層・真相）』—大庭幸男教授退職記念論文集— vi+681頁 2015.3.30  
東京：英宝社 （編者：岡田禎之）

### 論文（全て単著）

- （１）“Empathy and Coreference of Pronominals.”（『待兼山論叢』第23号 文学篇）33  
-48. 大阪大学文学部 1989.12.25
- （２）「結果の二次的述語の拡張行為について」（*Osaka Literary Review* No.29）51-63. 大阪  
大学大学院英文学談話会 1990.12.20
- （３）“On Depictive Small Clauses.”（『成田義光教授還暦祝賀論文集』）187-200. 英宝社  
1992.7.20
- （４）「再帰代名詞の分離先行詞についての一考察」（*Osaka Literary Review* No.31）23-32.  
大阪大学大学院英文学談話会 1992.12.20
- （５）「英語のGapping現象について（１）」（『岡山大学教養部紀要』第34号）123-141. 岡山  
大学教養部 1994.1.28
- （６）「英語のGapping現象について（２）」（『岡山大学教養部紀要』第35号）119-137. 岡山  
大学教養部 1994.9.27
- （７）「Iconicity に関する一考察——「go/come + 動詞構文」を例として」（『岡山大学文学  
部紀要』第23号）153-172. 岡山大学文学部 1995.7.18
- （８）「代用表現における他動性について」（『岡山大学文学部紀要』第25号）121-141. 岡山大  
学文学部 1996.7.15
- （９）“On the Parallelism between Sentence-formation and Text-formation with Special  
Reference to Coordinate Structures.”（*Lingua* 103/4）225-254. The Netherlands:

- Elsevier Science Publications. 1997.12.
- (10) 「節代用表現it/soの分布について」(『金沢大学文学部論集：言語・文化編』第18号) 29-52. 金沢大学文学部 1998.2.15
- (11) “Reflexive Pronouns with Split Antecedents.” (*Journal of Pragmatics* 30/1) 59-84. The Netherlands: Elsevier Science Publications. 1998.7.
- (12) 「接辞形態素の等位接続可能性について (1)」(『神戸外大論叢』第49巻6号) 85-100. 神戸外大研究会 1998.11.30
- (13) “On the Conjoinability of Affixal Morphemes in English.” (*Word* 50/3) 339-363. New York: International Linguistic Association. 1999. 12.
- (14) 「接辞形態素の等位接続可能性について (2)」(『神戸外大論叢』第50巻7号) 57-76. 神戸外大研究会 1999.12.20
- (15) “On the Distribution and Function of the Modifiers *Respective* and *Respectively*.” (*Linguistics* 37/5) 871-903. Berlin: Mouton de Gruyter 1999. 12.
- (16) 「Right Node Raising構文に関する一考察」(『神戸外大論叢』第51巻1号) 25-47. 神戸外大研究会. 2000.9.30
- (17) 「英語等位構造の実証的研究」大阪大学文学研究科 博士学位申請論文 2001.9.30
- (18) 「Sloppy Identity Readingに関する一考察」(『神戸外大論叢』第52巻2号) 93-117. 神戸外大研究会 2001.9.30
- (19) 「Sloppy identity readingに関する一考察 (補遺)」(『神戸外大論叢』第53巻3号) 71-85. 神戸外大研究会 2002.9.30
- (20) 「再帰代名詞と相互代名詞の機能的非対称性について」(『言葉のからくり—河上誓作教授退官記念論文集』) 657-669. 英宝社 2004.3.15
- (21) 「文の結束関係と残留要素の相関関係について (その1)」(『神戸外大論叢』第55巻3号) 47-67. 神戸外大研究会 2004.9.30
- (22) 「文の結束関係と残留要素の相関関係について (その2)」(『神戸外大論叢』第56巻2号) 19-35. 神戸外大研究会 2005.9.30
- (23) 「結束関係と統語現象」(『大阪大学大学院文学研究科紀要』47巻) 87-121. 大阪大学大学院文学研究科 2007.3.20
- (24) 「文内参与者の概念拡張可能性について」(河上誓作・谷口一美 (編) 『ことばと視点』) 45-57. 英宝社 2007.11.15
- (25) 「比較基準要素の概念拡張について」(『待兼山論叢』41巻 文学篇) 1-17. 大阪大学文学会 2007.12.25

- (26) “Comparative Standards and the Feasibility of Conceptual Expansion.” (*Cognitive Linguistics* 20/2) 395-423. Berlin: Mouton de Gruyter. 2009.10.
- (27) 「参与者の概念拡張と比較文形成」(坪本篤郎、和田尚明、早瀬尚子(編)『内と外の言語学』) 23-53. 開拓社. 2009.10.20
- (28) 「概念拡張とテキストの結束関係」(『玉井暁先生退官記念論文集』) 139-149. 英宝社. 2010.3.25
- (29) 「名詞修飾表現における意味に基づく省略現象」(大庭幸男・岡田禎之(編著)『意味と形式のはざま』) 124-135. 英宝社. 2011.4.25
- (30) 「名詞句概念拡張に認められる一般性と特殊性」『大阪大学大学院文学研究科紀要』52巻 123-149. 大阪大学大学院文学研究科2012.3.15
- (31) “(Ir)regularity of Conceptual Expansions in Adjunct Nominals” *OUPEL* 16: 161-185. (大阪大学大学院文学研究科英語学研究室論集) 2013.9.
- (32) 「名詞の語彙概念拡張に認められる非対称性」『待兼山論叢』第47号. 文化動態論篇: 41-62. 大阪大学文学会. 2013.12.25
- (33) 「名詞の語彙概念拡張と歴史的変遷に関する初期的調査」『言葉のしんそう(深層・真相)-大庭幸男教授退職記念論集』597-608. 東京: 英宝社. 2015.3.30
- (34) 「日英語名詞表現の語彙概念拡張と項・付加詞の非対称性」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第56号. 21-60. 2016.3.31
- (35) 「拡張概念の定着化と項・付加詞の解釈分布について」『認知言語学論考』No. 13. 107-137. 東京: ひつじ書房. 2016.9.9
- (36) 「叙述文脈と連語文脈における概念拡張分布の相関について」『待兼山論叢』第51号. 文化動態論篇: 1-19. 大阪大学文学会. 2017.12.25
- (37) 「身体部位名詞の概念拡張と連語環境における意味分布の初期調査」『ことばのパスパクティブ(中村芳久教授退職記念論文集)』174-185. 東京: 開拓社. 2018.3.20
- (38) 「高等学校・英語科授業における英語の補部構造の教授に関する一提案: 事態の結束性と記号上の距離に焦点づけて」『大阪大学教育学年報』23号 169-179. 大阪大学大学院人間科学研究科. 2018.3.31
- (39) 「認知言語学は言語普遍性、個別言語の特殊性をどのように考えるのだろうか?」『認知言語学とは何か?』157-176. 東京: くろしお出版. 2018.6.1
- (40) 「英語の補文形式と事態の統合について」『英語学を英語授業に活かすー市河賞の精神(こころ)を受け継いでー』(語学教育研究所) 158-176. 東京: 開拓社. 2018.9.25
- (41) “Nominal Conceptual Expansions in Predicational and Modificational Contexts.”

- OUPEL 19: 125-149. (大阪大学大学院文学研究科英語学研究室論集) 2019.12
- (42) 「因果的結束関係を表す副詞句と語彙概念拡張」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第60号. 1-40. 大阪大学大学院文学研究科. 2020.3.25
- (43) 「因果関係の副詞句における概念拡張とofの脱落について」『英語学の深まり・英語学からの広がり』阪大英文学会叢書10. 120-131. 東京：英宝社. 2020.3.30
- (44) “Category-free Complement Selection in Causal Adjunct Phrases.” *English Language and Linguistics* 25/4: 719-741. Cambridge: Cambridge University Press. 2020.9.8
- (45) 「*Because* X 構文の歴史的変遷について」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第61号. 23-47. 大阪大学大学院文学研究科. 2021.3.22
- (46) 「因果関係を表す接続詞に見られる等位構造」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第62号. 73-95. 大阪大学大学院文学研究科. 2022.3.22
- (47) 「日本語における因果関係接続表現による等位構造の認可について」『待兼山論叢』第56号. 文化動態論篇：33-58. 大阪大学文学会. 2022.12.25
- (48) 「結束構造の種類と従属接続詞の等位構造」『ことばの謎に挑む—高見健一教授に捧げる論文集—』184-194. 開拓社. 2023.6.30
- (49) 「英仏独語における因果関係接続詞の等位接続構造について」『関西英文学研究』17号. 65-71. 『英文学研究支部統合号』第16巻 (217-223). 日本英文学会 2024.1.20

## 翻訳

- (1) 『認知意味論——言語から見た人間の心』[事例研究Ⅱ OVER] 共訳 紀伊國屋書店 1993.1.15 (原著名: Lakoff, G. (1987). *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. The University of Chicago Press. 614 + xvii pp.)

## 辞書項目執筆

- (1) 『英語学用語辞典』荒木一雄編 共著 三省堂出版 1999.1.10. x+900頁 (執筆者203名)
- (2) 『ユースプログレッシブ英和辞典』八木克正監修 共著 小学館 2004.4.1. (副詞担当) xii+2099頁 (編集・執筆者 34名)
- (3) 『英語多義ネットワーク辞典』瀬戸賢一監修 共著 小学館 2007.3.20 1103頁 (執筆者 22名)
- (4) 『最新英語学・言語学用語辞典』中野弘三他監修 共著 開拓社 2015.11.25 xii+536頁 (執筆者 181名)

- (5) 『正しく書いて読むための英文法用語辞典』 畠山雄二監修 共著 朝倉書店 2019. 9.15  
(第8章「修飾」担当 pp.239-266) vi+318頁(執筆者 8名)

#### 書評・雑誌記事執筆・プロシーディングス等

- (1) 「等位構造制約に関するアンケート調査とその結果」(研究資料 No.125) 共著 神戸商科大学経済研究所 1992.2.10
- (2) 「二次的述語の位置と意味上の主語について」(『英語青年』138巻9号) 448 研究社 1992.12.1
- (3) Lappin, Shalom and Elabbas Benmamoun (eds.) *Fragments: Studies in Ellipsis and Gapping*. (『英文学研究』77巻1号) 77-81. 日本英文学会 2000.9.30
- (4) 「副詞respectivelyの分布と参加者のランキング」(『英語青年』148巻9号) 578-579. 研究社 2002.12.1
- (5) 「結束関係と残留要素の分布について」(『英語青年』150巻12号 特集: 英文法研究---理論と事実の節点を求めて) 731-734. 研究社 2005.3.1
- (6) 「結束関係と統語現象(要約)」(『(2006年度日本英文学会) 第78回大会Proceedings』173-175. 2006.9.10
- (7) 「高見健一・久野すすむ著: 日本語機能的構文研究」(『英語教育』55巻12号) 96. 大修館書店 2007.1.1
- (8) 「比較対象表現の形式と意味のミスマッチ」(『英語青年』152巻11号 特集: 形式と意味のミスマッチ) 656-658 研究社 2007.2.1
- (9) 「結束構造から見る文法」Andrew Kehler, *Coherence, Reference and the Theory of Grammar*. (『関西英文学研究』1巻) 153-163. 日本英文学会関西支部 2007.12.14
- (10) 「名詞の語彙概念拡張と項・付加詞の非対称性」(日本英文学会関西支部第7回大会Proceedings) 『日本英文学会2012年度支部大会Proceedings』203-204. 2013.9.15
- (11) 「日英語の語彙概念拡張に関する一考察」(日本英文学会北海道支部59回大会Proceedings) 『日本英文学会2014年度支部大会Proceedings』109-110. 2015.9.15
- (12) 「時制と時間」(『語研ジャーナル』第15号 特別寄稿) 51-54. 語学教育研究所: 東京. 2016.11.19
- (13) 「形が違えば意味も違う!」 *News Letter* 33: 5-12. 武庫川女子大学英文学会 2017.3.15

#### シリーズ本監修

- (1) 『最新英語学・言語学シリーズ』計22巻 東京: 開拓社. 2020 ~ 出版継続中(共同監修者:

加賀信広、西岡宣明、野村益寛、岡崎正男、田中智之) このうち監修を担当するのは、  
8巻から18巻までの11巻

#### 口頭発表および講演

- (1) 「小節構文のコントロール関係」日本英語学会第7回大会. (神戸大学) 1989.11.19
- (2) 「二次述語の構造に関する一考察」KATL研究会例会 (大阪大学) 1990.5. 26
- (3) 「等位構造制約に関する一考察」KATL研究会例会. (大阪大学) 1991.3.9
- (4) 「テキスト形成と等位構造制約」日本英文学会第63回全国大会 シンポジウム「機能的  
文法分析の諸相」講師として. (明治大学) 1991.5.19
- (5) 「Gapping現象について」阪大英文学会. (大阪大学) 1993.10.30
- (6) 「文レベルとテキストレベルの並行性に関する一考察」岡山英文学会. (岡山大学)  
1995.9.17
- (7) 「go/come + 動詞構文に関する一考察」広島大学言語研究会例会. (広島大学)  
1996.5.18
- (8) 「接辞形態素の等位接続可能性について」金沢大学英文学会. (金沢大学) 1997.12.13
- (9) 「接辞形態素の等位接続構造に関する一考察」神戸外大言語学フォーラム. (神戸市外  
国語大学) 1998.7.4
- (10) 「RespectiveとRespectivelyの分布について」神戸外大言語学フォーラム. (神戸市外  
国語大学) 1999.9.25
- (11) 「代用表現と他動性について」神戸外大言語学フォーラム. (神戸市外国語大学)  
2000.10.28
- (12) 「Sloppy Identity Readingに関する一考察」神戸外大言語学フォーラム. (神戸市外国  
語大学) 2001. 7.7
- (13) 「再帰代名詞と相互代名詞の機能的相違」神戸外大言語学フォーラム. (神戸市外国語  
大学) 2002.10.5
- (14) 「照応表現と先行詞のタイプについて」神戸外大言語学フォーラム. (神戸市外国語大学)  
2003.9.27
- (15) 「文の結束関係と残留要素の相関関係について」神戸外大言語学フォーラム. (神戸市  
外国語大学) 2004. 10.9
- (16) 「結束関係と削除現象」阪大英文学会. (大阪大学) 2005.11.5
- (17) 「結束関係と統語現象」日本英文学会全国大会 (シンポジウム「形式と意味の接点」講  
師として) (中京大学) 2006.5.27

- (18) 「英語学の演習」阪大英文学会（シンポジウム「英米文学の演習・英語学の演習」講師として）（大阪大学）2006.11.11
- (19) “Conceptual expansion and parallelism in comparison” ICLC 10. Krakow, Poland. Jagiellonian University. 2007.7.16
- (20) 「参加者の概念拡張と語彙統語的、構文的、結束構造的要因」（筑波大学ワークショップ（科学研究費 基盤（B））「談話と文法」講師として）（筑波大学）2008.3.8
- (21) “(Ir)regularity of conceptual expansion of causal adjuncts” ICLCE4 Osnabrück, Germany. Osnabrück University 2011.7.21
- (22) 「形が違えば意味も違う!？」大阪大学サイエンスカフェ（大阪大学博物館）2011.9.17
- (23) 「名詞の語彙概念拡張について」福岡言語学会2012年12月例会（九州大学）2012.12.1
- (24) 「名詞の概念拡張と項・付加詞の非対称性」日本英文学会関西支部7回大会（京都大学）シンポジウム「言葉の意味・機能の拡張と変容」司会及び講師として 2012.12.22
- (25) 「名詞の概念拡張に関する一考察」蛭池認知言語学研究会（大阪大学）2013.9.7
- (26) 「日英語の名詞概念拡張と項・付加詞の非対称性」大阪市大英文学会（大阪市立大学）シンポジウム「意味と形式の対応を考える」講師として 2013.11.30
- (27) 「日英語の語彙概念拡張に関する一考察」日本英文学会北海道支部大会 招待講演（北海道武蔵女子短期大学）2014.10.18
- (28) “Asymmetrical distributions in nominal conceptual expansions” ICLC13, Newcastle Upon Tyne, UK. Northumbria University, 2015.7.21
- (29) “Lexicalization of extended references of nominals and argument-adjunct asymmetry” UK Cognitive Linguistics Conference 6, Bangor University, Wales, UK. 2016.7.20
- (30) 「身体部位名詞の概念拡張と語の接続関係について」日本英語学会第34回大会シンポジウム「意味・機能の変容の諸相」司会および講師として（金沢大学）2016.11.13
- (31) “Conceptual expansions of body-part nouns and their distributions in predicational and modificational contexts.” Workshop on Nominalization at UCLA, University of California, Los Angeles, 2017.3.11
- (32) “The asymmetry of conceptual expansions in predicational and modificational contexts.” Corpus Linguistics 2017, University of Birmingham, 2017.7.21
- (33) 「テキストの結束関係と名詞の語彙概念拡張」神戸外大英文学会 招待講演（神戸市外国語大学）2017.12.9
- (34) “On the rise of truncated causal adjuncts in English.” ICLC15, Kwansei Gakuin

University, Japan, 2019.8.10

- (35) 「因果関係の副詞句における新規表現の発展について」(科学研究費 基盤C「日英語におけるデフォルト志向性と構文の機能」講師として)(筑波大学人文社会科学研究科)  
2019.12.19

## 神山孝夫 略歴・研究業績

### 略歴

- 1981年3月 東京外国語大学 外国語学部 ロシア語学科卒業
- 1983年3月 東京外国語大学 大学院外国語学研究科 修士課程 スラブ系言語専攻修了
- 1988年4月 大阪外国語大学 外国語学部 ロシア語学科 専任講師
- 1993年1月 大阪外国語大学 外国語学部 ロシア語学科 助教授
- 1993年2月 文部省在外研究員 於ウィーン大 スラブ学研究所学（1994年1月まで）
- 1993年4月 大阪外国語大学 外国語学部 地域文化学科 ヨーロッパⅠ講座 助教授
- 2005年3月 大阪外国語大学 外国語学部 地域文化学科 ヨーロッパⅠ講座 教授  
（2007年9月まで）
- 2005年4月 内地研究員 於東北大学 大学院文学研究科（2006年3月まで）
- 2006年10月 博士（文学）（東北大学）
- 2007年10月 大阪大学 大学院文学研究科 文化動態論専攻 言語生態論講座 教授
- 2022年4月 大阪大学 大学院人文学研究科 人文学専攻 文学・言語学講座 比較・対照言語学専門分野 教授

### 書籍

- 1.（共著）『竹林滋教授還暦記念論文集』587pp. 研究社. 1986年9月.
- 2.（編集補助）『研究社露和辞典』xviii+2764pp. 研究社. 1988年9月（東郷正延，染谷茂，磯谷孝，石山正三編）.
- 3.（単著）『ロシア語アクセント研究』vii+287pp. 大阪外国語大学学術研究双書. 1990年3月.
- 4.（単著）『日欧比較音声学入門』xi+325pp. 鳳書房. 1995年4月（序文：竹林滋）.
- 5.（単著）『日本語話者のためのロシア語発音入門』123pp. 大阪外国語大学 世界を学ぶオリジナル語学教材シリーズ. 2001年3月.
- 6.（外来語発音校閲等）『新英和大辞典』（第6版）xxi+2886pp. 研究社. 2002年3月（編集主幹 竹林滋）.
- 7.（単訳編）マルティネ著『「印欧人」のことば誌：比較言語学入門』（言語学翻訳叢書）xvii+365pp. ひつじ書房. 2003年4月（原著André Martinet, *Des steppes aux océans — L'indo-européen et les «Indo-Européens»*. Paris: Payot. 1986, 1994<sup>2</sup>）.

8. (共訳編)『国際音声記号ガイドブック：国際音声学会案内』xiv+321pp. 大修館書店.  
2003年3月(原著The International Phonetic Association, *Handbook of the International Phonetic Association: A Guide to the Use of the International Phonetic Alphabet*. Cambridge University Press. 1999; 共訳編者：竹林滋; 日本語版付録「主要諸言語における綴りと発音との関係」は神山の単著).
9. (単著)『日本語話者のためのロシア語発音入門』(改訂版) 123pp. 大学教育出版.  
2004年4月.
10. (単著)『印欧祖語の母音組織：研究史要説と試論』353pp. 大学教育出版. 2006年10月.
11. (単著)『脱・日本語なまり：英語(+α)実践音声学』(大阪大学新世紀レクチャー)  
xiv+209pp. 大阪大学出版会. 2008年4月.
12. (単著)『ロシア語音声概説』x+259pp. 研究社. 2012年7月.
13. (共著)『言葉のしんそう(深層・真相)：大庭幸男教授退職記念論文集』vi+681pp. 英  
宝社. 2015年3月(岡田禎之編).
14. (編著)『ソシュールと歴史言語学』(歴史言語学モノグラフシリーズ1) 275pp. 日本歴  
史言語学会・大学教育出版. 2017年12月(神山編; 共著者：町田健, 柳沢民雄).
15. (単著)『脱・日本語なまり：英語(+α)実践音声学』(新装改訂版) xiv+209pp. 大阪  
大学出版会. 2019年9月.
16. (単著)『市河三喜伝：英語に生きた男の出自, 経歴, 業績, 人生』xviii+496pp. 研究社.  
2023年7月.
17. (単著)『日英語との対照に基づく ロシア語音声概説』(新装改訂版) x+259pp. 研究社.  
2023年9月.
18. (共編)『英語固有名詞発音辞典』(仮題) 研究社. (共編者竹林滋. 印刷中.)

## 学術論文

1. (単著)『生格(属格)と対格の競合について』東京外国語大学外国語学研究科(修士論  
文). 1983年1月(要旨露文).
2. (単著)「-ся動詞に伴う対格補語について」. 『言語・文化研究』1: pp. 19-28. 東京外  
国語大学. 1983年3月.
3. (単著)「-ся動詞の他動詞性について」. 『ロシヤ語ロシヤ文学研究』16: pp. 54-68. 日  
本ロシヤ文学会. 1984年9月(要旨露文).
4. (単著)「被動形動詞過去短語尾における移動アクセント衰退の傾向」『言語・文化研究』  
3: pp. 9-15. 東京外国語大学. 1985年3月.

5. (単著)「ロシア語における形容詞短語尾のアクセント変異」. *Lexicon* 14: pp. 18-31. 岩崎研究会・研究社. 1985年6月(要旨英文).
6. (単著) On the abnormal forms of the genitive singular after the numerals *два, три, четыре, оба* in Contemporary Russian. 『竹林 滋教授還暦記念論文集』 pp. 312-328. 岩崎研究会・研究社. 1986年9月(英文).
7. (単著)「ロシア語における動詞過去形のアクセント:その変化の方向を探って」. 『音声・言語の研究』 3. 東京外国語大学 音声学研究室. 1987年.
8. (単著)「セルボ・クロアチア語のアクセント:セルボ・クロアチア語名詞生成音韻論序説」. 『大阪外国語大学学報』 76 (1-2): pp. 51-80. 1988年(要旨英文).
9. (単著)「わが国におけるロシア語教育・研究の現状について」. 山口慶四郎編『わが国における外国語教育・研究の史的発達(上):現状と回顧』 pp. 144-161. 大阪外国語大学. 1989年3月.
10. (単著)「わが国におけるロシア語教育・研究史に寄せて」. 近藤達夫編『わが国における外国語教育・研究の史的発達(下):歴史と展望』 pp. 166-225. 大阪外国語大学. 1990年12月.
11. (単著)「スラブ語の『娘』をめぐって」『ロシア・ソビエト研究』 16: pp. 79-110. 1992年3月.
12. (単著)「日本人にとってのロシア語発音の難点:日露対照音声学序説」. 近藤達夫編『言語の対照研究と語学教育』 pp. 55-72. 大阪外国語大学. 1992年3月.
13. (単著) On the vowel lengthening of the sigmatic aorist in the prehistory of Slavic. *Japanese Contributions to the XIIth International Congress of Slavists (at Cracow, Poland)*. The University of Tokyo. pp. 39-65. 1998年8月(英文, 要旨露文).
14. (単著)「印欧祖語の成節流音をめぐって:スラブ語前史における開音節法則とメタテーゼ」『ロシア・東欧研究』 5: pp. 1-43. 2001年3月(要旨英文).
15. (単著)「印欧祖語のアップラウトと文法構造の発達」『大阪外国語大学論集』 28: pp. 33-58. 2003年3月(要旨英文).
16. (単著)「前史におけるスラブ人」『ロシア・東欧研究』 7: pp. 49-78. 2003年3月(要旨露文).
17. (単著)「音声変化とその制約:印欧祖語とスラブ語前史における代償延長」『古代ロシア研究』 XXI: pp. 79-106. 2003年5月.
18. (単著)「印欧祖語母音組織の研究:研究史要説と試論」東北大学文学研究科. 2006年10月.(博士論文; 文第234号; [https://tohoku.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_action\\_](https://tohoku.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_)

common\_download&item\_id=76058&item\_no=1&attribute\_id=18&file\_no=1).

19. (单著)「スラブの2つの文字の由来について」『ロシア・東欧研究』12: pp. 13-50. 2007年9月(要旨英文).
20. (单著) Laryngales et schwa indogermanicum. 『待兼山論叢』(大阪大学文学研究科, 文化動態論篇) 43: pp. 91-125. 2009年12月(要旨英文).
21. (单著)「ヨーロッパ諸語における様々な *r* 音について: 起源と印欧語学への示唆」『待兼山論叢』(文化動態論篇, 大阪大学文学研究科) 48: pp. 33-71. 2014年12月(要旨英文).
22. (单著)「OE byrðen “burden” vs. fæder “father”: 英語史に散発的に見られる [d] と [ð] の交替について」『言葉のしんそう(深層・真相): 大庭幸男教授退職記念論文集』pp. 155-166. 英宝社, 2015年3月.
23. (单著)「名誉会員の業績に学ぶ: 松本克己著『歴史言語学の方法: ギリシア語史とその周辺』(三省堂, 2014); 『ことばをめぐる諸問題: 言語学・日本語論への招待』(三省堂, 2016)」。『歴史言語学』(日本歴史言語学会) 5: pp. 3-37. 2016年11月.
24. (单著) Српскохрватски акцент – увод у генеративну фонологију српскохрватских именица. *Студије о Србима* 22 (セルビア・アカデミー) = *Slavic Eurasian Studies* 31 (北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター): pp. 64-98. 2017年3月(セルビア・クロアチア語).
25. (单著)「ソシユールの生涯と業績」『ソシユールと歴史言語学』(大学教育出版). 2017年12月. pp. 7-81.
26. (单著)「*Mémoire* (覚え書) とラリungal理論」『ソシユールと歴史言語学』(大学教育出版). 2017年12月. pp. 83-140.
27. (单著)「英語におけるHの歴史」『待兼山論叢』(文化動態論編, 大阪大学文学研究科) 52: pp. 41-66. 2018年12月(要旨英文). 『英語学論説資料』第52号に転載.
28. (单著) Sanki ICHIKAWA (市河三喜): Father of Historical and Related Studies of English in Japan. *OUPEL* 19: pp. 1-21 (大阪大学文学研究科英語学研究室). 2019年12月(英文).

#### 翻訳(単行本を除く)

1. (共訳注)「ノヴゴロド第一年代記(シノド本)訳および注 [V]」『古代ロシア研究』17: pp. 77-148. 1989年5月(共訳者: 山口巖, 中條直樹, 石田修一, 井上幸和, 佐藤昭裕, 浦井康男, 岡本崇男他).
2. (共訳注)「ノヴゴロド第一年代記(シノド本)訳および注 [VI]」『古代ロシア研究』18:

- pp. 3-73. 1991年10月（共訳者：山口巖，中條直樹，石田修一，井上幸和，佐藤昭裕，浦井康男，岡本崇男他）。
3. （単訳編）フランティシェック・ヴァーツラフ・マレシュ「スラブ祖語から教会スラブ語へ：スラブ文語前史概説」．『大阪外国語大学論集』15: pp. 109-140. 1996年8月（要旨露文）[原著：František Václav Mareš, Vom Urslavischen zum Kirchen-slavischen. Peter Rehder (hrsg.), *Einführung in die slavischen Sprachen* (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1991<sup>2</sup>)].
  4. （単訳編）アンドレ・マルチネ「ステップから大洋へ：印欧語と『印欧人』」（その1：第I－Ⅲ章）．『大阪外国語大学論集』17: pp. 63-95. 1997年9月 [原著：André Martinet, *Des steppes aux océans — L'indo-européen et les «Indo-Européens»*. Paris: Payot. 1986, 1994<sup>2</sup>].
  5. （単訳編）アンドレ・マルチネ「ステップから大洋へ：印欧語と『印欧人』」（その2：第IV章）．『大阪外国語大学論集』18: pp. 171-194. 1998年3月 [原著：André Martinet, *Des steppes aux océans — L'indo-européen et les «Indo-Européens»*. Paris: Payot. 1986, 1994<sup>2</sup>].
  6. （単訳編）リュウディガー・シュミット「古典アルメニア語歴史文法」．『ロシア・東欧研究』2: pp. 155-181. 大阪外国語大学ヨーロッパI講座. 1998年3月 [原著：Rüdiger Schmitt, *Grammatik des Klassisch-Armenischen mit sprachvergleichenden Erläuterungen*. Innsbrucker Beiträge für Sprachwissenschaft, Bd. 32, 1981].
  7. （単訳編）アンドレ・マルチネ「ステップから大洋へ：印欧語と『印欧人』」（その3：第V章）．『大阪外国語大学論集』19: pp. 33-80. 1998年9月 [原著：André Martinet, *Des steppes aux océans — L'indo-européen et les «Indo-Européens»*. Paris: Payot. 1986, 1994<sup>2</sup>].
  8. （単訳編）アンドレ・マルチネ「ステップから大洋へ：印欧語と『印欧人』」（その4：第VI－Ⅷ章）．『大阪外国語大学論集』20: pp. 57-87. 1999年3月 [原著：André Martinet, *Des steppes aux océans — L'indo-européen et les «Indo-Européens»*. Paris: Payot. 1986, 1994<sup>2</sup>].
  9. （単訳編）アンドレ・マルチネ「ステップから大洋へ：印欧語と『印欧人』」（その5：第Ⅸ章（1））．『大阪外国語大学論集』21: pp. 13-37. 1999年9月 [原著：André Martinet, *Des steppes aux océans — L'indo-européen et les «Indo-Européens»*. Paris: Payot. 1986, 1994<sup>2</sup>].
  10. （単訳編）アンドレ・マルチネ「ステップから大洋へ：印欧語と『印欧人』」（その6：

- 第IX章(2)).『大阪外国語大学論集』22: pp. 87-112. 2000年3月[原著: André Martinet, *Des steppes aux océans — L'indo-européen et les «Indo-Européens»*. Paris: Payot. 1986, 1994<sup>2</sup>].
11. (共訳注)「スズダリ年代記(ラヴレンチー本)訳および注 [II]」『古代ロシア研究』20: 1-52. 2000年5月(共訳者: 山口巖, 中條直樹, 石田修一, 山田勇, 佐藤昭裕, 浦井康男, 岡本崇男, 柳沢民雄他).
  12. (共訳注)「スズダリ年代記(ラヴレンチー本)訳および注 [III]」『古代ロシア研究』21: pp. 1-44. 2003年5月(共訳者: 山口巖, 中條直樹, 山田勇, 佐藤昭裕, 浦井康男, 岡本崇男, 柳沢民雄, 濱本真美他).
  13. (共訳注)「スズダリ年代記(ラヴレンチー本)訳および注 [III]」『古代ロシア研究』22: pp. 1-37. 2010年11月(共訳者: 山口巖, 中條直樹, 山田勇, 佐藤昭裕, 浦井康男, 岡本崇男, 柳沢民雄, 濱本真美他).
  14. (共訳注)「スズダリ年代記(ラヴレンチー本)訳および注 [IV]」『古代ロシア研究』23: pp. 1-26. 2014年3月(共訳者: 山田勇, 佐藤昭裕, 浦井康男, 岡本崇男, 田中大, 今村栄一他).
  15. (共訳注)「スズダリ年代記(ラヴレンチー本)訳および注 [V]」『古代ロシア研究』24: pp. 1-25. 2017年8月(共訳者: 山田勇, 佐藤昭裕, 浦井康男, 岡本崇男, 田中大, 今村栄一他).
  16. (共訳注)「スズダリ年代記(ラヴレンチー本)訳および注 [VI]」『古代ロシア研究』25: pp. 33-44. 2021年3月(共訳者: 山田勇, 佐藤昭裕, 浦井康男, 岡本崇男, 中澤敦夫, 田中大, 今村栄一他).

## 研究発表・講演

1. (研究発表; 単独)「-ся動詞の他動詞性について」日本ロシア文学会(於東京工業大学). 1983年10月.
2. (研究発表; 単独)「セルボ・クロアチア語のアクセント」日本ロシア文学会関西支部(於立命館大学). 1988年6月.
3. (招待講演; 単独)「マルティネと印欧学」. 大阪言語研究会. 2004年3月30日(於アウイーナ大阪).
4. (講演; 単独)「ラリンガルと印欧語のシュワー」. The 18th Indo-European Colloquium of Japan (大阪言語研究会 第166回例会). 2009年12月19日(於大阪大学).
5. (招待講演; 単独)「外国語発音習得における母語音声習慣認識の必要性」. 日本英語音

声学会関東支部. 2011年6月12日 (於早稲田大学).

6. (招待講演; 単独)「印欧語比較言語学: 成立までの経緯と方法論素描」. 日本英文学会北海道支部. 2011年10月1日 (於札幌学院大学).
7. (招待講演; 単独)「Vinaverの秘められた経歴」. シンポジウム「Bédier, Vinaver そしてFieldへ: Malory学への最新情報」(コーディネーター: 高宮利行 (慶応義塾大学名誉教授)). 国際アーサー王学会日本支部. 2015年12月12日 (於立教大学).
8. (研究発表; 単独)「印欧諸語におけるrhotacismの発生原因について」. 日本歴史言語学会. 2016年11月20日 (於九州大学).
9. (基調講演; 単独)「ソシュールの生涯と業績」. 日本歴史言語学会シンポジウム「ソシュールと歴史言語学」. 2017年3月19日 (於研究社英語センター).
10. (講演; 単独)「『覚え書』と喉音理論」. 日本歴史言語学会シンポジウム「ソシュールと歴史言語学」. 2017年3月19日 (於研究社英語センター).
11. (座談会)「ソシュールと歴史言語学」(パネル: 神山孝夫 (司会), 町田健, 柳沢民雄). 日本歴史言語学会シンポジウム「ソシュールと歴史言語学」. 2017年3月19日 (於研究社英語センター).
12. (招待講演; 単独)「印欧語におけるケルト語の位置」. 日本ケルト学会. 2017年7月1日 (於慶応大学).
13. (研究発表; 単独)「英語R音をめぐる諸問題」日本中世英語英文学会第34回東支部研究発表会・西支部例会 (合同開催). 2018年6月16日 (於三重県勤労者福祉会館 (三重大学)).

## その他

1. (書評; 単著) Current Survey of Periodicals: *ROSHIA SOBIETO KENKYU* (Bulletin of the Russian Department, Osaka Univ. of Foreign Studies), *Japanese Slavic and East European Studies*, 13: p. 140. Kyoto University. 1993年3月 (英文).
2. (文献目録)「旧ユーゴスラビア: 言語」池田修監修『世界を学ぶブックガイド』pp.244-246. 嵯峨野書店. 1994年3月.
3. (雑文; 単著)「オーストリアのドイツ語」『ひろば』(大阪外国語大学). 1994年9月.
4. (書評; 単著) Book Review: Ивао ЯМАГУТИ, *Рукэйгаку дзёсэцу* (山口 巖『類型学序説』京都大学学術出版会, 1995) *Japanese Slavic and East European Studies*, 17: pp. 107-111. Kyoto University. 1997年3月 (露文).
5. (書評; 単著)「三谷恵子『クロアチア語ハンドブック』(大学書林)」『ロシア語ロシア文学研究』(日本ロシア文学会) 31: pp. 170-171. 1999年.

6. (追悼文; 単著)「山岸リリヤーナ先生を偲んで」『ロシア・東欧研究』(大阪外国語大学ヨーロッパⅠ講座) 3: pp. 329-336. 1999年3月.
7. (書評; 単著)「黒田龍之介『羊皮紙に眠る文字たち: スラヴ言語文化入門』及び『外国語の水曜日: 学習法としての言語学入門』(現代書館)」『ロシア語ロシア文学研究』(日本ロシア文学会) 33: pp. 154-155. 2001年.
8. (追悼文; 単著)「千野先生の思い出」『ロシア・東欧研究』(大阪外国語大学ヨーロッパⅠ講座) 7: pp. 235-240. 2003年3月.
9. (追悼文; 単著)「思い出のおことば: 竹林 滋先生を偲ぶ」『岩崎研究会ニューズレター』2011年.
10. (報告; 単著)「日本歴史言語学会設立までの経緯」『歴史言語学』1: pp. 3-21. 2012年12月.
11. (追悼文・書評・業績目録; 単著)「堀井令以知著『言語文化の深層をたずねて』(シリーズ「自伝」, ミネルヴァ書房, 2013年5月)」『歴史言語学』(日本歴史言語学会) 2: pp. 65-108. 2013年12月.
12. (講演要旨; 単著)「Vinaverの秘められた経歴」*Arthuriana Japonica* (国際アーサー王学会日本支部会報) No. 29, p. 3-4. 2016年10月.
13. (巻頭言; 単著)「『歴史言語学』第5号に寄せる」『歴史言語学』(日本歴史言語学会) 5: pp. 1-2. 2016年11月.
14. (追悼文; 単著)「山口慶四郎先生を送る」『アヴローラ』(大阪外国語大学ロシア語学科同窓会) 2016年.
15. (講演要旨; 単著)「印欧語におけるケルト語の位置」『日本ケルト学会ニューズレター』24 (3): pp.6-7, 2017年12月.
16. (巻頭言; 単著)「ごあいさつ」『歴史言語学』6: p. i. 2017年12月.
17. (研究発表要旨; 単著)「印欧諸語におけるrhotacismの発生原因について」『歴史言語学』6: p. 84-85. 2017年12月.
18. (共著)「座談会抄録」『ソシユールと歴史言語学』(大学教育出版). 2017年12月. pp. 231-242 (対談者: 神山孝夫, 町田健, 柳沢民雄).
19. (雑文; 単著) Sanki ICHIKAWA (市河三喜): Father of Historical and Related Studies of English in Japan. 日本中世英語英文学会HP ([http://www.jsmes.jp/blog/wp-content/uploads/2015/05/ichikawa\\_sanki.pdf](http://www.jsmes.jp/blog/wp-content/uploads/2015/05/ichikawa_sanki.pdf)) 2019年4月14日 (英文).
20. (研究発表要旨; 単著)「英語R音をめぐる諸問題」. *SIMELL* (日本中世英語英文学会) 34: p. 61. 2019年7月.
21. (追悼文; 単著)「Συμπόσια の思い出: 山口巖先生を送る」『古代ロシア研究』 25: pp.

17-22. 2021年3月1日, 日本古代ロシア研究会.

22. (項目執筆; 単著) 「マルティネ」『現代フランス哲学・思想事典』(ミネルヴァ書房) (印刷中).

23. (項目執筆; 単著) 「ソシュール『覚え書』」『現代フランス哲学・思想事典』(ミネルヴァ書房) (印刷中).

以上

## 川合 康 履歴・研究業績

### 略歴

|         |                                 |
|---------|---------------------------------|
| 1958年7月 | 三重県津市に生まれる                      |
| 1977年3月 | 大阪府立枚方高等学校卒業                    |
| 1977年4月 | 神戸大学文学部入学                       |
| 1981年3月 | 神戸大学文学部史学科国史学専攻卒業               |
| 1981年4月 | 神戸大学大学院文学研究科修士課程入学              |
| 1984年3月 | 神戸大学大学院文学研究科修士課程史学専攻修了          |
| 1984年4月 | 神戸大学大学院文化学研究科博士課程社会文化専攻入学       |
| 1987年3月 | 神戸大学大学院文化学研究科博士課程社会文化専攻単位修得満期退学 |
| 1987年4月 | 樟蔭女子短期大学（日本文化史科）専任講師            |
| 1991年9月 | 樟蔭女子短期大学（日本文化史科）助教授             |
| 1994年2月 | 博士（文学）の学位を取得（神戸大学）              |
| 1995年4月 | 東京都立大学人文学部史学科助教授                |
| 2007年4月 | 東京都立大学人文学部史学科准教授                |
| 2008年4月 | 日本大学経済学部教授                      |
| 2012年4月 | 大阪大学大学院文学研究科（文化形態論日本史講座）教授      |
| 2022年4月 | 大阪大学大学院人文学研究科（日本学専攻日本史学講座）教授    |
| 2024年3月 | 大阪大学を定年退職                       |

### 学会役員

|          |                         |
|----------|-------------------------|
| 1986年6月  | 日本史研究会研究委員（1988年11月まで）  |
| 1990年11月 | 日本史研究会編集委員（1992年11月まで）  |
| 1997年5月  | 歴史学研究会委員（1999年5月まで）     |
| 1997年7月  | 日本歴史学協会委員（2003年6月まで）    |
| 2005年4月  | メトロポリタン史学会委員（2015年4月まで） |
| 2013年10月 | 日本史研究会編集委員（2015年10月まで）  |

## 主要業績一覧

### I 著書

#### (A) 単著

1. 『源平合戦の虚像を剥ぐ 治承・寿永内乱史研究』 講談社（選書メチエ）、1996年、254頁
2. 『鎌倉幕府成立史の研究』 校倉書房、2004年、510頁
3. 『「鎌倉街道」の政治史的研究』 平成15年度～平成16年度科学研究費補助金基盤研究（C）（2）研究成果報告書、2005年、90頁
4. 『日本中世の歴史3 源平の内乱と公武政権』 吉川弘文館、2009年、322頁
5. 『源平合戦の虚像を剥ぐ 治承・寿永内乱史研究』 講談社（学術文庫改訂版）、2010年、288頁
6. 『赤間神宮叢書28 平清盛と「鹿ヶ谷事件」—『平家物語』の虚構を読み解く—』 源平シンポジウム委員会、2017年、38頁
7. 『院政期武士社会と鎌倉幕府』 吉川弘文館、2019年、308頁
8. 『源頼朝 すでに朝の大將軍たるなり』 ミネルヴァ書房、2021年、410頁

#### (B) 編著

1. 『歴史と古典 平家物語を読む』 吉川弘文館、2009年、282頁
2. 『新発見！日本の歴史06 鎌倉時代1 源頼朝と武家政権の模索』 朝日新聞出版、2013年、38頁
3. 『河内国金剛寺文書に基づく中世地域社会史の研究』 令和元年度～令和4年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）研究成果報告書、2023年、180頁

#### (C) 共著

1. 『岸和田市史 第二巻 古代・中世編』 岸和田市、1996年、328-373・412-432頁
2. 『大阪狭山市史 第二巻 史料編 古代・中世』 大阪狭山市役所、2002年、195-265・696-702頁
3. 『高校日本史B』 実教出版、2004年、52-67頁
4. 『加西市史 第八巻 史料編2 古代・中世・近世Ⅰ』 加西市、2006年、91-103・105-107・152頁
5. 『高校日本史B 新訂版』 実教出版、2008年、50-65頁
6. 『加西市史 第一巻 本編1 考古・古代・中世』 加西市、2008年、348-369頁

- 7.『伊賀市史 第一巻 通史編 古代 中世』伊賀市、2011年、334-386頁
- 8.『高校日本史B』実教出版、2014年、52-73・96頁
- 9.『大阪狭山市史 第一巻 本文編 通史』大阪狭山市役所、2014年、131-146頁
- 10.『高校日本史B 新訂版』実教出版、2018年、52-61・64-75頁

## Ⅱ 学術論文

- 1.「鎌倉幕府荘郷地頭職の展開に関する一考察」『日本史研究』272号、1985年、1-26頁
- 2.「荘郷地頭職の展開をめぐる鎌倉幕府と公家政権 一文治二年十月八日付太政官符の歴史的位置」『神戸大学史学年報』創刊号、1986年、1-19頁
- 3.「鎌倉幕府荘郷地頭制の成立とその歴史的 성격」『日本史研究』286号、1986年、1-23頁
- 4.「奥州合戦ノート 一鎌倉幕府成立史上における頼義故実の意義一」樟蔭女子短期大学『文化研究』3号、1989年、1-40頁
- 5.「河内国金剛寺の寺辺領形成とその政治的諸関係 一鎌倉幕府成立期の畿内在地寺院をめぐる寺僧・武士・女院女房一」『ヒストリア』126号、1990年、23-59頁
- 6.「治承・寿永の「戦争」と鎌倉幕府」『日本史研究』344号、1991年、60-90頁、のち『展望日本歴史9 中世社会の成立』東京堂出版、2001年、175-200頁、に再録
- 7.「鎌倉初期の戦争と在地社会」『中世内乱史研究』12号、1992年、2-15頁、のち学術文献刊行会『日本史学年次別論文集 中世1 1992年』朋文出版、1994年、57-63頁、に再録
- 8.「後白河院と朝廷」古代学協会編『後白河院 動乱期の天皇』吉川弘文館、1993年、203-224頁
- 9.「兵の道と百姓の習い 一源平合戦にみる一」藤木久志編『朝日百科日本の歴史別冊 歴史を読みなおす15 城と合戦』朝日新聞社、1993年、34-42頁
- 10.「源氏将軍と武士社会」高橋昌明・山本幸司責任編集『朝日百科日本の歴史別冊 歴史を読みなおす8 武士とは何だろうか』朝日新聞社、1994年、58-72頁
- 11.「武家の天皇観」『講座前近代の天皇 第四巻 統治権的諸権能と天皇観』青木書店、1995年、183-223頁
- 12.「日本史のなかの源平交替説」『歴史読本』1996年5月号、1996年、20-26頁
- 13.「治承・寿永の内乱と地域社会」『歴史学研究』730号、1999年、2-13頁
- 14.「中世武士の武芸と戦闘 一源平合戦を中心に一」馬の博物館編『鎌倉の武士と馬』名著出版、1999年、71-86頁
- 15.「河内石川源氏の「蜂起」と『平家物語』」東京都立大学人文学部『人文学報』306号、

- 2000年、45-78頁、のち学術文献刊行会『日本史学年次別論文集 中世1 2000年』朋文出版、2002年、87-101頁、に再録
16. 「治承・寿永の戦争と『平家物語』」『軍記と語り物』36号、2000年、15-25頁
  17. 「荘郷地頭制の展開 一戦争と土地所有一」『新体系日本史3 土地所有史』山川出版社、2002年、135-145頁
  18. 「武士と戦 一葛西清重を中心に一」葛飾区郷土と天文の博物館編『鎌倉幕府と葛西氏』名著出版、2004年、87-101頁
  19. 「鎌倉幕府研究の現状と課題」『日本史研究』531号、2006年、20-35頁
  20. 「生田森・一の谷合戦と地域社会」『地域社会からみた「源平合戦」』岩田書院、2007年、13-67頁
  21. 「横山氏系図と源氏将軍伝承」『中世武家系図の史料論 上巻』高志書院、2007年、33-64頁
  22. 「中世武士の移動の諸相」メトロポリタン史学会編『歴史のなかの移動とネットワーク』桜井書店、2007年、41-81頁
  23. 「鎌倉幕府と「相良家文書」」『古文書の諸相』慶應義塾大学文学部、2008年、99-114頁
  24. 「鎌倉街道上道と東国武士団」『府中市郷土の森博物館紀要』23号、2010年、19-33頁
  25. 「鎌倉幕府・戦争・『平家物語』」『宮城歴史科学研究』68・69合併号、2011年、1-15頁
  26. 「鎌倉幕府の草創神話 一現代人をも拘束する歴史認識一」東北芸術工科大学東北文化研究センター編『季刊東北学』27号、2011年、41-57頁
  27. 「「鹿ヶ谷事件」考」『立命館文学』624号、2012年、235-248頁
  28. 「秩父平氏と葛西氏」埼玉県立嵐山史跡の博物館・葛飾区郷土と天文の博物館編『秩父平氏の盛衰』勉誠出版、2012年、215-235頁
  29. 「鎌倉幕府の成立時期を再検討する」『じっきょう地歴・公民科資料』76号、2013年、7-10頁
  30. 「治承・寿永の内乱と鎌倉幕府の成立」『岩波講座日本歴史 第6巻 中世1』岩波書店、2013年、61-96頁
  31. 「鎌倉幕府の成立を問い直す」『歴史地理教育』815号、2014年、10-17頁
  32. 「平清盛 一「おごれる」権力者の実像一」『中世の人物 京・鎌倉の時代編 第一巻』清文堂出版、2014年、269-303頁
  33. 「治承・寿永内乱期における和平の動向と『平家物語』」『文化現象としての源平盛衰記』笠間書院、2015年、542-559頁
  34. Kawai Yasushi with Karl F. Friday, 'Medieval warriors and warfare', *Routledge*

*Handbook of Premodern Japanese History*, edited by Karl F. Friday, Routledge, London, 2017, pp.310-329.

35. 「保元・平治の乱と相模武士」『相模武士団』吉川弘文館、2017年、14-34頁
36. 「山内首藤俊綱の「討死」と軍記・絵巻・合戦図屏風」『戦国軍記・合戦図屏風と古文書・古記録をめぐる学際的研究』平成28年度～平成30年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書、研究代表者堀新、2019年、15-30頁
37. 「山内首藤氏の「討死」と『平治物語』『平治物語絵巻』『平治合戦図屏風』」『アジア遊学262 資料論がひらく軍記・合戦図の世界』勉誠出版、2021年、102-123頁
38. 「「鹿ヶ谷事件」再考」『待兼山論叢』史学篇55号、2021年、1-26頁
39. 「八条院祈願所金剛寺の成立と春秋二季伝法会の始行」『鎌倉遺文研究』50号、2022年、2-26頁
40. 「「女人高野」金剛寺の成立と河内長野」『日本遺産「女人高野」調査研究報告書』女人高野日本遺産協議会、2023年、33-44頁
41. 「『平家物語』諸本と歴史学」『日本歴史』900号、2023年、49-55頁
42. 「平資盛・貞能主従と『平家物語』」『軍記ハ史学ニ益アリ 軍記と史学の関係を探る』教育評論社、2024年、37-49頁
43. 「仁和寺所蔵『保元・平治合戦図屏風』をめぐる二、三の論点 —神泉苑本との比較から—」『戦国軍記・合戦図の史料学的研究』令和2年度～令和5年度科学研究費補助金（基盤研究（A））研究成果報告書、研究代表者堀新、2024年、14-33頁

### Ⅲ 概説・学会動向・書評・エッセイ等

1. 「新刊紹介 島田次郎著『日本中世の領主制と村落』上巻」『ヒストリア』112号、1986年、84-87頁
2. 「史料紹介『神戸大学附属図書館教養部分館所蔵 広峰神社古文書』」『神戸大学史学年報』2号（戸田芳実・西谷地晴美・藤田達生と共著）、1987年、92-99頁
3. 「日根野シンポジウムと日根荘保存運動」『日本史研究』310号、1988年、80-87頁
4. 「1988年度歴史学研究会大会中世史部会古沢直人報告批判」『歴史学研究』588号、1988年、45-46頁
5. 「神戸大学での戸田先生の思い出」『戸田芳実の道 追悼思藻』戸田芳実氏追悼文集編集委員会、1992年、407-410頁
6. 「源頼朝の戦略 —『政治』としての奥州合戦—」『黄金の平泉・藤原一族の時代』日本放送出版協会、1993年、43-46頁

7. 「1993年の歴史学界 一回顧と展望―」（日本中世二）『史学雑誌』103編5号、1994年、75-78頁
8. 「武士は都の貴族社会から起こった ―『武者』の発生とその性格―」『日本の歴史を解く100話』文英堂、1994年、110-113頁
9. 「鎌倉時代、日本に政府が二つあったのか ―鎌倉幕府と朝廷―」『日本の歴史を解く100話』文英堂、1994年、114-117頁
10. 「武家政権と戦争」『日本中世史研究事典』東京堂出版、1995年、4-5頁
11. 「北条泰時 泰時の治世はなぜ理想化されたか―」『日本の歴史を解く100人』文英堂、1995年、120-123頁
12. 「治承・寿永の内乱」『地図でたどる日本史』東京堂出版、1995年、86-89頁
13. 「謎の伊勢平氏」講談社『本』1996年5月号、1996年、58-60頁
14. 「弓矢の機能分化と格闘技の流行」『アエラムック 平家物語がわかる。』朝日新聞社、1997年、78-81頁
15. 「斉藤利男『軍事貴族・武家と辺境社会』をめぐって」『日本史研究』429号、1998年、36-40頁
16. 「紹介 歴史学研究会編『日本史史料(2)中世』」『歴史学研究』715号、1998年、60頁
17. 「日本歴史学協会活動報告」『日本史研究』449号、2000年、84頁
18. 『NHK教育セミナー 歴史でみる日本』日本放送出版協会、2000年、25-28頁
19. 「地域住民も動員された源平合戦」『アエラムック 日本史がわかる。』朝日新聞社、2000年、25-27頁
20. 「書評 高橋修著『中世武士団と地域社会』」『民衆史研究』61号、2001年、83-90頁
21. 「聞書きレクチャー この時代！源氏の勝利は偶然だった！『平家物語』史観を問い直す」『週刊再現日本史 第6号 軍船四〇〇艘の大海戦！平家、壇の浦で滅亡』講談社、2001年、34-36頁
22. 「日本の歴史家二十五人 戸田芳実「歴史の現場」に立って時代を考える」『日本の歴史12巻 月報』講談社、2001年、3-5頁
23. 「『東京都大学改革大綱』をめぐって」『人民の歴史学』151号、2002年、38-40頁
24. 「2001年の歴史学界 一回顧と展望―」（日本中世二 平安末・鎌倉期）『史学雑誌』111編5号、2002年、38-40頁
25. 「＜座談会＞歴史の語り方をめぐって」（兵藤裕己・阿部泰郎と座談会）岩波書店『文学』隔月刊3巻4号、2002年、2-21頁
26. 「鎌倉幕府と目黒の街道」『めぐろシティーカレッジ叢書3 地域に学ぶ』二宮書店、

- 2003年、66-71頁
27. 「内乱期の軍制と都の武士社会」『日本史研究』501号、2004年、90-96頁
28. 「都立新大学問題 一何が起きているのか」岩波書店『世界』728号、2004年、200-208頁
29. 「治承・寿永の内乱と伊勢・伊賀平氏 一平氏軍制の特徴と鎌倉幕府権力の形成」京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』18号、2005年、303-309頁、のち学術文献刊行会『日本史学年次別論文集 中世1 2005年』朋文出版、2007年、54-57頁、に再録
30. 「＜対談＞頼朝の『呪縛』、信長の『構想』」（堀新と対談）講談社『アリエス』02号、2005年、156-167頁
31. Kawai Yasushi « *Légitimité et légitimations chez les guerriers au Moyen Âge* », *Légitimités, légitimations : la construction de l'autorité au Japon*, École française d'Extrême-Orient, Paris, 2005, pp.233-236.
32. 「紹介 上杉和彦著『大江広元』」『歴史評論』672号、2006年、107-108頁
33. 「三種の神器とは何ですか。今でもあるのですか」歴史教育者協議会編『Q&A 知っておきたい 天皇のいま・むかし』学習の友社、2007年、162-163頁
34. 「平清盛・源頼朝の権力と天皇との関係はどのようなものでしたか」歴史教育者協議会編『Q&A 知っておきたい 天皇のいま・むかし』学習の友社、2007年、164-166頁
35. 「平氏の繁栄と内乱」ひらかれた歴史教育の会編『『新しい歴史教科書』の＜正しい＞読み方』青木書店、2007年、71-73頁
36. 「鎌倉幕府の成立」ひらかれた歴史教育の会編『『新しい歴史教科書』の＜正しい＞読み方』青木書店、2007年、74-76頁
37. 「頼朝はなぜ征夷大将軍に任官したか」ひらかれた歴史教育の会編『『新しい歴史教科書』の＜正しい＞読み方』青木書店、2007年、77頁
38. 「鶴越と多田行綱」『メトロポリタン史学会会報』5号、2007年、2-3頁
39. 「新しい『平家物語』の読み方」『週刊読書人』2744号、2008年、6頁
40. 「京武者論と平氏権力」待兼山史友会『史友会会報』27号、2012年、7-12頁
41. 「3章のねらい」『高校日本史B 教授用指導書』実教出版、2014年、50頁
42. 「伝源頼朝画像をめぐる新見解」『高校日本史B 教授用指導書』実教出版、2014年、260頁
43. 「鎌倉幕府に失望した東国武士 一熊谷直実の出家」『国立劇場第196回文楽公演解説書』独立行政法人日本芸術文化振興会、2016年、20-21頁
44. 「中世の始まりをより深く理解するための5冊」集英社『kotoba』30号、2017年、

54-57頁

45. 「3章のねらい」『高校日本史B 新訂版 教授用指導書』実教出版、2018年、50頁
46. 「源頼朝と流鏑馬行事」『うまゆみ』2号、日本騎射協会、2020年、2-6頁
47. 「書評 宮田敬三『源平合戦と京都軍制』」『日本史研究』707号、2021年、61-68頁
48. 「インタビュー 日本中世の過渡期：鎌倉幕府の成立」『待兼山文学』2021年下半年号、2021年、42-69頁
49. 「源頼朝、流人から「大將軍」へ」ミネルヴァ通信『究』129号、2021年、38-39頁
50. 「北条義時の実像 公と武の関係 対立か協調か」『朝日新聞』2022年1月15日朝刊、2022年、17面書評欄「ひもとく」
51. 「生田の森・一の谷の戦い 解説 3方面で行われた源氏と平氏の明暗を分けた戦い」『再現イラストでよみがえる 日本史の現場』朝日新聞出版、2022年、74-77頁
52. 「2023年度歴史学研究会大会中世史部会堀川康史報告批判」『歴史学研究』1043号、2023年、37-39頁

#### Ⅳ 辞典類

1. 『平安時代史辞典』角川書店、1994年、「摂津国垂水牧」など9項目を執筆
2. 『角川新版 日本史辞典』角川書店、1996年、「治承・寿永の内乱」など31項目を執筆
3. 『岩波日本史辞典』岩波書店、1999年、「奥州合戦」など61項目を執筆
4. 『日本歴史大事典 1～3巻』小学館、2000年～2001年、「鎌倉幕府」など15項目を執筆
5. 『日本史文献事典』弘文堂、2003年、『源平合戦の虚像を剥ぐ』など3項目を執筆

## 小口一郎 略歴・研究業績

### 学歴

1984年3月 愛知県立大学文学部英文学科卒業

1987年3月 名古屋大学大学院文学研究科博士課程前期課程修了

1987年9月 名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期課程退学（中途）

1994年10月～1995年7月

オックスフォード大学英語英文学部研究生 (Recognised student, Faculty of English Language and Literature, University of Oxford)

### 職歴

1987年10月 名古屋大学文学部助手

1989年4月 静岡大学教養部講師

1991年4月 静岡大学教養部助教授

1995年10月 静岡大学情報学部助教授

2001年4月 大阪大学言語文化部助教授

2005年4月 大阪大学大学院言語文化研究科助教授

2005年4月～2006年3月

オックスフォード大学言語センター客員研究員 (Visiting researcher, University of Oxford Language Centre)

オックスフォード大学英語英文学部客員研究員 (Associate member, Faculty of English Language and Literature, University of Oxford)

2006年1月 バーミンガム大学英語高等研究センター客員研究員 (Visiting researcher, Centre for Advanced Research in English, University of Birmingham)

2007年4月 大阪大学大学院言語文化研究科准教授

2017年4月 大阪大学大学院言語文化研究科教授

2020年4月 大阪大学大学院人文学研究科教授

### 学位

文学修士：名古屋大学 (1987年)

博士（英米文学）：名古屋大学（2007年）

## 研究業績等一覧

## 著書（共著）

1. 『英文学の博物誌』（植月恵一郎 編著）鷹書房弓プレス，2003.
2. 『病と身体 of 英米文学—阪大英文学叢書 1』（玉井暲，仙葉豊 編著）英宝社，2004.
3. *Voyages of Conception: Essays in English Romanticism*. Ed. Japan Association of English Romanticism. Kiriara Shoten and Japan Association of English Romanticism, 2005.
4. 『言語文化学への招待』（木村健治，金崎春幸 編著）大阪大学出版会，2008.
5. 『英語リフレッシュ講座』（成田一 編著）大阪大学出版会，2008.
6. *Ivy Never Sere: The Fiftieth Anniversary Publication of The Society of English Literature and Linguistics, Nagoya University*. Ed. Mutsumu Takikawa, Masae Kwatsu, and Tomoyuki Tanaka. Otowa-Shobo Tsurumi-Shoten, 2009.
7. 『魅力ある授業のために 2—双方向型授業の取り組みを中心に』（大阪大学大学教育実践センター 編）大阪大学出版会，2010.
8. 『揺るぎなき信念—イギリス・ロマン主義論集』（新見肇子，鈴木雅之 編著）彩流社，2012.
9. 『境界線上の文学』（大石和欣，滝川陸，中田晶子 編著）彩流社，2013.
10. 『英語のデザインを読む—阪大英文学会叢書 8』（沖田知子，米本弘一 編著）英宝社，2015.
11. 『ロマンティック・エコロジーの詩学—環境感受性の芽生えと展開』（小口一郎 編著）音羽書房鶴見書店，2015.
12. 『英語教育徹底リフレッシュ—グローバル化と21世紀型の教育—』（今尾康裕，岡田悠佑，小口一郎，早瀬尚子 編著）開拓社，2017.
13. 『トランスアトランティック・エコロジー—ロマン主義を語り直す』（吉川朗子，川津雅江 編著）彩流社，2019.

## 翻訳（共訳）

1. ジェイムズ C. マキューシク著『グリーンライティング—ロマン主義とエコロジー』（川津雅江，直原典子，小口一郎 訳），音羽書房鶴見書店，2009.

## 論文

1. 「超越の眼差し—Endymionから“The Fall of Hyperion”へ—」 *IVY: The Nagoya Review of English Studies*, vol. 21, 1988, pp. 103-122.
2. 「監禁と解放の力学—Keatsの*Endymion*—」『名古屋大学文学部研究論集・文学』第35巻, 1989, pp. 71-84.
3. 「変容する奈落—トムソン『四季』—」『静岡大学教養部研究報告 人文・社会科学 篇』第25巻, 1990, pp. 17-34.
4. 「精神と想像力のエンブレム—ワーズワス「いちいの木」—」 *IVY*, vol. 23, 1990, pp. 95-112.
5. 「ワーズワスと逆説の鏡—「ワイナンダーの少年」—」 *IVY*, vol. 24, 1991, pp. 37-54.
6. 「内面からの帰郷者—『グラスミアの家』における自我の運命—」 *IVY*, vol. 25, 1992, pp. 23-42.
7. “Imagining a Non-Regicidal Revolution: Strategies for Poetic Originality in the Revolutionary Books of *The Prelude*.” *IVY*, vol. 27, 1994, pp. 41-65
8. “Relapse from the One Interior Life: ‘The Blind Beggar.’”『中部英文学』第15号, 1996, pp. 1-16.
9. “Two Sublime Moments in ‘Tintern Abbey.’” *IVY*, vol. 30, 1997, pp. 1-27.
10. “Hartleyan Principles in ‘The Preface to *Lyrical Ballads*.’”『イギリス・ロマン派研究』第22号, 1998, pp. 5-18.
11. “‘A Faith That Fails Not’: Wordsworth’s Republican Ideal in the 1790s.”『情報学研究』第4巻, 1998, pp. 9-30.
12. “‘The Breeze Running through Ideas’: Wordsworth’s Vitalist Associationism.” *IVY*, vol. 32, 1999, pp. 31-60.
13. “Political Interpretations of Associationism in the Late Eighteenth Century.”『情報学研究』第5巻, 1999, pp. 41-60.
14. “Aesthetics of Nature and Environmental Consciousness in Wordsworth.”『情報学研究』第6巻, 2000, pp. 27-46.
15. “Science and Radicalism: A Background to Wordsworth.”『言語文化研究』第28巻, 2002, pp. 133-58.
16. “‘Philosophical Language’ in the Early Romantic Era.”『言語文化共同研究プロジェクト 2002—レトリック研究の方法と射程』大阪大学言語文化部, 2003, pp. 49-56.
17. “Metaphor for the Transcendental: The Romantic Pursuit for Representation.”『言語

- 文化共同研究プロジェクト 2003—メタファー研究の方法と射程』大阪大学言語文化部, 2004, pp. 75-80.
18. "Radicalism in Language: 'The Preface to *Lyrical Ballads*' in Context." 『言語文化研究』 第30巻, 2004, pp. 51-84.
  19. 「William Wordsworth, 'Lines written at a small distance from my house'」 『英語青年』 第150巻7号, 2004年10月, pp. 438-40.
  20. "Reinventing Epic Simile: Wordsworth and the Miltonic Tradition." 『言語文化共同研究プロジェクト 2004—詩的言語とレトリック—認知とコミュニケーションの文学的戦略』 大阪大学言語文化部, 2005, pp. 41-54.
  21. "Romantic Metaphors for Creative Consciousness." 『言語文化共同研究プロジェクト 2005—詩的言語とメタファー』 大阪大学言語文化研究科, 2006, pp. 11-24.
  22. "Academic Writing: A Course for Japanese Postgraduate Students." 『言語文化共同プロジェクト2006—アカデミック・ライティング研究—日本語と英語の場合』 大阪大学言語文化研究科, 2007, pp. 1-14.
  23. "Wordsworth and Radical Associationism." 博士学位論文, 名古屋大学, 2007, 324 pp.
  24. "'Organic Happiness' versus 'the vale of Soul-making': Changing Attitudes towards the Struggle for Existence in the Romantic Age." 『言語文化研究』 第36巻, 2010, pp. 185-200.
  25. "Utilitarian Principles in Wordsworth's Literary Theory: Paley, Godwin and the 'Preface to *Lyrical Ballads*.'" 『言語文化研究』 第37巻, 2011, pp. 163-77.
  26. "Erasmus Darwin's Quasi-Environmentalism: Teleology and Moral Agency in *The Temple of Nature*." 『言語文化研究』 第39巻, 2013, pp. 197-219.
  27. "Population Principle and Natural Theology: The Significance of Malthus for Environmental Ethics." 『言語文化研究』 第40巻, 2014, pp. 237-56.
  28. "Shadow of the Non-Corresponding Other: 'Material Nature' in Wordsworth's Poetry." *IVY*, vol. 48, 2015, pp. 27-51.
  29. Mehran, P., Alizadeh, M., Koguchi, I., Takemura, H. "The Need for Establishing an English Self-Access Center at Osaka University: Practical Suggestions and Overall Guidelines." *Studies in Self-Access Learning* vol. 7, no. 4, 2016, pp. 365-378.
  30. Mehran, P., Alizadeh, M., Koguchi, I., Takemura, H. "Are Japanese Digital Natives Ready for Learning English Online? A Preliminary Case Study at Osaka University." *International Journal of Educational Technology in Higher Education*,

- vol. 14, no. 8, 2017, pp. 1-17.
31. Mehran, P., Alizadeh, M., Koguchi, I., Takemura, H. "Designing and Developing a Blended Course: Toward Best Practices for Japanese Learners." *CALL in a climate of change: Adapting to turbulent global conditions: Short papers from EUROCALL*, 2017, pp. 205-210.
  32. Alizadeh, M., Mehran, P., Koguchi, I., Takemura, H. "Learning by Design: Bringing Poster Carousels to Life through Augmented Reality in a Blended English Course." *CALL in a climate of change: Adapting to turbulent global conditions: Short papers from EUROCALL*, 2017, pp. 7-12.
  33. "Contact with Materiality: Wordsworth's Alps and Thoreau's Ktaadn."『言語文化研究』第44巻, 2018, pp. 223-241, 2018.
  34. Alizadeh, M., Mehran, P., Koguchi, I., Takemura, H. "Language Needs Analysis and the Internationalization of Higher Education: The Unaddressed Factor in Japan."『JACET関西支部紀要』第20巻, 2018, pp. 156-173.
  35. Alizadeh, M., Mehran, P., Koguchi, I., Takemura, H. "Evaluating a Blended Course for Japanese Learners of English: Why Quality Matters." *International Journal of Educational Technology in Higher Education*, vol. 16, no. 6, 2019, pp. 1-21.
  36. 「『自然』から『環境』へーワーズワスのエコロジック的展開ー」『ヘンリー・ソロー研究論集』第46巻, 2021, pp. 65-74.
  37. "Managing University-Wide Online English Language Courses: An Interim Report."『英語教育におけるグローバル化—言語文化共同研究プロジェクト2020』大阪大学大学院人文学研究科 言語文化学専攻, 2021, pp. 9-20.
  38. 「Hazlittと『抽象』—ロマン主義の詩学から19世紀視覚芸術へ」『イギリス・ロマン派研究』第46号, 2022, pp. 45-49.
  39. "Academic Writing Course for Postgraduates: A Revised Syllabus."『言語文化共同プロジェクト2021—英語教育の新たな実践に向けて』大阪大学大学院人文学研究科 言語文化学専攻, 2022, pp. 9-20.
  40. 「『人間の時代』の Wordsworth—風景と造園」日本英文学会 第94回全国大会 Proceedings, 2022, <https://www.elsj.org/backnumber/proceedings2022/proceedings-2022-koguchiichiro.pdf>
  41. "Towards Interactive Dynamism: A Recent Current in Academic Writing Studies."『言語文化共同プロジェクト2022—英語教育の新たな実践に向けて(2)』大阪大学大学院

人文学研究科 言語文化学専攻, 2023, pp. 33-43.

## 書評

1. 「比喩の動物学—渡辺秀樹「英語鳥名のメタファー研究 俚諺・成句からの考察 共同研究 英語動物名のメタファー (1)」評」『言語文化共同研究プロジェクト 2004—詩的言語とレトリック—認知とコミュニケーションの文学的戦略』大阪大学言語文化研究科, 2005, pp. 21-22.
2. 「イメージの普遍性と文化性 相場美紀子「謡曲における「水」の役割」」『言語文化共同研究プロジェクト 2004—詩的言語とレトリック—認知とコミュニケーションの文学的戦略』大阪大学言語文化研究科, 2005, pp. 71-72.
3. 「The Great Chain of Beingにおける人間—大森文子「動物比喩に表れる獣性と人間性」について—」『言語文化共同研究プロジェクト 2005—詩的言語とメタファー』大阪大学言語文化研究科, 2006, pp. 61-62.
4. 「メタファーによる認知の様式—竹田聖基「スポーツチーム名に用いられる物の認知言語学的分析」を読む—」『言語文化共同研究プロジェクト 2005—詩的言語とメタファー』大阪大学言語文化研究科, 2006, pp. 99-100.
5. ReallyEnglish・株式会社成美堂『実用英語TOEICテスト対策コース』『e-Learning教育研究』第3巻, 2008, pp. 47-49.
6. Maggie Charles, Diane Pecorari and Susan Hunston, eds., *Academic Writing: At the Interface of Corpus and Discourse*. 『e-Learning教育研究』第5巻, 2010, pp. 46-49.
7. Yubun Suzuki, *English Conversation Activities through Virtual Space Text Chat: Review of the Ten Years of Teaching*. 『e-Learning教育研究』第7巻, 2012, pp. 60-64.
8. Kensuke Morimatsu, *British Romantics and Their "Green" Poetry: From Goldsmith to Keats*. 『英文学研究』第91巻, 2014, pp. 52-59.
9. Saeko Yoshikawa, *William Wordsworth and the Invention of Tourism, 1820-1900*. 『イギリス・ロマン派研究』第39-40合併号, 2015, pp. 212-16.
10. Sho Okochi, *Aesthetic Ideology: The Politics of Imagination in Commercial Society*. 『イギリス・ロマン派研究』第45号, 2021, pp. 59-63.
11. Japan Shelley Studies Center (ed.), *The Age of Frankenstein: Bicentenary Essays (Frankenstein no Seiki)*. *Studies in English Literature, English Number*, vol. 64, 2023, pp. 161-67.

12. Seth T. Reno, *Early Anthropocene Literature in Britain, 1750-1884*. *IVY*, vol. 56, 2023, 147-57.

## 報告・小論

1. 「キーツの二つの眼差し」『静岡大学英文学会会報』No. 17, 1997.
2. 「美は自然のメッセージ—自然観をコミュニケーションの観点から考える」『情報社会の見える人、見えない人「新しい情報学」への道案内』（岡田安功、藤井史朗 編著）公人社, 2000, pp. 283-85.
1. 「共通教育におけるCALLシステムを用いた英語教育」『創造と実践別冊・平成14年度第1回FD講習会「CALLシステムと外国語教育」報告書』大阪大学全学共通教育機構, 2003, pp. 20-34.
2. “Professor Yasuhiko Ozawa: Life and Achievement.” *Charles Lamb Bulletin*, New Series, no. 123, 2003, pp. 101-05.
3. 「CALLと英語教育」『サイバーメディア・フォーラム』No. 4, 大阪大学サイバーメディアセンター, 2003, pp. 36-39.
4. 神谷健一、小口一郎「第3回e-Learning教育学会の報告」『e-Learning教育研究』創刊号, 2006, pp. 66-70.
5. 小口一郎、高橋新、岩井千春「理工系ESP（専門英語）教育の研究—教材開発と教育実践—」『文理融合研究の展望』大阪大学, 2007, pp. 177-81.
6. 小口一郎・森祐司「e-Learningを利用したESP教育の開発と実践」『新型授業開発プロジェクト 平成19年度報告書』大阪大学大学教育実践センター, 2008, pp. 89-92.
7. 惣田訓・高橋新・小口一郎・近藤明・下田吉之・岩井千春・照井雅子・福井希一「環境分野の専門英語教育のためのe-learning教材の開発」『環境技術』第37巻10号, 2008, pp. 729-33.
8. 小口一郎・森祐司・ロバート・マン「実践英語、英語Speaking、英語Reading」『新型授業開発プロジェクト—授業支援イニシャティブ—』大阪大学大学教育実践センター, 2009, pp. 17-20.
9. 小口一郎・山田雄三・森祐司「実践英語」『新型授業開発プロジェクト—授業支援イニシャティブ—』大阪大学大学教育実践センター, 2011.
10. 小口一郎・山田雄三・森祐司「実践英語」『新型授業開発プロジェクト—授業支援イニシャティブ—』大阪大学大学教育実践センター, 2012.
11. 小口一郎・山田雄三・森祐司「実践英語e-learning—試行（錯誤）の2年間、そして今

後の展望—」『サイバーメディア・フォーラム』No. 13, 大阪大学サイバーメディアセンター, 2012. pp. 63-65.

#### 執筆協力

1. “Japanese.” Vanderplank, Robert. *Uglier than a Monkey's Armpit: Untranslatable Insults, Put-Downs and Curses from around the World*. Boxtree, 2007. pp. 112-14.

#### 教材開発

1. 岩井千春、UEDA-SARSON, Luke、岡野雅通、CLENTON, Jonathan、小口一郎、近藤明、下田吉之、惣田訓、SHRESTHA, Kundan、高橋新、DEVORE, Trane、照井雅子、MURAKAMI-SMITH, Andrew、山本敏、山本祐吾、町村尚、Rahul, UPADHYNE. *Environmental Technology Basic / Environmental Technology Oral*. 大阪大学, 2007.

#### 口頭発表・講演・シンポジウム

1. 「監禁と解放のダイナミックス—Keats の Endymion—」日本英文学会中部地方支部第40回大会, 梶山女学園大学, 1987年10月3日.
2. 「トムソンの二つの奈落—『四季』における古典主義とロマン主義—」日本英文学会中部地方支部第41回大会, 静岡県立大学, 1989年10月7日.
3. 「ロマン主義は何処へ」名古屋大学英文学会第31回大会シンポジウム, 名古屋大学文学部, 1992年4月25日.
4. 「The Prelude における独創性概念」日本英文学会中部地方支部第45回大会, 岐阜大学教養部, 1993年10月2日.
5. “Wordsworth's Active Principle.” Wordsworth Summer Conference. Grasmere, UK, 7 August 1995.
6. 「“The Preface to *Lyrical Ballads*” における Hartley 的急進主義」日本英文学会中部地方支部第48回大会, 信州大学人文学部, 1996年10月12日.
7. “David Hartley in ‘The Preface to *Lyrical Ballads*.’” Wordsworth Summer Conference. Grasmere, UK, 13 August 1997.
8. 「『ティンターン僧院の詩』における崇高の二形式」イギリス・ロマン派学会第23回全国大会, 麗澤大学, 1997年10月12日.
9. 「詩的ラディカリズムの軌跡—ワーズワスの1790年代—」名古屋大学英文学会第37回大会,

名古屋大学文学部, 1998年4月25日.

10. "Wordsworth's Vitalist Psychology." Wordsworth Summer Conference. Grasmere, UK, 2 August 1999.
11. 「観念連合と生命体論—「叙情民謡集序文」の心理学」イギリス・ロマン派学会第25回全国大会, 早稲田大学, 1999年9月26日.
12. 「観念連合論とその政治的解釈—十八世紀後半の展開」イギリス・ロマン派学会四季談話会, 中央大学駿河台記念館, 2000年4月15日.
13. 「黙示録思想と進化論—ロマン派前期の思想的展開—」日本英文学会中部支部第52回大会シンポジウム「ロマン派の新世紀—その想像力のエピステーメをめぐって—」愛知県立大学, 2000年10月22日.
14. 「ワーズワスの環境意識」日本英文学会中部支部第53回大会, 静岡大学, 2001年10月20日.
15. 「イギリス・ロマン主義における『喜びの原理』」日本英文学会第76回大会, 大阪大学, 2004年5月22日.
16. "The Romantic Fate of Pleasure." Wordsworth Summer Conference. Grasmere, UK, August 2004.
17. 「ロマン派が読んだミルトン—出版史からみたミルトン受容」イギリス・ロマン派学会第30回大会シンポジウム「護読／誤読のポリティクス—ロマン主義時代のミルトン」京都大学, 2004年10月16日.
18. "Horne Tooke on Language." Wordsworth Summer Conference. Grasmere, UK, August 2005.
19. 「言語理論の政治学—ホーン・トゥックとワーズワス」関西コールリッジ研究会, 同志社女子大学, 2007年6月30日.
20. 「ロマン派の "the grand elementary principle of pleasure" —ワーズワスの功利主義的文学論—」名古屋大学英文学会第47回大会, 2008年4月19日.
21. 「エラズマス・ダーウィン—世紀末のpolymathと進化論」イギリス・ロマン派学会第34回全国大会シンポジウム「エラズマス・ダーウィンの系譜とイギリス・ロマン派」四国大学交流プラザ, 2008年10月11日.
22. 「ワーズワスと功利主義の詩学」関西コールリッジ研究会, 2009年11月21日
23. 「詩的テーマとしての「生存競争」—エラズマス・ダーウィンとキーツ」関西コールリッジ研究会, 同志社女子大学, 2011年6月25日
24. "Wordsworth and Utilitarians." Wordsworth Summer Conference. Grasmere, UK, 5 August 2011. Invited lecture.

25. 「自然神学と人口論—マルサスと環境倫理の成立」「シンポジウム 環境感受性とエコボ  
エティックス—イギリス・ロマン主義をめぐって—」早稲田大学教育学部, 2014年3  
月9日.
26. 「Wordsworth: Lucy Poems—ルーシーの死をめぐって」イギリス・ロマン派学会 第33  
回イギリス・ロマン派講座, 早稲田大学教育学部, 2014年6月21日. 招待講演.
27. 「ワーズワスの『無情』な自然」関西コールリッジ研究会第162回例会, 同志社女子大学,  
2014年6月28日.
28. 「呼応なき「他者」—ワーズワスにおける物質的自然」名古屋大学英文学会第54回大会,  
2015年4月18日. 招待講演.
29. 「Wordsworthに環境感受性を探る」イギリス・ロマン派学会 第35回イギリス・ロマン  
派講座, 早稲田大学教育学部, 2016年7月2日. 招待講演.
30. 「Wordsworthに環境感受性を探る(その2)—切りられる木をいたむ」イギリス・ロマ  
ン派学会 第36回イギリス・ロマン派講座, 日本女子大学, 2017年7月1日. 招待講演.
31. 「William Wordsworth, 'Steamboats and Railways'—『人間の時代』と環境」イギリス・  
ロマン派学会 第37回イギリス・ロマン派講座, 日本女子大学, 2018年6月30日. 招待  
講演.
32. 「Wordsworth: "Ode: Intimations of Immortality"—オードというメッセージ—」イギ  
リス・ロマン派学会 第38回イギリス・ロマン派講座, 日本女子大学, 2019年7月6日.  
招待講演.
33. "Wordsworth in the Anthropocene: Nature and Human Practice in *A Guide to the  
Lakes*." Wordsworth Summer Conference. Grasmere, UK, 12 August 2019. Invited  
lecture.
34. 「『自然』から『環境』へ—ワーズワスのエコロジー的展開」日本ソロー学会 2019年度  
全国大会, 東北文化学園大学, 2019年10月4日. 招待講演.
35. "Wordsworth in the Anthropocene." 関西コールリッジ研究会, 同志社大学, 2019年11月  
2日.
36. 「新しい時代、新しい英語教育—阪大カリキュラムのミッション」(株) ALC, 大学の  
グローバル化 情報交換セミナー Vol. 23 「新しい時代の英語教育を、共に考える。」  
ハービスENT会議室, 2019年12月1日. 招待講演.
37. 「NetAcademy Nextによる大規模オンライン授業—現場からの実践報告—」(株) アル  
ク 大学のグローバル化 情報交換セミナー Vol. 33. オンライン, 2021年3月6日. 招  
待講演.

38. 「Hazlittと「抽象」—ロマン主義の詩学から19世紀視覚芸術へ」 イギリス・ロマン派学会第47回全国大会シンポジウム「詩的言語と視覚表象—18世紀末から19世紀への展開を読み解く」オンライン, 2021年10月16日.
39. 小口一郎, 三木訓子, 岡本清美「3700人のクラスを教える—大規模英語e-learning授業の運営と成果」2022年度JACET関西支部大会, 2023年3月4日.
40. 「『人間の時代』のWordsworth—風景と造園」日本英文学会第94回全国大会, オンライン, 2022年5月22日. 招待研究発表.
41. 小口一郎, 岡本清美, 三木訓子「3700人を教える—大規模英語e-learning授業の運営と成果—」大阪大学 第8回豊中地区研究交流会, 2023年12月8日.

## 受賞

加藤龍太郎賞, 名古屋大学加藤龍太郎賞銓衡委員会, 1990年  
 IVY Award, 名古屋大学英文学会, 1992年  
 大阪大学共通教育賞, 2012年  
 大阪大学総長顕彰, 2014年  
 大阪大学賞, 2020年

## 学会役員等

名古屋大学英文学会 企画運営委 1999～2006年  
 名古屋大学英文学会 編集委員 2000～2004年  
 イギリス・ロマン派学会 編集委員 2004～2012年  
 イギリス・ロマン派学会 会長補佐室長 2004～2008年  
 イギリス・ロマン派学会 理事 2006年～現在  
 イギリス・ロマン派学会 広報委員 2006～2012年  
 e-Learning教育学会 理事 2006～2024年  
 e-Learning教育学会 編集委員・編集委員長 2006～2024年  
 イギリス・ロマン派学会 全国大会会場校委員 2010年  
 イギリス・ロマン派学会 副会長 2013～2016年  
 イギリス・ロマン派学会 事務局長 2013～2016年  
 イギリス・ロマン派学会 企画運営委員長 2013～2016年  
 イギリス・ロマン派学会 広報委員 2013～2016年  
 関西コールリッジ研究会 会長 2013～2017年

イギリス・ロマン派学会 会長 2106 ～ 2020年

大阪大学言語文化学会 委員長 2018 ～ 2019年

#### 補助金等（代表者・責任者）

1. 「英国ロマン主義文学の形成過程における鏡の認識論」文部省 科学研究費補助金 奨励研究(A) 1991年.
2. 「歴史テキストとしての前期英国ロマン主義文学における「独創性」の研究」文部省 科学研究費補助金 奨励研究(A) 1993 ～ 1994年.
3. 「ワーズワース、コールリッジにおけるロマン主義的急進主義思想の研究」文部省 科学研究費補助金 奨励研究(A) 1996年.
4. 「近代の自然科学思想とイギリス・ロマン主義文学」文部省 科学研究費補助金 奨励研究(A) 1997 ～ 1998年.
5. 「十八・十九世紀の自然哲学における有機体論パラダイムとロマン主義想像力理論の研究」日本学術振興会 科学研究費補助金 奨励研究(A) 1999 ～ 2000年.
6. 「近代イングランドにおける理想言語論と政治的急進主義思想の文化史的研究」日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究(C) 2002 ～ 2003年.
7. 「イギリスを中心とするロマン主義時代の文学、科学、政治における「身体性」の研究」日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究(C) 2004 ～ 2006年.
8. 「アカデミックリテラシーに資する外国語教育」文部科学省 海外先進教育実践支援プログラム（海外派遣事業）2005 ～ 2006年.
9. 「e-Learningを利用したESP教育の開発と実践」大阪大学大学教育実践センター 新型授業開発プロジェクト 2007 ～ 2008年.
10. 「実践英語、英語Speaking、英語Reading」大阪大学大学教育実践センター 新型授業開発プロジェクト—授業支援イニシャティブ 2008 ～ 2009年.
11. 「近代イギリス文化における「快」とフィジカリティの研究」日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究(C) 2008 ～ 2010年.
12. 「実践英語」大阪大学大学教育実践センター 新型授業開発プロジェクト—授業支援イニシャティブ 2010 ～ 2011年.
13. 「実践英語」大阪大学大学教育実践センター 新型授業開発プロジェクト—授業支援イニシャティブ 2011 ～ 2012年.
14. 『ロマン主義エコロジーの詩学—環境感受性の芽生えと展開』科学研究費補助金 研究成果公開促進費 2015年.

15. 「イギリス・ロマン主義におけるテキストと物質的環境の研究」日本学術振興会 学術研究助成基金助成金 基盤研究(C) 2015 ～ 2017年.
16. 「観念連合論の身体・物理的展開—近代文学批評理論の学際的再評価」日本学術振興会 学術研究助成基金助成金 基盤研究(C) 2019 ～ 2024年.

## 坂内（中前）千里教授 略歴・研究業績

### 学歴

- 1982年3月 奈良女子大学文学部国語国文学科中国語中国文学専攻卒業  
 1982年4月 京都大学大学院文学研究科博士前期課程中国語学中国文学専攻入学  
 1984年3月 同上修了  
 1984年4月 京都大学大学院文学研究科博士後期課程中国語学中国文学専攻進学  
 1984年10月 同上休学  
 1984年9月 北京大学高級進修生（1986年7月まで）  
 1986年7月 京都大学大学院文学研究科博士後期課程中国語学中国文学専攻復学  
 1986年9月 同上退学

### 職歴

- 1986年10月 京都大学文学部助手  
 1989年4月 大阪大学言語文化部講師  
 1993年10月 大阪大学言語文化部助教授  
 2005年4月 大阪大学大学院言語文化研究科助教授  
 2007年4月 大阪大学大学院言語文化研究科准教授  
 2010年4月 大阪大学大学院言語文化研究科教授  
 2022年4月 大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻教授

### 研究業績

#### 著書

##### 単著

1. 経部引用書から見た『説文解字繫傳』注釈考 大阪大学出版会 2014年2月 367頁

##### 共著

1. 尾崎雄二郎編『訓読 説文解字注』糸冊 東海大学出版会 1989年2月  
 : 担当 第五篇上 pp.1-274  
 2. 高岡幸一・宮川清司編『ことばは生きている』人文書院 1991年9月  
 : 担当 「漢字の世界」 pp.29-44

3. 興膳宏編『六朝詩人伝』大修館書店 2000年11月  
：担当 謝混 (pp.394-399)、范雲 (pp.516-533)、顔之推 (pp.895-909)
4. 興膳宏編『六朝詩人群像』(あじあブックス037) 大修館書店 2001年12月  
：担当 顔之推 pp.194-199
5. 高田時雄編『尾崎雄二郎 中国語音韻史の研究・拾遺』(映日叢書 第2種) 臨川書店  
2015年10月 校字担当

## 論文

1. 『古今韻会举要』に引く『説文解字』について  
『漢語史の諸問題』京都大学人文科学研究所 pp.341-366 1988年3月
2. 『説文解字注』に於ける改篆・増篆・刪篆について  
『中国語史の資料と方法』京都大学人文科学研究所 pp.291-350 1994年3月
3. 『説文解字繫傳』の特徴についての考察(一)  
『言語文化研究』第20号 pp.153-168 1994年3月
4. 『説文解字繫傳』引用書考——『爾雅』の引用を中心として——  
『興膳教授退官記念中国文学論集』 pp.485-500 汲古書院 2000年3月
5. 『説文解字繫傳』引『禮』考  
『中国文人の思考と表現』 pp.566-582 汲古書院 2000年7月
6. 『説文解字繫傳』引『書』考  
東方学会『東方学』第百五輯 pp.63-76 2003年1月
7. 『説文解字繫傳』引『易』考  
大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化研究』第30号 pp.165-179 2004年1月
8. 『説文解字繫傳』引『論語』考  
『中国学の十字路』 pp.434-446 研文出版 2006年4月
9. 『説文解字繫傳』引『詩』考  
大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化研究』第33号 pp.21-34 2007年3月
10. 『説文解字繫傳』データベースの構築  
(平成15年度～平成18年度科学研究費補助金(基盤研究(C)) 課題番号15520222  
研究成果報告書)(研究概要報告 pp.1-16 資料篇28頁) 2007年3月
11. 『説文解字繫傳』データベース化の試み  
京都大学21世紀COEプログラム 東アジア世界の人文情報学研究教育拠点  
漢字文化の全き継承と発展のために『人文情報学シンポジウム ―キャラクター・

データベース・共同行為― 報告書』 pp.41-54 2007年12月

12. 『説文解字繫傳』引『春秋』考

大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化研究』第34号 pp.1-17 2008年3月

13. 『説文解字繫傳』引『字書』考

大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化研究』第35号 pp.37-54 2009年3月

14. 「書傳」考 ― 南唐徐鉉の用法をめぐる ―

大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化研究』第36号 pp.65-84 2010年3月

15. 「俗」考 ― 南唐徐鉉の用法をめぐる ―

大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化研究』第37号 pp.57-75 2011年3月

16. 『説文解字繫傳』「通論篇」引用書考

『高田時雄教授退職記念 東方學研究論集』 pp.131-142 臨川書店 2014年6月

17. 『説文解字繫傳』「疑義篇」考（一）

大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化研究』第41号 pp.109-130 2015年3月

18. 『説文解字繫傳』「通釋篇」所収の親字について ― 「疑義篇」考（二） ―

大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化研究』第42号 pp.107-126 2016年3月

19. 『説文解字繫傳』「疑義篇」考（三） ― 「通釋篇」中の偏旁について ―

大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化研究』第43号 pp.51-75 2017年3月

20. 『説文解字繫傳』「部叙篇」考

大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化研究』第45号 pp.81-101 2019年3月

21. 『説文解字繫傳』「類聚篇」考

大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化研究』第46号 pp.7-24 2020年3月

22. 『説文解字繫傳』「通論篇」考（一）

大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化研究』第47号 pp.45-65 2021年3月

23. 『説文解字繫傳』中の会意・形声について

大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化研究』第48号 pp.77-91 2022年3月

24. 『説文解字繫傳』「通論篇」考（二）

大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化研究』第49号 pp.51-69 2023年3月

25. 『説文解字繫傳』に於ける指事について

『大阪大学大学院人文学研究科紀要』第1巻 pp.77-98 2024年3月

## その他

1. 呉大澂『字説』訳注（三）（共著）『均社論叢』12号 pp.59-64 1982年11月

2. 呉大澂『字説』訳注（四）（共著）『均社論叢』13号 pp.70-77 1983年5月
3. 呉大澂『字説』訳注（五）（共著）『均社論叢』14号 pp.52-60 1983年11月
4. 『特集 中国の古典辞書』（共著）『方言』（pp.20-25）担当  
大修館書店『月刊しにか』第7巻第3号 1996年3月

## 学会報告

1. 日本対段学的研究  
『訓詁通訊—記念段玉裁誕生二百五十周年專輯』8号 1985年11月
2. 段玉裁誕生二百五十周年記念大会簡報  
『均社論叢』16号 pp.85-92 1989年9月

## 口頭発表

1. 『説文解字繫傳』データベースの構築  
京都大學21世紀COE 東アジア世界の人文情報学研究教育據點  
サマーセミナー 2006（講師） 於：京都大学 2006年9月15日
2. 『説文解字繫傳』データベース化の試み  
京都大學21世紀COE 東アジア世界の人文情報学研究教育據點  
人文情報学シンポジウム 於：京都市国際交流会館 2007年3月3日

## 辞書・事典項目執筆

1. 『漢字百科大辞典』「説文解字」「玉篇」等5項目担当  
明治書院 1996年1月
2. 『日・中・英言語文化事典』「いす」「うつくしい」等37項目中国語部分担当  
マクミラン ランゲージハウス 2000年5月 他

## 瀧田恵巳 履歴・業績

### 【履歴】

|                   |                        |
|-------------------|------------------------|
| 昭和59 (1984) 年 3 月 | 福岡県立八幡南高等学校卒業          |
| 昭和60 (1985) 年 4 月 | 九州大学文学部入学              |
| 平成元 (1989) 年 3 月  | 九州大学文学部文学科卒業           |
| 平成元 (1989) 年 4 月  | 同大学大学院文学研究科修士課程入学      |
| 平成3 (1991) 年 3 月  | 同修了                    |
| 平成3 (1991) 年 4 月  | 同大学大学院文学研究科博士後期課程進学    |
| 平成6 (1994) 年 3 月  | 同単位修得退学                |
| 平成6 (1994) 年 4 月  | 大阪大学言語文化部講師着任          |
| 平成11 (1997) 年 1 月 | 大阪大学言語文化部助教授着任         |
| 平成17 (2005) 年 4 月 | 大阪大学大学院言語文化研究科助教授に配置換え |
| 平成19 (2007) 年 4 月 | 大阪大学大学院言語文化研究科准教授に職名変更 |
| 令和元 (2019) 年 4 月  | 大阪大学大学院言語文化研究科教授着任     |
| 令和4 (2022) 年 4 月  | 大阪大学大学院人文学研究科教授に配置換え   |

### 【主な業績】

1. 「hinとherの非対称性について」『九州ドイツ文学』第5号, 1991年12月, pp.129-150. 九州大学独文学会
2. 「言語における指示詞の意味について (上)」『言語文化研究』第25号, 1999年3月, pp.331-346. 大阪大学言語文化部・大学院言語文化研究科
3. 「言語における指示詞の意味について (下)」『言語文化研究』第27号, 2001年2月, pp.415-433. 大阪大学言語文化部・大学院言語文化研究科
4. „Herauf und hinauf“ 『言語文化共同研究プロジェクト2000・言語における指示をめぐって』, 2001年3月, pp.37-52. 大阪大学言語文化部・大学院言語文化研究科
5. 「ダイクシス体系におけるドイツ語指示詞の位置づけと分類について - Diewald(1991)によるherとhin及びその二重不変化詞の分類を例に -」『言語文化共同研究プロジェクト2004・言語における時空をめぐってⅢ』, 2005年5月, pp.21-30. 大阪大学言語文化部・大学院言語文化研究科
6. 「時間概念の空間的特徴による下位範疇構築の試み」『言語文化共同研究プロジェクト2006・言語における時空をめぐってⅤ』, 2007年5月, pp.21-30. 大阪大学言語文化部・

大学院言語文化研究科

7. 「入る方向表現による非空間的意味と内外関係について - 現代ドイツ語herein/hineinの分析と試論-」『言語文化研究』第34号, 2008年3月, pp.19-39. 大阪大学言語文化部・大学院言語文化研究科
8. 「コア図式による意味記述の一試論 - herとhinの空間的用法に関して-」『言語文化共同研究プロジェクト2007・言語における時空をめぐってVI』, 2008年5月, pp.21-30. 大阪大学言語文化部・大学院言語文化研究科
9. 「ダイクシス方向とOrigo 一想定上のダイクシスにおけるher-とhin-の空間的用法に関する一分析-」『言語文化研究』第35号, 2009年3月, pp.73-94. 大阪大学言語文化部・大学院言語文化研究科
10. 「照応の定義を巡って」『言語文化共同研究プロジェクト2008・言語における時空をめぐってVII』, 2009年5月, pp.31-40. 大阪大学言語文化部・大学院言語文化研究科
11. 「ダイクシス過程における「距離」とOrigoとの関係について」『言語文化研究』第39号, 2013年3月, pp.53-74. 大阪大学言語文化部・大学院言語文化研究科
12. 「Brugmannによる四つのダイクシスを巡って」『言語文化共同研究プロジェクト2012・時空と認知の言語学II』, 2013年5月, pp.29-38. 大阪大学言語文化部・大学院言語文化研究科
13. 「ダイクシスから見た物語構造」『言語文化研究』第40号, 2014年3月, pp.83-104. 大阪大学言語文化部・大学院言語文化研究科
14. 「人称と言語オルガノン・モデル」『言語文化研究』第43号, 2017年3月, pp.97-118. 大阪大学言語文化部・大学院言語文化研究科
15. 「コソアの意味記述と人称「一人称」と「二人称」は「三人称」か?」『言語文化共同研究プロジェクト2016・時空と認知の言語学VI』, 2017年5月, pp.21-30. 大阪大学言語文化部・大学院言語文化研究科
16. 「二つのOrigoと視点」『言語文化研究』第44号, 2018年3月, pp.69-88. 大阪大学言語文化部・大学院言語文化研究科
17. 「『デュランデ城』におけるダイクシス（その1）- 版によって her-と hin-が入れ替わる事例を中心に-」『言語文化共同研究プロジェクト2022・時空と認知の言語学XII』, 2023年5月, pp.30-39. 大阪大学大学院人文学研究科

(受賞)

平成20（2008）年 大阪大学共通教育賞

## 田野村忠温教授 履歴・研究業績

### 学歴

- 1977年4月 京都大学理学部入学
- 1980年4月 京都大学文学部に転学部（言語学専攻）
- 1982年3月 京都大学文学部卒業
- 1982年4月 京都大学大学院文学研究科修士課程入学（言語学専攻）
- 1984年3月 京都大学大学院文学研究科修士課程修了
- 1984年4月 京都大学大学院文学研究科博士後期課程入学（言語学専攻）
- 1987年3月 京都大学大学院文学研究科博士後期課程学修退学

### 職歴

#### （常勤職）

- 1988年4月 奈良大学文学部専任講師
- 1991年4月 大阪外国語大学外国語学部専任講師
- 1993年1月 大阪外国語大学外国語学部助教授
- 2005年3月 大阪外国語大学外国語学部教授
- 2007年4月 大阪外国語大学外国語学部国際文化学科長
- 2007年10月 大阪大学大学院文学研究科教授（大学の統合に伴う所属変更）
- 2022年4月 大阪大学大学院人文学研究科教授（大学院の統合に伴う所属変更）

#### （非常勤講師）

愛知教育大学、愛媛大学法文学部、大阪大学文学部・大学院文学研究科、京都大学文学部・大学院文学研究科、近畿大学、神戸市外国語大学、四天王寺国際仏教大学・同短期大学部、東京外国語大学、同志社女子大学短期大学部、同志社大学文化情報学部、武庫川女子大学・同短期大学部、龍谷大学

北京日本学硏究センター派遣専⼈（2002年9～10月、2003年2～7月、2009年3～4月）

#### （研究員）

関西大学東西学術硏究所委嘱研究員、国立国語硏究所共同硏究プロジェクト共同研究者、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化硏究所共同研究員

#### （各種委員）

国立国語硏究所外部評価委員会委員、日本学術振興会科学研究費委員会専門委員、日本学

術振興会国際事業委員会書面審査員、日本学術振興会卓越研究員候補者選考委員会書面審査員、日本学術振興会特別研究員等審査会専門委員、文部科学省科学技術・学術審議会専門委員、文部科学省新学術領域研究（研究課題提案型）書面審査委員

## 著書

- (1) 『現代日本語の文法Ⅰ―「のだ」の意味と用法―』（和泉書院、1990年1月）
- (2) 『Perlプログラミング―テキストデータ処理の基礎―』（大阪外国語大学学術研究双書31、大阪外国語大学、2003年3月）
- (3) 田野村忠温・服部匡・杉本武・石井正彦『コーパス日本語学ガイドブック』（文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班、2007年9月）
- (4) 田野村忠温・服部匡・杉本武・石井正彦『コーパス日本語学の展開』（文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班、2010年10月）
- (5) 『Rubyによるテキストデータ処理』（荻野綱男・田野村忠温編『講座ITと日本語研究4』、単独執筆、明治書院、2012年4月）
- (6) 内田慶市・田野村忠温編著『『華英通語』四種一解題と影印―』（関西大学出版部、2020年3月）
- (7) 『英語東漸とその周辺』（和泉書院、2023年6月）
- (8) 『近代日中新語の諸相』（和泉書院、2023年7月）

## 論文

- (1) 'On the ambiguity of contradictory expressions'（『言語学研究』第3号、1～22頁、京都大学言語学研究会、1984年12月）
- (2) 'On the ambiguity of tautological expressions' (*Proceedings of the Ninth Annual Meeting of the Kansai Linguistic Society*, pp. 37-45, 1985)
- (3) 「命題指定の『の』の用法と機能―諸説の検討―」（『言語学研究』第5号、85～120頁、京都大学言語学研究会、1986年12月）
- (4) 「否定疑問文小考」（『国語学』第152集、16～30頁、1988年3月）
- (5) 「『部屋を掃除する』と『部屋の掃除をする』」（『日本語学』第7巻第11号、70～80頁、1988年11月）
- (6) 「不適条件表現に関する覚書―現代日本語の二種の文法現象をめぐって―」（『奈良大学紀要』第17号、164～176頁、1989年3月）
- (7) 「現代日本語の数詞と助数詞一形態の整理と実態調査―」（『奈良大学紀要』第18号、194

- ～ 216頁、1990年3月)
- (8) 「文における判断をめぐって」(崎山理・佐藤昭裕編『アジアの諸言語と一般言語学』、785～795頁、三省堂、1990年9月)
- (9) 「疑問文における肯定と否定」(『国語学』第164集、1～14頁、1991年3月)
- (10) 「『も』の一用法についての覚書—『君もしつこいな』という言い方の位置付け—」(『日本語学』第10巻第9号、80～86頁、1991年9月)
- (11) 「『らしい』と『ようだ』の意味の相違について」(『言語学研究』第10号、62～78頁、京都大学言語学研究会、1991年12月)
- (12) 「『～だか』という言い方」(『大阪外国語大学論集』第6号、123～133頁、1991年12月)
- (13) 「現代語における予想の『そうだ』の意味について—『ようだ』との対比を含めて—」(国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究 十二』、1～20頁、和泉書院、1992年7月)
- (14) 「〈研究手帳〉『さんがい(三階)』と『よんかい(四階)』」(『いずみ通信』no. 16、10～11頁、1992年8月)
- (15) 「コンピュータによる連番の付け直し—言語学文書作成支援システム—」(『大阪外国語大学論集』第7号、69～78頁、1992年9月)
- (16) 「〔特集「の」の言語学〕『のだ』の機能」(『日本語学』第12巻第11号、34～42頁、1993年10月)
- (17) 「終助詞の文法—江戸語資料に見る終助詞の体系性—」(『日本語学』第13巻第4号、94～112頁、1994年4月)
- (18) 「丁寧体の述語否定形の選択に関する計量的調査—『～ません』と『～ないです』—」(『大阪外国語大学論集』第11号、51～66頁、1994年8月) [徐一平・曹大峰主編『中日対訳語料庫的研製と応用研究論文集』(北京：外語教学与研究出版社、2002年9月)に再録]
- (19) 「〔特集 日本語研究と日本語情報処理〕日本語研究の限界」(『日本語学』第14巻第4号、80～88頁、1995年4月)
- (20) 「意味」(『日本語学』第14巻第8号、1995年7月臨時増刊号『パソコンを使う日本語研究』、53～62頁、1995年7月)
- (21) 「〔特集 メタ言語〕メタ言語とは何か」(『日本語学』第15巻第11号、11～18頁、1996年10月)
- (22) 「〔特集 高校国語「現代語」を見直す〕各社『現代語』教科書を比較・点検する」(『日本語学』第16巻第5号、22～33頁、1997年5月)
- (23) 「各社『現代語』教科書を比較・点検する(続)」(『日本語学』第16巻第7号、68～74頁、1997年6月)

- (24) 「〈短信〉日本語の話者数順位について—日本語は世界第六位の言語か?—」(『国語学』第189集、37～41頁、1997年6月)
- (25) 「外来語アクセントにおける原語の発音の関与について—4モーラ以下の語を中心に—」(『日本語科学』第5号、67～87頁、1999年4月)
- (26) 「意味分析と電子資料—副詞『よほど』の分析を例に—」(山田進・菊地康人・糀山洋介編『日本語 意味と文法の風景—国広哲弥教授古稀記念論文集—』、211～224頁、ひつじ書房、2000年2月)
- (27) 「用例に基づく日本語研究—コーパス言語学—」(『日本語学』第19巻第5号、2000年4月臨時増刊号『新・文法用語入門』、192～201頁、2000年4月)
- (28) 「〔特集「用例」を採す〕電子メディアで用例を採す—インターネットの場合—」(『日本語学』第19巻第6号、25～34頁、2000年5月)
- (29) 「サ変動詞の活用ゆれについて—電子資料に基づく分析—」(『日本語科学』第9号、9～31頁、2001年4月) [中国日語教学研究会編『複合型高級外語人材的培養』(大連:大連理工大学出版社、2000年11月)に主要部分を再録]
- (30) 「辞と複合辞」(玉村文郎編『日本語学と言語学』、49～60頁、明治書院、2002年1月)
- (31) 「形容動詞連体形における『な／の』選択の一要因—『有名な』と『無名の』—」(『計量国語学』第23巻第4号、207～213頁、2002年3月)
- (32) 「コーパスによる文法の研究」(『日本語学』第22巻第5号、2003年4月臨時増刊号『コーパス言語学』、174～186頁、2003年4月)
- (33) 「〔特集 日本語の輸出〕中国の日本語」(『日本語学』第22巻第12号、6～15頁、2003年11月)
- (34) 「コーパス言語学の可能性と限界」(『日本学研究』第13期、32～47頁、北京日本学研究中心、2003年12月)
- (35) 「現代語のモダリティ」(尾上圭介編『朝倉日本語講座 6 文法II』、215～234頁、朝倉書店、2004年6月)
- (36) 「〔特集〈周辺〉〈例外〉の魅力—そこから見えてくるもの—〕周辺性・例外性と言語資料の性格—その相関の考察—」(『日本語文法』第4巻第2号、24～37頁、2004年9月)
- (37) 「コピュラ再考」(藤田保幸・山崎誠編『複合辞研究の現在』、249～270頁、和泉書院、2006年11月)
- (38) 丸山岳彦・田野村忠温「〔特集 コーパス日本語学の射程〕コーパス日本語学の射程」(特集巻頭論文)(『日本語科学』第22号、5～11頁、2007年10月)
- (39) 「日本語研究の観点からのサーチエンジンの比較評価—Yahoo!とGoogleの比較を中心に—」

- 一」(『計量国語学』第26巻第5号、147～157頁、2008年6月)
- (40)「複合辞の本性について—その構成と単位性—」(児玉一宏・小山哲春編『言葉と認知のメカニズム—山梨正明教授還暦記念論文集—』、489～497頁、ひつじ書房、2008年9月)
- (41)「大規模な電子資料に見る現代日本語の動態」(『待兼山論叢』第42号文化動態論篇、55～76頁、大阪大学大学院文学研究科、2008年12月)
- (42)「〔特集 日本語研究とコーパス〕コーパスと文法研究」(『国文学 解釈と鑑賞』第74巻第1号、79～87頁、2009年1月)
- (43)「コーパスからのコロケーション情報抽出—分析手法の検討とコロケーション辞典項目の試作—」(『阪大日本語研究』21、21～41頁、大阪大学大学院文学研究科日本語学講座、2009年2月)
- (44)「日本語研究の観点からのサーチエンジンの評価・統一検索ヒット件数の時間変動のその後とWeb文書量の推計の修正—」(『計量国語学』第26巻第8号、290～294頁、2009年3月)
- (45)「文法の中核と周辺—コーパスが観察可能にする文法の一面—」(田野村忠温・服部匡・杉本武・石井正彦『コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発Ⅲ』、154～165頁、文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班、2009年3月)
- (46)「サ変動詞の活用のゆれについて・統一大規模な電子資料の利用による分析の精密化—」(『日本語科学』第25号、91～103頁、2009年4月)
- (47)「〔特集「日本語コーパス」〕コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発」(『人工知能学会誌』第24巻第5号、647～655頁、2009年9月)
- (48)「〔特集 コーパスを活用した言語研究 (1)〕日本語コーパスとコロケーション—辞書記述への応用の可能性—」(『言語研究』第138号、1～23頁、2010年9月)
- (49) 'Retrieving collocational information from Japanese corpora: Its methods and the notion of "circumcollocate"' (Peter Grzybek, Emmerich Kelih and Ján Mačutek (eds.) *Text and Language: Structures · Functions · Interrelations*, Wien: Praesens Verlag, pp. 213-222, 2010)
- (50) 'The concept of "circumcollocate" and its significance for lexicography: A discussion with particular reference to the Japanese language' (Isabel Moskowich-Spiegel Fandiño et al. (eds.) *Language Windowing through Corpora* (Conference proceedings in electronic format), A Coruña, Spain: Universidade da Coruña, pp. 873-879, 2010)
- (51)「テキストエディタの応用」(荻野綱男・田野村忠温編『講座ITと日本語研究3 アプリ

- ケーションソフトの応用』、7～97頁、明治書院、2011年10月)
- (52)「コーパス言語学の新たな展開」(『日本語学』第30巻第14号、2011年11月臨時増刊号『言語研究の新たな展開』、95～104頁、2011年11月)
- (53)「コーパス言語学と語彙」(斎藤倫明・石井正彦編『これからの語彙論』、149～161頁、ひつじ書房、2011年12月)
- (54)「日本語研究の観点から見た昨今のサーチエンジン事情—GoogleとYahoo!の技術提携の結果—」(『計量国語学』第28巻第5号、186～193頁、2012年6月)
- (55)「日本語のコロケーション」(堀正広編『これからのコロケーション研究』、193～226頁、ひつじ書房、2012年12月)
- (56)「BCCWJに収められた新種の言語資料の特性について—データ重複の諸相とコーパス使用上の注意点—」(『待兼山論叢』第46号文化動態論篇、59～82頁、大阪大学大学院文学研究科、2012年12月)
- (57)「『代わり』の意味分析」(藤田保幸編『形式語研究論集』、61～85頁、和泉書院、2013年10月)
- (58) 'A corpus-based analysis of some time-related aspects of contemporary Japanese' (Giuliana Diani, Julia Bamford and Silvia Cavalieri(eds.) *Variation and Change in Spoken and Written Discourse: Perspectives from Corpus Linguistics*, Amsterdam: John Benjamins, pp. 255-267, 2013)
- (59)「BCCWJの資料的特性—コーパス理解の重要性—」(田野村忠温編『講座日本語コーパス6 コーパスと日本語学』、119～151頁、朝倉書店、2014年12月)
- (60)「日本語研究とインターネット」(田野村忠温編『講座日本語コーパス6 コーパスと日本語学』、153～162頁、朝倉書店、2014年12月)
- (61)「意識地名『牛津』『剣橋』の発生と消長」(『大阪大学大学院文学研究科紀要』第55巻、81～137頁、2015年3月)[沈国威・内田慶市編著『東アジア言語接触の研究』(関西大学出版部、2016年2月)に加筆版を再録]
- (62)「意識地名“牛津”“剣橋”の産生和興衰—近代中日語言中詞匯交流的一面」(王曉雲・趙平訳)(趙平・劉利音主編『跨文化交際与区域經濟發展論』、21～29頁、北京：光明日報出版社、2015年8月)[(61)の抄訳]
- (63)「中国語の外来名表記に関する覚書—地名Amsterdamの意識をめぐる議論の検討ほか—」(『待兼山論叢』第49号文化動態論篇、9～34頁、大阪大学大学院文学研究科、2015年12月)
- (64)「『科学』の語史—漸次的・段階的変貌と普及の様相—」(『大阪大学大学院文学研究科

- 紀要』第56巻、123～181頁、2016年3月)
- (65)「〔特集 WWWコーパスを用いた研究〕Webコーパスの概念と種類、利用価値—語史研究の情報源としてのWebコーパス—」(『計量国語学』第30巻第6号、326～343頁、2016年9月)
- (66)「真珠湾の日中名称小史」(『待兼山論叢』第50号文化動態論篇、29～55頁、大阪大学大学院文学研究科、2016年12月)
- (67)「近現代語『可能』の成立—日中両語間の双方向的影響—」(『大阪大学大学院文学研究科紀要』第57巻、97～150頁、2017年3月)
- (68)「サーチエンジンの示すヒット件数の信頼性再び—Google検索をめぐる最新状況—」(『計量国語学』第30巻第8号、499～505頁、2017年3月)
- (69)「日本最初期英語研究書の依拠資料と編集」(『待兼山論叢』第51号文化動態論篇、21～56頁、大阪大学大学院文学研究科、2017年12月)
- (70)「新出資料『華英通語』道光本と中国初期英語学習書の系譜—附論 福沢諭吉編訳『増訂華英通語』—」(『大阪大学大学院文学研究科紀要』第58巻、165～222頁、2018年3月)
- (71)「言語名『英語』の確立」(『東アジア文化交渉研究』第11号、3～26頁、関西大学大学院東アジア文化研究科、2018年3月)
- (72)「ダッシュ、プライム」(『数学セミナー』第57巻第8号、54～58頁、2018年8月)
- (73)「中国語を表す言語名の諸相—その多様性、淘汰と変質、用法差—」(『待兼山論叢』第52号文化動態論篇、67～102頁、大阪大学大学院文学研究科、2018年12月)
- (74)「中国初期英語学習書における英語発音の漢字表記—流音の知覚と表記—」(『大阪大学大学院文学研究科紀要』第59巻、221～272頁、2019年3月)
- (75)「〔特集 和製のことば・和製の文字〕和製英語—悪習との訣別—」(『日本語学』第38巻第7号、54～63頁、2019年7月)
- (76)「19世紀中国有関英語的出版物对日本人英語学習の影響：概観与福沢諭吉《増訂華英通語》的分析」(孫曉訳)(李雪涛・沈国威主編『亞洲与世界』第2輯、320～334頁、北京：社会科学文献出版社、2019年11月)[前半は書き下ろし、後半は(70)の後半の一部]
- (77)「新出資料道光本《華英通語》及中国早期英語學習書の系譜」(朱曉平訳)(沈国威・彭晞・王奕紅主編『亞洲概念史研究』第5巻、113～136頁、北京：商務印書館、2019年12月)[(70)の前半の翻訳]
- (78)「言語研究資料としての近代中国地理文献彙集の信頼性—『海国図志』と『小方壺齋輿地叢鈔』—」(『或問』第36号、1～10頁、近代東西言語文化接触研究会、2019年12月)
- (79)「福沢諭吉の『コルリ』(カレー)をめぐる」(『阪大日本語研究』32、25～35頁、大

- 阪大学大学院文学研究科日本語学講座、2020年2月)
- (80)「注音の『切』、『合』、小字」(内田慶市・田野村忠温編著『『華英通語』四種—解題と影印—』、59～67頁、関西大学出版部、2020年3月)
- (81)「日本語の呼称の歴史」(『大阪大学大学院文学研究科紀要』第60巻、127～183頁、2020年3月)
- (82)「『日本語学』とその関連語—意味と構造の変容—」(国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究 三十九』、1～18頁、和泉書院、2020年3月)
- (83)「ドイツ国名『独逸』成立の過程とその背景—社会的条件と日本語における音訳語の特異性—」(『東アジア文化交渉研究』第13号、61～79頁、関西大学大学院東アジア文化研究科、2020年3月)
- (84)「コーヒーを表す中国語名称の変遷」(『或問』第37号、41～60頁、近代東西言語文化接触研究会、2020年6月)
- (85)「漢語複合名詞の形成と再分析—動詞-名詞型複合名詞の二義性—」(『現代日本語研究』第12号、18～37頁、大阪大学大学院文学研究科日本語学講座現代日本語学研究室、2020年12月)
- (86)「北京故宫博物院蔵『華夷訳語』丁種本第1類の分析—西洋館訳語の編纂とドイツ語の名称の問題を中心に—」(『待兼山論叢』第54号文化動態論篇、1～32頁、大阪大学大学院文学研究科、2020年12月)
- (87)「カレーを表す中国語名称の変遷」(『或問』第38号、15～25頁、近代東西言語文化接触研究会、2020年12月)
- (88)「『啤酒』の謎の解—この不可解な名称の成立過程—」(沈国威・奥村佳代子編『内田慶市教授退職記念論文集 文化交渉と言語接触』、165～178頁、東方書店、2021年2月)
- (89)「音訳語『珈琲』の歴史」(『阪大日本語研究』33、33～60頁、大阪大学大学院文学研究科日本語学講座、2021年2月)
- (90)「『啖咭喇国訳語』の編纂者と編纂過程—中国最初の英語辞典の分析—」(『大阪大学大学院文学研究科紀要』第61巻、125～174頁、2021年3月)[奥村佳代子編著『周縁資料と言語接触研究』(関西大学東西学術研究所、2023年3月)に改訂版を再録]
- (91)「『化石』の成立と展開」(国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究 四十』、63～80頁、和泉書院、2021年8月)
- (92)「音訳語における口偏の機能について—口偏蔑視表示説の検討—」(『或問』第40号、13～26頁、近代東西言語文化接触研究会、2021年12月)
- (93)「『接種』の語史—一種痘関連用語の生成と消長—」(『阪大日本語研究』34、27～45頁、

大阪大学大学院文学研究科日本語学講座、2022年2月)

- (94)「日本語の漢語の文法的特異性とその中国語への影響—『設計』の近現代語史—」(『大阪大学大学院文学研究科紀要』第62巻、127～172頁、2022年3月)
- (95)「音訳と意識—概念の体系化と歴史—」(『或問』第41号、141～160頁、近代東西言語文化接触研究会、2022年6月)
- (96)「清代欧洲諸語言詞典、学習書籍中の注音方式—音節結構的处理」(馮珩訳)(孫伯君・麻曉芳主編『“訳音対勘”的材料与方法』、375～388頁、合肥：黄山書社、2022年9月)
- (97)「『海録』諸版の系譜」(『或問』第42号、1～16頁、近代東西言語文化接触研究会、2022年12月)
- (98)「『海国図志』版問題新論—従来未知の版区別の発見とその含意—」(『大阪大学大学院文学研究科紀要』第63巻、115～143頁、2023年2月)
- (99)「幕末英語学習書4点の依拠資料と著作者—『英米対話捷徑』『和英商賈対話集』『商用通語』『ゑんぎりしことば』—」(『或問』第44号、19～42頁、近代東西言語文化接触研究会、2023年12月)
- (100)「指称漢語的諸名称—其多様性、歴史与用法差異」(沙広聡訳)(張西平主編『国際漢語教育史研究』第8輯、頁範囲未定、北京：商務印書館、2024年1月) [(73)の改訂版の翻訳]
- (101)「『海国図志』版問題続考—新たな版区別の発見と諸版間の継承関係—」(『大阪大学大学院人文学研究科紀要』第1巻、219～233頁、2024年3月)

#### 解説、事典項目、学界展望、書評等

- (1)「海外現代批評理論の50冊」(『シコウシテ』第21号、178～203頁、1989年9月、共著、エドワード・サピア『言語』、フェルディナンド・ドゥ・ソシュール『一般言語学講義』、ノーム・チョムスキー『文法理論の諸相』、ローマン・ヤーコプソン『一般言語学』の項を担当)
- (2)「自然言語理解・構文解析」(『数理科学』第28巻第10号、37～39頁、1990年10月)
- (3)「参考文献の見つけ方 現代語の参考文献」(『日本語学』第13巻第6号、1994年5月臨時増刊号『ハンドブック 論文・レポートの書き方』、140～147頁、1994年5月)
- (4)「〔特集 平成6年国語国文学界の展望 (2)〕国語学—近代・現代 (文法)」(『文学・語学』第149号、72～73頁、1995年12月)
- (5)「〔特集 日本語研究の将来と国語学会〕雑誌『国語学』のあり方について」(『国語学』第200集、18～20頁、2000年3月)
- (6)「正規表現・文字コード」(荻野綱男・田野村忠温編『講座ITと日本語研究3 アプリケー

- ションソフトの応用』、219～238頁、明治書院、2011年10月)
- (7)「田野村忠温」(『日本語学』第31巻第14号、2012年11月臨時増刊号『『日本語学』の30年』、65頁、2012年11月) [『『日本語学』執筆者100人の歩み』の中の1項目]
- (8)「日本語研究論文作成支援ツール—例文番号の付け直しほか—」(『日本語学』第32巻第14号、2013年11月臨時増刊号『ことば研究の道具2013』、216～223頁、2013年11月)
- (9)「コーパス言語学」「ノダ」(日本語文法学会編『日本語文法事典』、234～235頁、478～481頁、大修館書店、2014年7月)
- (10)「複合助詞」「文の構造」(佐藤武義・前田富祺他編『日本語大事典』、1729～1730頁、1785～1787頁、朝倉書店、2014年11月)
- (11)「スクリプト言語」(田野村忠温編『講座日本語コーパス6 コーパスと日本語学』、163～172頁、朝倉書店、2014年12月)
- (12)「書評 近藤泰弘・田中牧郎・小木曾智信編『コーパスと日本語史研究』」(『日本語の研究』第12巻第4号、151～158頁、2016年10月)
- (13)「書評 エレツ・エイデン、ジャン＝バティースト・ミシェル著、阪本芳久訳、高安美佐子解説『カルチャロミクス 文化をビッグデータで計測する』」(『社会言語科学』第20巻第1号、193～198頁、2017年9月)
- (14)「正規表現」(日本語学会編『日本語学大辞典』、560頁、東京堂出版、2018年10月)

#### 日本語教科書

- (1) 玉村文郎編『大学・大学院総合日本語 櫻～さくら～』(凡人社、2002年6月) [「21課 構文解析」を担当]
- (2) 李思純・斉藤里見編『新日本語2』(華中科技大学出版社、2014年9月) [読解文の執筆を担当]

#### 編集

- (1) 荻野綱男・田野村忠温編『講座ITと日本語研究1 コンピュータ利用の基礎知識』(明治書院、2011年4月)
- (2) 荻野綱男・田野村忠温編『講座ITと日本語研究2 アプリケーションソフトの基礎』(明治書院、2011年5月)
- (3) 荻野綱男・田野村忠温編『講座ITと日本語研究3 アプリケーションソフトの応用』(明治書院、2011年10月)
- (4) 荻野綱男・田野村忠温編『講座ITと日本語研究4 Rubyによるテキストデータ処理』(明

治書院、2012年4月)

- (5) 荻野綱男・田野村忠温編『講座ITと日本語研究 5 コーパスの作成と活用』(明治書院、2011年6月)
- (6) 荻野綱男・田野村忠温編『講座ITと日本語研究 6 コーパスとしてのウェブ』(明治書院、2011年7月)
- (7) 荻野綱男・田野村忠温編『講座ITと日本語研究 7 ウェブによる情報収集』(明治書院、2011年4月)
- (8) 荻野綱男・田野村忠温編『講座ITと日本語研究 8 質問調査法と統計処理』(明治書院、2012年6月)
- (9) 田野村忠温編『講座日本語コーパス 6 コーパスと日本語学』(朝倉書店、2014年12月)
- (10) 服部匡『服部匡日本語論考選集』(和泉書院、2021年7月)

## 翻訳

- (1) R・グリシュマン著、山梨正明・田野村忠温訳『計算言語学—コンピュータの自然言語理解—』(サイエンス社、1989年2月) [Ralph Grishman *Computational Linguistics: An Introduction* (Cambridge: Cambridge University Press, 1986)の翻訳]

## 講演・研究発表 (大阪大学在職期間における主要なもののみ)

- (1) 「電子資料と日本語研究」(講演)(浙江工業大学、2008年3月21日)
- (2) 「電子資料と日本語研究」(講演)(蘇州大学、2008年3月24日)
- (3) 「電子資料と日本語研究」(講演)(中国人民解放军外国語学院、2008年3月28日)
- (4) 「文法の中核と周辺—コーパスが観察可能にする文法的一面—」(特定領域研究「日本語コーパス」公開ワークショップ、国立国語研究所、2009年3月15日)
- (5) 「コーパスと日本語研究—最近(過去3年)の動向—」(講演)(北京日本学研究中心—日本学総合講座、2009年4月9日)
- (6) 「電子資料と日本語研究—昨今の動向と事例研究—」(京都大学言語学懇話会例会、京大会館、2009年7月11日)
- (7) 「電子資料と日本語研究—昨今の動向と事例研究—」(講演)(東京外国語大学グローバルCOEプログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」講演会、2009年8月6日)
- (8) 'Retrieving collocational information from Japanese corpora: An attempt towards the creation of a dictionary of collocations' (Qualico 2009 (Quantitative Linguistics Conference), Karl-Franzens-Universität Graz (オーストリア), 2009年9月18日)

- (9) 「電子資料と日本語研究—昨今の動向と事例研究—」(阪大日本語学同窓会総会 阪大日本語学研究会、2009年9月26日)
- (10) 'A corpus-based analysis of some time-related aspects of contemporary Japanese' (CLAVIER 09 (Corpus Linguistics and Language Variation in English Research), Università degli Studi di Modena e Reggio Emilia (イタリア), 2009年11月5日)
- (11) 「コーパスからのコロケーション情報の抽出・統一辞書記述への応用の可能性を前提とした考察—」(国立国語研究所共同研究プロジェクト「コーパス日本語学の創成」研究発表会、2010年2月1日)
- (12) 「日本語コーパスとコロケーション—辞書記述への応用の可能性—」(講演)(北京日本学研究中心、2010年3月26日)
- (13) 'The concept of "circumcollocate" and its significance for lexicography' (CILC-10 (Congreso Internacional de Lingüística de Corpus), Universidade da Coruña (スペイン), 2010年5月14日)
- (14) 「電子資料と日本語研究—動向と展望—」(韓日コーパス言語学ワークショップ、高麗大学校、2010年10月10日)
- (15) 「コーパスと日本語文法研究」(北京日本学研究中心創立25周年記念国際シンポジウム言語分科会パネルディスカッション「コーパスと日本語学及び日本語教育学」、2010年10月17日)
- (16) 「Webコーパスとコロケーション」(日本語学会秋季大会ワークショップ「コーパス日本語学の新展開—コーパスと方法論の多様化—」、愛知大学、2010年10月23日)
- (17) 「コーパスと日本語研究—動向と展望—」(コーパス日本語学セミナー、国立台湾大学、2010年12月4日)
- (18) 「電子資料と日本語研究—動向と展望—」(講演)(名古屋大学大学院国際開発研究科、2010年12月14日)
- (19) 「コーパスと日本語研究—動向と展望—」(講演)(香港中文大学、2011年2月25日)
- (20) 「日本語研究とインターネット」(特定領域研究「日本語コーパス」公開ワークショップ、国立国語研究所、2011年3月16日)
- (21) 「日本語コーパス—その現状と応用の可能性—」(講演)(シンガポール日本人会、2011年3月26日)
- (22) 「大規模コーパスとしてのインターネット」(ポスター発表)(『現代日本語書き言葉均衡コーパス』公開記念講演会、国立国語研究所、2011年8月2～3日)
- (23) 「日本語研究とインターネット」(世界日本語教育研究大会、天津外国語大学、2011年8月)

月21日)

- (24) 「コーパスをめぐる 2、3 の報告」(国立国語研究所共同研究プロジェクト「コーパス日本語学の創成」研究発表会、2011年9月3日)
- (25) 「コーパス日本語研究の最新動向」(講演)(元智大学(台湾)、2011年9月11日)
- (26) 'Corpus linguistics: The state of the art and applications' (講演)(国立成功大学(台湾)、2011年9月13日)
- (27) 「コーパス日本語研究の知識と方法」(講演)(元智大学(台湾)、2011年9月13日)
- (28) 'Constructing a huge Web corpus: Its methods and problems' (講演)(元智大学(台湾)、2011年9月15日)
- (29) 「日本語のコロケーション研究—概念と課題—」(中部日本・日本語学研究会、岐阜聖徳学園大学、2011年11月5日)
- (30) 'On "recursive collocation": Collocation containing collocation as a subpart' (SdP-11 (Simposio internacional: Sociología de las palabras), Universidad de Murcia (スペイン), 2011年12月2日)
- (31) 「『少納言』『中納言』検索結果活用ツール」(コーパス日本語学ワークショップ、国立国語研究所、2012年3月5日)
- (32) 「日本語の改善—その根拠の妥当性と実現可能性—」(講演)(日本学会議言語・文学委員会科学と日本語分科会、2012年3月19日)
- (33) 「日本語研究とコーパス—その方法と可能性—」「日本語研究の基礎—資料と方法—」(講演)(華中科技大学、2012年3月22～23日)
- (34) 「BCCWJに含まれるウェブデータの特性について—データ重複の諸相とBCCWJ使用上の注意点—」(コーパス日本語学ワークショップ、国立国語研究所、2012年9月7日)
- (35) 「日本語コーパスと複文の研究—BCCWJの特性と利用の方法—」(講演)(「複文構文の意味の研究」公開シンポジウム、国立国語研究所、2012年12月15日)
- (36) 「コーパスの種類と特徴」「BCCWJの資料的特性と利用上の注意点」「BCCWJの有効利用の方法」(講演)(元智大学(台湾)、2013年5月11～12日)
- (37) 「日本語研究とコーパス—コーパスの概念と利用の基礎—」「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』—その概要、用法、使用上の注意—」「日本語のコロケーション—概念の考察とコーパスに基づく分析—」(講演)(華中科技大学、2013年9月13日)
- (38) 「日本語コーパスの現在—BCCWJの資料的特性を中心に—」(講演)(中南地域日本語教育研究シンポジウム、湖南大学、2013年10月6日)
- (39) 「近代日中両語における語彙交流の一面」(講演)(「跨文化交際与区域経済発展」国際研

- 討会暨貴州日語教学研究会年会、貴州財經大学、2014年7月5日)
- (40) 「意識地名『牛津』『劍橋』の発生と消長」(漢字文化圏近代語研究会国際シンポジウム「東アジアにおける漢字漢語の創出と共有」、早稲田大学、2015年3月21日)
- (41) 「意識地名“牛津”、“劍橋”の產生和興衰—近代中日語言中詞匯交流的一面」(講演)(武漢大学史学博士論壇“新史料与新史学”、武漢大学、2015年7月9日)
- (42) 「『科学』の語史」(関西大学東西学術研究所研究例会(言語交渉研究班)、2016年1月23日)
- (43) 「日中語彙交流の過去と現在」「日本語コーパスの現在」(講演)(中国海洋大学、2016年3月22～23日)
- (44) 「『科学』の起源—中国起源説の検証—」(漢字文化圏近代語研究会国際シンポジウム「東アジア言語接触の研究」、東華大学(中国)、2016年3月26日)
- (45) 「真珠湾の日中両語における名称について」(東アジア文化交渉学会国際学術大会、関西大学、2016年5月8日)
- (46) 「近現代語『可能』の成立—諸説の検討と新仮説—」(漢字文化圏近代語研究会国際シンポジウム「近代における翻訳と文体」、延世大学校(韓国)、2017年3月25日)
- (47) 「言語名『英語』の確立」(東アジア文化交渉学会国際学術大会、北京外国語大学、2017年5月13日)
- (48) 「新出資料『華英通語』道光本と中国初期英語教材の系譜」(関西大学東西学術研究所研究例会(言語交渉研究班)「『華英通語』をめぐって—清末英語事始」、2017年6月16日)
- (49) 'Etymology and history of the translated English place names 牛津 and 劍橋' (代読による発表)(The 'Translation and Transformation: The Formation of New Concepts in Britain and East Asia' workshop, The University of Oxford China Centre, 2017年9月6日)
- (50) 「言語の研究とコンピュータ、インターネット」(講演)(関西大学大学院外国語教育学研究科院生学術フォーラム、2017年12月2日)
- (51) 「日本最初期英語研究書の依拠資料と編集—『諳厄利亜言語和解』『諳厄利亜興学小筌』『諳厄利亜語林大成』—」(関西大学東西学術研究所研究例会(言語交渉研究班)、2017年12月8日)
- (52) 「デジタル技術が拓く言語研究の新境地」(講演)(韓国日本学会国際学術大会、淑明女子大学校(韓国)、2018年2月10日)
- (53) 「『華英通語』道光本とその作者、成立背景」(漢字文化圏近代語研究会国際シンポジウム「語彙史から概念史へ」、南京大学、2018年3月25日)

- (54)「中国初期英語学習書における英語発音の漢字表記—英語の流音の知覚と表記—」(東アジア文化交渉学会国際学術大会、香港城市大学、2018年5月13日)
- (55)「指称漢語的諸名称—它們的歷史与用法差異」(講演)(數位化時代下的漢語全球教育史国際学術研討会暨世界漢語教育史研究学会年会、関西大学、2018年10月21日)
- (56)「デジタル情報と言語の研究」(講演)(関西大学3研究所合同シンポジウム「デジタル時代の人文・社会科学」、2018年11月10日)
- (57)「『華英通語』道光本一首部由中国人編写的正統英語學習書」(“語言互動史研究—近代東西語言接觸研究学術會議2018”、北京外国語大学、2018年12月22日)
- (58)「言語研究に対する電子資料の新たな衝撃—コーパスの先にあるもの—」(講演)(中南地区日語教学研究学術研討会、湖南大学、2019年3月17日)
- (59)「中国語における日本語の呼称の変遷」(漢字文化圏近代語研究会国際シンポジウム、北京外国語大学、2019年3月23日)
- (60)「日本語の呼称の歴史」(講演)(日本近代語研究会春季発表大会、関西大学、2019年5月17日)
- (61)「日中言語交流の過去と現在」(講演)(湖北第二師範学院、2019年5月30日)
- (62)「近代日中語彙交流の研究と言語資料アーカイブ」(講演)(華中科技大学、2019年5月31日)
- (63)「中日両国語言中的德国国名の歴史—附論“額呼馬尼雅”—」(“四百年來東西方語言之互動—近代東西語言接觸研究学術會議2019”、北京外国語大学、2019年11月9日)
- (64)「『嘆咭喇国訳語』の編纂過程」(関西大学東西学術研究所研究例会(言語交渉研究班)「言語接觸研究の諸相」、2020年1月24日)
- (65)「コーヒーを表す中国語名称の変遷—音訳語研究の新視点—」(関西大学東西学術研究所研究例会(言語交渉研究班)、2020年7月17日)
- (66)「『啤酒』の謎の解—この不可解な名称の成立過程—」(関西大学東西学術研究所研究例会(言語交渉研究班)・国際シンポジウム「文化交渉と言語接觸」、2021年2月19日)
- (67)「『化石』の語史—漢語複合名詞の形成と再分析—」(オンライン発表)(東アジア文化交渉学会国際学術大会、二松学舎大学、2021年5月9日)
- (68)「咖喱の中文名称小史」(オンライン発表)(“近代以来的西餐、洋飯書与大餐館”工作坊、復旦大学、2021年11月19日)
- (69)「意識と音訳—概念の再考と歴史—」(関西大学東西学術研究所研究例会(言語交渉研究班)「荒川清秀氏追悼 近代言語接觸研究シンポジウム」、2022年3月13日)
- (70)「『接種』の語史—一種痘関連用語の生成と消長—」(オンライン発表)(東アジア文化交渉

- 学会国際学術大会、啓明大学校（韓国）、2022年5月8日）
- (71) 「『海録』諸版とその系譜」（関西大学東西学術研究所研究例会（言語交渉研究班）、2022年10月28日）
- (72) 「『海国図志』版問題新論」（関西大学東西学術研究所研究例会（言語交渉研究班）、2022年12月17日）
- (73) 「『電視』の由来—翻訳新語研究の盲点—」（オンライン発表）（関西大学アジア・オープン・リサーチセンター研究集会「言語研究とデジタルヒューマニティーズ」、2023年3月10日）
- (74) 「『海国図志』版問題続考」（オンライン発表）（東アジア文化交渉学会国際学術大会、南开大学（中国）、2023年5月6日）
- (75) 「『海国図志』版本問題新論」（“事件・詞語・図像—中日近代交渉史学術報告会”、復旦大学、2023年7月29日）
- (76) 「日中両語の相互影響と近現代語彙の形成」（講演）（元智大学（台湾）、2023年11月6日）
- (77) 「幕末英語学習書4点の依拠資料と著作者—『英米対話捷徑』『和英商賈対話集』『商用通語』『ゑんぎりしことば』—」（関西大学東西学術研究所研究例会（言語交渉研究班）「外国語学習の歴史と諸問題」、2023年12月8日）
- (78) 「舶来飲食名称の形成と漢語方言之間的相互影響—以“啤酒”一詞為中心」（“東西味融：近代以来西餐在中国的演变、製作芸術与礼儀生活”学術研討会、復旦大学、2023年12月26日）
- (79) ‘Translation of Western languages and Sino-Japanese linguistic interactions’（講演）（Nanyang Technological University（シンガポール）、2024年2月6日）
- (80) 「漫談 我が研究の遍歴」（最終講義、大阪大学、2024年2月14日）
- (81) 「西学東漸と日中近現代語彙の形成—課題の発見と考察—」（講演）（北京大学、2024年3月12日）
- (82) 「『卡車』の語史—その起源と展開—」（“漢字文化圏の近代新詞語：材料、概念与翻譯”国際学術研討会、鄭州大学、2024年3月16日）

## 米田信子 履歴・研究業績

### 【略歴】

- 1979.3 岡山県立岡山大安寺高等学校卒業
- 1979.4 松蔭女子学院大学文学部英米文学科入学
- 1983.3 同卒業
- 1993.4 神戸市外国語大学大学院外国語学研究科修士課程入学
- 1995.3 同修了
- 1995.4 東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程入学
- 2000.3 同修了
- 2001.4 大阪女学院短期大学英語科 特任講師着任
- 2002.4 大阪女学院短期大学英語科 准教授着任
- 2004.4 大阪女学院大学国際・英語学部 准教授着任
- 2008.4 大阪女学院大学国際・英語学部 教授着任
- 2008.10 大阪大学世界言語研究センター 准教授着任
- 2010.4 大阪大学世界言語研究センター 教授着任
- 2012.4 大阪大学大学院言語文化研究科 教授着任
- 2022.4 大阪大学大学院人文学研究科 教授着任

### 【学位】

- 1983.3. 文学士（松蔭女子学院大学）
- 1995.3. 国際関係学修士（神戸市外国語大学）
- 2000.3. 博士（学術）（東京外国語大学）

### 【主な研究業績】

#### 著書

1. 2022. 『アフリカ諸地域 ～ 20世紀』（岩波講座『世界歴史』第18巻）. 東京：岩波書店.  
永原陽子（編）他10名との共著. 担当章：「歴史言語学から見るバントゥ系民族の移動」.
2. 2019. *Descriptive Materials of Morphosyntactic Microvariation in Bantu*. Fuchu:  
Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa. Shinagawa,  
Daisuke and Yuko Abe (eds.) 他8名との共著. 担当章：‘Ganda’（Judith Nakayizaとの  
共著）, ‘Matengo’.

3. 2018. *Levels in Clause Linkage: A crosslinguistic survey*. Berlin: de Gruyter Mouton. Tsunoda, Tasaku (ed.) 他12名との共著. 担当章: 'Herero'.
4. 2016. 『ナミビアを知るための53章』東京: 明石書店. 水野一晴・永原陽子(編) 他29名との共著. 担当章: 「多言語国家ナミビアの言語」「多言語主義と英語」「教育現場の言語」「ナミビアの出版事情」「ヘレロ語を話す人々」「エネルギーな町カトゥトゥラ」.
5. 2012. 『アフリカ諸語文法要覧』広島: 溪水社. 塩田勝彦(編) 他17名との共著. 担当章: 「バントゥ諸語概説」(小森淳子・神谷俊郎との共著), 「ヘレロ語」「マテンゴ語」.
6. 2012. 『Sounds Great ～英語リダクションをリスニング中心に～』東京: 英宝社. 今井由美子・平岩葉子・Paul Evansとの共著.
7. 2012. 『ボツワナを知るための52章』東京: 明石書店. 池谷和信(編) 他33名との共著. 担当章: 「ヘレロ語を話す人びとーヘレロ人とンバンデル人ー」.
8. 2010. 『Sounds Make Perfect 英語音声学への扉～発音とリスニングを中心に～』東京: 英宝社. 今井由美子・井上球美子・井上聖子・大塚朝美・高谷華・上田洋子との共著.
9. 2008. 『アクション別フィールドワーク入門』京都: 世界思想社武田丈・亀井伸孝(編) 他12名との共著. 担当章: 「多言語社会のゆくえをのぞむ」.
10. 2006. *Vocabulary of the Matengo Language*. Fuchu: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.
11. 2006. *Bibliography of African Language Study: ILCAA 1964-2006*. Fuchu: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa. Ryohei Kagayaとの共編.
12. 2004. 『Phonetics in Context 英語音声学の基礎: 理論と実践』東京: 北星堂書店. 大塚朝美・井上球美子・今井由美子・上田洋子との共著.

## 論文

1. Forthcoming. 'Information structure, Topic and focus.' In: Marten, L., N. C. Kula, J. Zeller, and E. Hurst (eds.) *The Oxford Guide to the Bantu Languages*. Oxford: Oxford University Press. (Yukiko Morimotoとの共著) .
2. Forthcoming. 'Matengo.' In: Marten, L., N. C. Kula, J. Zeller, and E. Hurst (eds.) *The Oxford Guide to the Bantu Languages*. Oxford: Oxford University Press.
3. 2024. 'Micro-variation of noun-modifying constructions in Bantu languages.' In: Marten, L., R. Guérois, H. Gibson, and E. Bloom-Ström (eds.) *Morphosyntactic Variation in Bantu*. Oxford: Oxford University Press.
4. 2024. 'Multiple-object constructions in Ganda (JE15).' In: Gibson, H., R. Guérois, G.

- Mapunda, and L. Marten (eds.) *Morphosyntactic Variation in East African Bantu Languages*. Berlin: Language Science Press. 155-189. (Judith Nakayizaとの共著)
5. 2023. 「状態変化動詞と事象の所有一経験主の語彙表示をめぐる一」岸本秀樹・臼杵岳・于一楽 (編) 『構文形式と語彙情報』東京：開拓社. 280-303. (今泉志奈子・藤縄康弘・高橋美穂との共著)
  6. 2022. 'Noncausal/causal verb alternations in Swahili.' *Linguistique et Langues Africaines*. 8(2) <https://journals.openedition.org/lla/4561>.
  7. 2022. 「バントゥ諸語の参照文法書－バントゥ諸語研究における参照文法書の位置づけ」渡辺己・澤田英夫 (編) 『参照文法書研究』アジア・アフリカ言語文化研究別冊2, 213-255.
  8. 2021. 「新しいアフリカ言語研究」『アフリカ研究』100, 67-72. (大野仁美・河内一博・中川裕・亀井伸孝・森壮也・宮本律子との共著)
  9. 2021. 「ヘレロ語の名詞の声調 (Bantu R31)」梶茂樹 (編) 『アフリカ諸語の声調・アクセント』府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. 279-301.
  10. 2021. 「スワヒリ語における「関係節」と体言化」鄭聖汝・柴谷方良 (編) 『体言化理論と言語分析』吹田：大阪大学出版会. 429-458.
  11. 2019. 「ヘレロ語のとりたて表現」野田尚史 (編) 『日本語と世界の言語のとりたて表現』東京：くろしお出版. 237-253.
  12. 2019. 'Contact-induced language divergence and convergence in Tanzania: Forming new varieties as language maintenance.' *Swahili Forum*, 26, 181-204. (Sayaka Kutsukakeとの共著)
  13. 2018. 'Functions of verb reduplication and verb doubling in Swahili.' *The Journal of Asian and African Studies*, 96, 5-27. (Hannah Gibsonとの共著)
  14. 2018. 'Noun-modifying constructions in Swahili and Japanese.' In: Pardeshi, Prashant and Taro Kageyama (eds.) *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics* (Handbooks of Japanese language and linguistics 6). Berlin: de Gruyter Mouton. 433-452.
  15. 2017. 'Conjoint/disjoint distinction and focus in Matengo (N13).' In: Hyman, Larry and J. van der Wal. (eds.) *The Conjoint/Disjoint Alternation in Bantu*. Berlin: de Gruyter Mouton. 426-452.
  16. 2017. 「日本語の視点からアフリカ諸語を見る－日本語とバントゥ諸語の対照研究－」『適塾』50, 45-52.
  17. 2017. 「ヘレロ語とスワヒリ語の限定を表すとりたて小辞に関する試論」『スワヒリ&ア

- フリカ研究』28, 72-90.
18. 2016. 'Event integration patterns in Herero: The case of motion event components.' *Asia and Africa Languages and Linguistics*, 10, 219-244.
  19. 2016. 「スワヒリ語における『～ハ～ガ』構文および類似した構文について」『スワヒリ & アフリカ研究』27, 17-36.
  20. 2015. 「スワヒリ語における有対動詞：派生の形式と動詞の意味を中心に」パルテシ、ブラシャント・ハイコ ナロック・桐生和幸（編）『有対動詞の通言語的研究』東京：くろしお出版. 351-368.
  21. 2015. 「スワヒリ語の場所格の主題化」『日本語学』34(12), 68-76.
  22. 2014. 「バントゥ諸語における自他動詞の派生関係—スワヒリ語・マテンゴ語・ヘレロ語の場合—」『スワヒリ&アフリカ研究』25, 54-65.
  23. 2014. 「バントゥ諸語における名詞修飾節の形式と意味」益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田直子・丸山岳彦（編）『日本語複文構文の研究』東京：ひつじ書房. 617-643.
  24. 2012. 「アフリカにおける識字を考える」『ことばと社会』14, 43-66.
  25. 2012. 「ヨーロッパ発『多言語主義』とアフリカの多言語状況」砂野幸稔（編）『多言語主義再考—多言語状況の比較研究』東京：三元社. 118-141.
  26. 2012. 「スワヒリ語における2種類の関係節」*CLAVEL*, 2, 13-26.
  27. 2012. 「スワヒリ語のアクセント—アクセントフレーズを中心に—」原口庄輔（編）『自立調和的視点から見た音韻類型のモデル』（平成20年度～23年度科学研究費補助金研究成果報告書）139-148.
  28. 2011. 'Word order in Matengo (N13): Topicality and informational roles.' *Lingua*, 121(5), 754-771.
  29. 2011. 「ヘレロ語における動詞活用形の声調（バントゥ系, R31）」『スワヒリ&アフリカ研究』22, 109-131.
  30. 2010. 「ヘレロ語における適用形構文と目的語の対称性」『アジア・アフリカの言語と言語学』4, 5-37.
  31. 2010. 'Topical hierarchy and grammatical agreement in Matengo (N13).' In: Legère, K. and C. Thornell (eds.) *Bantu Languages Analyses, Description and Theory*. Köln: Rüdiger Köppe Verlag. 313-323.
  32. 2010. "Swahilization" of ethnic languages in Tanzania: The case of Matengo.' *African Study Monographs*, 31(3), 139-148.

33. 2009. 'Information structure and sentence formation in Matengo.' In: Pak, Manghyu (ed.) *Current Issues in Unity and Diversity of Languages*. (Collection of the papers selected from CIL18) Seoul: Linguistic Society of Korea. 443-453.
34. 2009. 「動き続けるアフリカ諸語—ナミビアの言語事情」 梶茂樹・砂野幸稔（編）『アフリカのことばと社会』 東京：三元社. 459-482.
35. 2009. 「マテング語の動詞活用形と焦点」『スワヒリ&アフリカ研究』 20, 148-164.
36. 2009. 「言語を『選択する』ということ—アフリカにおける母語教育と言語権について考える—」 *Mwenge*. 39, 16-20.
37. 2008. 「マテング語の情報構造と語順」『言語研究』 133, 107-132.
38. 2008. 「ナミビアのアフリカ諸語—言語態度と言語権を中心に—」 米田信子（編）『南部アフリカ少数言語の教材開発および保護のための記述研究』（平成18年度～19年度科学研究費補助金研究成果報告書） 1-16.
39. 2008. 「母語は『使いたい言語』か？—ナミビアの言語権」『言語』 32(2), 40-45.
40. 2007. 「マテング語の擬人化とイメージ付与」『スワヒリ&アフリカ研究』 18, 109-126.
41. 2007. 「レキシカルな韻律とフレーザルな韻律の関係—日本語共通語・新見市方言・中国語・マテング語の対照—」 定延利之・中川弘之（編）『音声文法の対照』 東京：くろしお出版. 15-53. （定延利之・友定賢治・朱春躍との共著）
42. 2007. 「ナミビア：アフリカ諸語教育の新たな段階—Upgrading African Languages Projectの報告を中心に—」『スワヒリ&アフリカ研究』 17, 145-155.
43. 2006. 「マテング語における『現在』と『未来』—2種類の時間境界—」 中川弘之・定延利之（編）『言語に現れる「世間」と「世界」』 東京：くろしお出版. 129-151.
44. 2006. 「マテング語の『補完語』と情報構造」 加藤重弘・吉田浩美（編）『言語研究の射程』 東京：ひつじ書房. 189-211.
45. 2005. 'Tone patterns of Matengo nominals.' In: Kaji, Shigeki (ed.) *Cross-linguistic Studies of Tonal Phenomena: Historical Development, Tone-Syntax Interface, and Descriptive Studies*. 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究. 393-409.
46. 2005. 「ナミビアの多言語使用—アフリカ諸語をめぐる新たな動き—」 梶茂樹・石井溥（編）『アジア・アフリカにおける多言語状況と生活文化の動態』（科学研究費研究成果報告書） 157-171.
47. 2005. 「独立ナミビアの多言語教育」『脱帝国と多言語化社会のゆくえ』（ことばと社会別冊2） 東京：三元社. 127-153.
48. 2004. 「多言語社会における英語の位置づけ—タンザニア、ナミビア、ジンバブエの場

- 合一」宮本律子（編）『現代アフリカ女性の開発プログラム参加と言語選択に関する学際的研究』（科学研究費研究成果報告書）19-32.
49. 2004. 「マテング語の主題—他のバンツー諸語との比較から—」 益岡隆志（編）『主題の対照』 東京：くろしお出版. 171-190.
  50. 2003. 「マテング語における不可譲渡名詞の状態表現」『スワヒリ&アフリカ研究』 13, 125-137.
  51. 2003. 「マテング語における借用語と単語取替え」 梶茂樹（編）『地方語と共通語における借用語の動態関係—アフリカとインドネシアの場合—』（環太平洋の「消滅に瀕した言語」に関する緊急調査研究成果報告集B009）ELPR Publications. 31-49.
  52. 2003. 「マテング語に見られる“母音挿入”」『大阪女学院短期大学紀要』 32, 23-39.
  53. 2002. 「多言語国家における教育と言語政策—独立ナミビアの事例から—」 宮本正興・松田素二（編）『現代アフリカの社会変動—言葉と文化の動態観察』 京都：人文書院. 150-169.
  54. 2002. 「ンデンドウレ語の音韻概要」『スワヒリ&アフリカ研究』 12, 129-145.
  55. 2001. 「ナミビアの教育言語政策」『アフリカレポート』 33, 22-26.
  56. 2001. 「マテング語における単語の取り替え」『アジア・アフリカ文法研究』 29, 93-99.
  57. 2000. 「『現在』時制におけるマテング語の静態動詞」『アジア・アフリカ文法研究』 28, 41-54.
  58. 2000. 「マテング語の他動詞と自動詞に関する試論—形態による分類を中心に」『スワヒリ&アフリカ研究』 10, 183-198.
  59. 1999. 「マテング語動詞の声調（バンツー系，タンザニア）」『アジア・アフリカ言語文化研究』 57, 133-155.
  60. 1997. 「民族語に対する言語政策とその影響—タンザニアの事例から—」 田中克彦・山脇直司・糟谷啓介（編）『言語・国家，そして権力』（ライブラリ相関社会科学4）東京：新世社. 318-335.
  61. 1997. 「民族語に対するタンザニアの言語政策」『スワヒリ&アフリカ研究』 7, 34-50.
  62. 1997. 「ヘレロ語適用形の機能について」『アジア・アフリカ言語文化研究』 53, 123-136.
  63. 1996. 'The impact of the diffusion of Kiswahili on ethnic languages in Tanzania: A case study of Samatengo.' Hino, Shun'ya (ed.) *African Urban Studies*. IV, Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa. 29-93.

### その他（研究ノート、資料、報告、事典項目等）

1. 2016.「総説一言語・言語学」日本アフリカ学会（編）『アフリカ学事典』東京：昭和堂. 110-113.（小森淳子との共著）【事典の項目】
2. 2015.「スワヒリ語の基礎語彙集試案」『スワヒリ&アフリカ研究』26, 119-137.（小林晋・牧野友香・小野田風子・中垣友江との共著）【研究ノート】
3. 2014. The World Atlas of Transitivity Pairs (WATP) 'Herero', 'Matengo', 'Swahili' <https://watp.ninjal.ac.jp/en/downloads/> (2022.3. updated) 【資料】
4. 2011.「アフリカの言語」『アフリカ研究』78, 43-60.（若狭基道・塩田勝彦・小森淳子・亀井伸孝との共著）【講座】
5. 2009.「ヘレロ語」梶茂樹・中島由美・林徹（編）『事典 世界のことは』東京：大修館書店. 518-521. 【事典の項目】
6. 2004.「英語科で『アフリカ』を教える」『アフリカ研究』日本アフリカ学会創立40周年記念特別号. 【報告】
7. 2002.『モザンビークと2000年の大洪水』（*Mozambique & The Great Flood of 2000* Frances Christie & Joseph Hanlon著 Oxford Univ. 2001）東京：（財）国際開発センター. 【共訳】
8. 2000.「マテンゴ」, 「ンデンデウレ」, 「ダマラ」綾部恒雄・大塚和夫・木村秀雄・黒田悦子・小西正捷・小松久男・須藤健一・谷泰・日野舜也・横山廣子（編）『世界民族事典』東京：弘文堂. 【事典の項目】
9. 1998.「東アフリカ言語社会文献目録」『スワヒリ&アフリカ研究』8, 156-167,（中島久・竹村景子・小森淳子・稗田乃との共著）【資料】

### 学会・シンポジウム・国際会議等口頭発表

1. 2023.12.10. 'Traces of Indian Ocean trade in the Swahili language.' INDOWS International Symposium: Currents of Metamorphosis across the Indian Ocean. 大阪大学.
2. 2022.6.8. 'Degrees of definiteness in Swahili locative constructions.' The 9th International Conference on Bantu Languages. マラウイ大学, ブランタイヤ, マラウイ共和国.
3. 2021.11.21.「湯川データ：120を超えるバントゥ諸語の並行的データ」日本言語学会第163回大会ワークショップ「最後のアナログ言語調査資料：危機に瀕した言語データの発掘と救出」オンライン.

4. 2021. 6.9. 'Inchoative / causative verb alternations in Swahili.' 10th World Congress of African Linguistics. ライデン大学, オランダ. オンライン.
5. 2021. 6.3. 'Non-locative uses of locative enclitics in Herero (R31).' The 8th International Conference on Bantu Languages. エセックス大学, 英国. オンライン.
6. 2020.5.23. 「バントゥ諸語のマイクロバリエーション研究とは? (新しいアフリカ言語研究3: バントゥ諸語のマイクロバリエーション研究)」日本アフリカ学会第57回学術大会.
7. 2018.11.22. 'Proto-Bantu subject and topic.' International Conference on Reconstructing Proto-Bantu Grammar. ゲント大学, ベルギー. (Yukiko Morimotoとの共同発表)
8. 2018.8.26. 'Multiple object constructions in Ganda (JE15).' The 9th World Congress of African Linguistics. ムハンマド5世大学, ラバト, モロッコ王国. (Judith Nakayizaとの共同発表)
9. 2018.8.25. 'Cross-Bantu variation in the properties of subjects.' The 9th World Congress of African Linguistics. ムハンマド5世大学, ラバト, モロッコ王国. (Yukiko Morimotoとの共同発表)
10. 2018.7.10. 'Degrees of topicality in Bantu subjects.' The 7th International Conference on Bantu Languages. The River Club Mowbray Cape Town, ケープタウン, 南アフリカ共和国. (Yukiko Morimotoとの共同発表)
11. 2018.7.9. 'Exclusive particles 'only' in Swahili - *tu* and *peke yake*-' The 7th International Conference on Bantu Languages. The River Club Mowbray Cape Town, ケープタウン, 南アフリカ共和国. (Kumiko Miyazakiとの共同発表)
12. 2018.7.5. 'Exclusive focus sensitive particles in Herero (Bantu R31).' The 20th International Congress of Linguists. The Cape Town International Convention Centre, ケープタウン, 南アフリカ共和国.
13. 2018.5.27. 「スワヒリ語ザンジバル方言における移動動詞としての *pandisha* と *shusha*—季節風による「上下」の関係—」日本アフリカ学会第55回学術大会. 北海道大学. (初田漠との共同発表)
14. 2015.7.24. 'How African languages fit in Talmy's typology of event integration.' The 13th International Cognitive Linguistics Conference. ノーザンブリア大学, ニューカッスル, 英国. (Kawachi, Kazuhio, Y. Abe, O. Hieda, K. Koga, J. Komori, H. Yoshinoとの共同発表)
15. 2017.6.23. 「スワヒリ語と民族語の言語接触による文法レベルの影響」ワークショップ「ス

- ワヒリ語圏アフリカにおける多言語状況の実態—言語接触状況下での多様な言語現象から捉える—」日本言語学会第154回大会、首都大学東京。
16. 2017.5.20.「ガンダ語の多重目的語構文—3つの目的語の現れ方—」日本アフリカ学会第54回学術大会、信州大学。
  17. 2016.12.3.「バントゥ諸語の関係節に見られるマイクロバリエーション」日本言語学会第153回大会、福岡大学。
  18. 2016.6.22. 'Noun-modifying construction: the forms and the head-modifier relation.' The 6th International Conference on Bantu Languages. ヘルシンキ大学, フィンランド。
  19. 2016.5.20. "Swahilization" of Bantu languages in Tanzania: The case of Matengo.' International Workshop on Morphosyntactic Variation in Bantu: Typology, Contact and Change. ロンドン大学SOAS, 英国。
  20. 2015.8.23. 'The integration patterns of motion event components in Herero (Bantu, R31).' The 8th World Congress of African Linguistics. 京都大学。
  21. 2015.1.25. 'Motion expression patterns in African languages.' NINJAL International Symposium on Typology and Cognition in Motion Event Description. 国立国語研究所。(Kawachi, Kazuhiro, Y. Abe, O. Hieda, K. Koga, J. Komori, & H. Yoshinoとの共同ポスター発表)
  22. 2014.11.15.「ヘレロ語（バントゥ R31）における語のプロソディと文レベルの現象」日本言語学会第149回大会、愛媛大学。
  23. 2014.3.1. 'Conjoint/disjoint distinction in Matengo (N13).' The 2nd International Workshop on Bantu Languages. ロンドン大学SOAS, 英国。
  24. 2013.5.25.「スワヒリ語におけるアクセント・フレーズ」日本アフリカ学会第50回学術大会、東京大学駒場キャンパス。
  25. 2012.11.11. 'Noun-modifying clauses in Bantu languages.' The 1st International Workshop on Bantu Languages. 大阪大学中之島センター。
  26. 2011.2.22. 'Nominal modifying clauses in Swahili: relative clauses and PCd+INF.' ロンドン大学言語学コロキウム、ロンドン大学SOAS, 英国。
  27. 2010.11.27.「スワヒリ語における『外の関係』の関係節」日本言語学会第141回大会、東北大学。
  28. 2010.10.31. 'Relative clauses in Swahili - Internal relation and external relation.' International Workshop on Clause Combining. 東京外国語大学。
  29. 2010.8.24. 'Relative clauses in Swahili: Contrastive study with Japanese.' The 40th

- Colloquium on African Languages and Linguistics. ライデン大学, オランダ.
30. 2010.6.27.「ヘレロ語の声調体系（バントゥ諸語, R31）—名詞と動詞の声調型を中心に—」  
関西言語学会第35回大会. 京都外国語大学.
  31. 2010.2.19. "Swahilization" of HLT (Heritage Languages of Tanzania): The case of  
Matengo.' The 1st International Conference on Heritage/Community Languages. カリ  
フォルニア大学ロサンジェルス校, ロサンジェルス, 米国.
  32. 2009.9.21. 'Tone patterns of Herero nominals.' Academy UK-Africa Partnership:  
Workshop on Languages and Linguistic Studies of Southern African Languages. ボツ  
ワナ大学, ハボロネ, ボツワナ共和国.
  33. 2009.8.19. 'Object a/symmetry and animacy hierarchy in Herero. (Bantu, R31).' The  
6th World Congress of African Linguistics. ケルン大学, ドイツ.
  34. 2009.6.6.「マテンゴ語におけるフォーカス標示と解釈の不一致」関西言語学会第34回大会.  
神戸松蔭女子学院大学.
  35. 2009.3.26. 'The conjoint/disjoint verb form and focus in Matengo.' The 3rd  
International Conference on Bantu Languages. ベルギー王立中央アフリカ博物館, テ  
ルビュールン, ベルギー.
  36. 2008.11.29.「バントゥ諸語における適用形動詞の類型と目的語対称性」日本言語学会第  
137回大会. 金沢大学. (品川大輔との共同発表)
  37. 2008.7.25. 'Information structure and sentence formation in Matengo.' The 18th  
International Congress of Linguists. 高麗大学, ソウル, 韓国.
  38. 2008.6.1.「アフリカ諸語による教育と言語権—母語教育のゆくえをのぞむ—」日本文化  
人類学会第42回研究大会. 京都大学.
  39. 2008.5.25.「ヘレロ語名詞の声調」日本アフリカ学会第45回学術大会. 龍谷大学.
  40. 2008.3.8. 'Word order and information structure in Matengo (N13).' International  
Conference on Movement and Word Order. ライデン大学, オランダ.
  41. 2007.10.4. 'Topical hierarchy and grammatical agreement in Matengo (Bantu N13).' The  
2nd International Conference on Bantu Languages. ヨーテボリー大学, スウェー  
デン.
  42. 2006.8.30. 'The information structure and word order in Matengo.' The 35th  
Colloquium on African Languages and Linguistics. ライデン大学, オランダ.
  43. 2006.3.3. 'Topicalization and the information structure in Matengo.' Museum Seminar  
on African Languages and Cultures. ベルギー王立中央アフリカ博物館, テルビュールン.

ン, ベルギー.

44. 2005.5.28.「ナミビアの言語政策：新しい動き」日本アフリカ学会第42回学術大会, 東京外国語大学.
45. 2004.12.16. 'Tone patterns of Matengo nominals.' International Symposium on Tone: Cross-Linguistic Studies of Tonal Phenomena. 東京外国語大学.
46. 2003.10.26.「ナミビアの言語問題—多言語教育の実情と課題—」国際シンポジウムPost-Empire and Multilingual Societies in Asia and Africa. (脱帝国と多言語化社会のゆくえ—アジア・アフリカの言語問題を考える). 東京外国語大学.
47. 2003.7.27.「バンツ諸語の主題：マテンゴ語の主題化を中心に」言語対照シンポジウム「主題」をめぐって. 神戸ユニティー.
48. 2003.6.1.「ジンバブエの言語 “ナショナリズム”」日本アフリカ学会第40回学術大会, 島根大学.
49. 2003.3.14.「英語に対する方針と言語態度—タンザニア・ナミビア・ジンバブエの例—」アジア・アフリカにおける政治文化の動態「言語共同体と言語政策」シンポジウム, 東京外国語大学.
50. 2001.5.27.「ナミビアの教育言語政策」日本アフリカ学会第38回学術大会, 名古屋大学.
51. 2000.12.25. 'Swahilization of ethnic languages in Tanzania.' International Conference on Endangered Languages. 京都国際会館.
52. 1999.5.30.「マテンゴ語に見る借用語の変容」日本アフリカ学会第36回学術大会. 京都大学.
53. 1998.6.21.「マテンゴ語動詞の声調」日本言語学会第116回大会. 慶応義塾大学.
54. 1998.5.31.「マテンゴ語：世代間に見られる母音の差」日本アフリカ学第35回学術大会. 敬愛大学.
55. 1997.6.1.「民族語に対するタンザニアの言語政策：現状と課題」日本アフリカ学会第34回学術大会. 新潟国際情報大学.

## 学位論文

1. 2000.『マテンゴ語の記述研究（バンツ系, タンザニア）—動詞構造を中心に—』東京外国語大学に提出した博士論文.
2. 1995.『タンザニアにおけるスワヒリ語の浸透と民族語の現状：マテンゴ語の例をとおして』神戸市外国語大学に提出した修士論文.

## 渡邊 克昭 教授

### 履歴および研究業績等一覧

#### 【履歴】

- 1977年 3月 京都教育大学附属高等学校卒業
- 1981年 3月 大阪外国語大学外国語学部英語学科卒業（外国語学士）
- 1983年 3月 大阪大学大学院文学研究科英文学専攻博士前期課程修了（文学修士）
- 1985年 3月 大阪大学大学院文学研究科英文学専攻博士後期課程単位取得退学
- 1985年 4月 大阪大学言語文化部助手
- 1987年 4月 大阪大学言語文化部専任講師
- 1987年10月 大阪外国語大学外国語学部専任講師
- 1990年 4月 プリンストン大学英文科客員研究員（日米友好基金助成、1991年 3月まで）
- 1992年 1月 大阪外国語大学外国語学部助教授
- 2004年 1月 大阪外国語大学外国語学部教授
- 2007年10月 大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻教授
- 2017年 3月 大阪大学博士（言語文化学）
- 2022年 4月 大阪大学大学院人文学研究科外国語学専攻教授
- 2024年 3月 定年により退職

#### 【研究業績等一覧】

##### 著書（単著）

1. 『楽園に死すーアメリカ的想像力と〈死〉のアポリア』大阪大学出版会、2016年 1月29日、pp. 1-546.（日本アメリカ文学会第2回アメリカ文学会賞受賞）

##### 著書（共著）

1. 『空間と英米文学』、藤井治彦編、第10章「独房、火葬場、天文台ー『学生部長の一二月』の構造」英宝社、1987年12月15日、pp. 246-270.
2. 『世界地域学への招待』池田修編、Part 4「テキストとしてのアメリカを読む」嵯峨野書院、1998年 1月25日、pp. 321-334.

3. 『自己実現とアメリカ文学』 町田哲司編、第10章「ノイズから『ホワイト・ノイズ』へ—死がメディアと交わる場所—」 晃洋書房、1998年5月10日、pp. 174-194.
4. 『藤井治彦先生退官記念論文集』 藤井治彦編、第60章「『群衆』の時代と小説家の肖像—*Mao II*における死とメディアの神話学」 英宝社、2000年2月25日、pp. 837-850.
5. 『冷戦とアメリカ文学—21世紀からの再検証』 山下昇編、第13章「廃物のアウラと世紀末—封じ込められざる冷戦の『アンダーワールド』」 世界思想社、2001年9月20日、pp. 329-361.
6. 『共和国の振り子—アメリカ文学のダイナミズム』 大井浩二監修、花岡秀・貴志雅之・渡邊克昭編、第10章「フレームの彼岸から自伝の暗室へ—『舞踏会へ向かう三人の農夫』における死と複製のヴィジョン」 英宝社、2003年8月20日、pp. 177-194.
7. 『身体、ジェンダー、エスニシティ—21世紀転換期アメリカ文学における主体』 鴨川卓博・伊藤貞基編、第4章「メディア、ジェンダー、パフォーマンス—『ボディ・アーティスト』における時と消滅の技法」 英宝社、2003年9月5日、pp. 117-143.
8. 『病と身体 of 英米文学』 玉井暉・仙葉豊編、第5章「『崇高』という病—『享楽』の『コスモポリス』横断」 英宝社、2004年5月20日、pp. 86-108.
9. 『ポストコロニアル文学の現在』 木村茂雄編、第4章1節「マーガレット・アトウッド『侍女の物語』—『植民地』化される女、『マイケル・オンダッチェの『イギリス人の患者』」 晃洋書房、2004年6月10日、pp. 123-134.
10. 『二〇世紀アメリカ文学を学ぶ人のために』 山下昇・渡邊克昭編、第5章「ポストモダン文学への誘い—『黒い時計の旅』をめぐって」 世界思想社、2006年10月10日、pp. 68-82.
11. 『神話のスパイラル—アメリカ文学と銃』 花岡秀編、第5章「蘇る標的—デリーロ文学の弾道」 英宝社、2007年3月15日、pp. 185-242.
12. 『メディアと文学が表象するアメリカ』 山下昇編、第7章「9.11と『灰』のエクリチュール—『フォーリングマン』における“nots”の亡霊」 英宝社、2009年10月20日、pp. 166-192.
13. 『アメリカ文学研究のニュー・フロンティア—資料・批評・歴史』 田中久男監修、亀井俊介・平石貴樹編、第14章「敗北の「鬼」を抱きしめて—『アンダーワールド』における名づけのアポリア」 南雲堂、2009年10月20日、pp. 281-298. pp. 351-354.
14. 『二〇世紀アメリカ文学のポリティクス』 貴志雅之編、第7章「ホブズタウンより愛をこめて—『囚人のジレンマ』からフェアリー・ダスト・メモリーへ」 世界思想社、2010年6月10日、pp. 215-247.

15. 『異相の時空間—アメリカ文学とユートピア』大井浩二監修、相本資子・勝井伸子・宮澤是・井上稔浩編、第19章「時の砂漠—惑星思考の『ポイント・オメガ』」英宝社、2011年5月10日、pp. 310-333.
16. 『ヘミングウェイ大事典』今村楯夫・島村法夫監修、勉誠出版、2012年7月21日、p. 765, pp. 767-769, pp. 773-774.
17. 『アメリカン・ロード—光と陰のネットワーク』花岡秀編、第10章「シネマの旅路の果て—ドン・デリーロの「もの食わぬ人」における「時間イメージ」」英宝社、2013年11月25日、pp. 201-224.
18. 『災害の物語学』中良子編、第3章「噴火・蒐集・生成—『火山の恋人』における歴史の創造/想像<sup>ボイエエシス</sup>」世界思想社、2014年5月1日、pp. 74-101.
19. 『アメリカ文学における幸福の追求とその行方』貴志雅之編、第18章「幸福」のこちら側—リチャード・パワーズの『幸福の遺伝子<sup>ジェネロシティ</sup>』に見る横溢と復元力」南雲堂、2018年2月28日、pp. 352-370.
20. 『揺れ動く〈保守〉—現代アメリカ文学と社会』山口和彦・中谷崇編、第10章「囁き続ける水滴—ドン・デリーロの『ゼロK』における「生命の保守」」春風社、2018年9月13日、pp. 275-307.
21. 『アメリカ文化事典』アメリカ学会編、第14章「文学」、丸善出版、2019年1月20日、pp. 548-549.
22. 『脱領域・脱構築・脱半球—二一世紀人文学のために』巽孝之監修、下河辺美知子・越智博美・後藤和彦・原田範行編、第6章「錯乱のコズモポリス—『マーティン・ドレスラー』におけるポストヒューマン的身体としての「ホテル」」小鳥遊書房、2021年10月1日、pp. 137-155.

## 学術論文

1. “Hemingway and the Ritual.” *Osaka Literary Review* 第20号、大阪大学、1981年11月30日、pp. 171-181.
2. “Henderson the Rain King: Bellow’s Festival.” *Osaka Literary Review* 第22号、大阪大学、1983年12月20日、pp. 103-113.
3. 「マキャベリアンのペイジェント—『オーギー・マーチの冒険』をめぐって」『関西アメリカ文学』第21号、日本アメリカ文学会関西支部、査読有り、1984年11月30日、pp. 42-55.
4. 「ソール・ベローにおける老いと弔い—『サムラー氏の惑星』と『フンボルトの贈り物』

- を中心に」『英米研究』第16号、大阪外国語大学英米学会、1988年2月29日、pp. 105-127.
5. 「メタフィクションとしての『旅路の果て』」『英米研究』第17号、大阪外国語大学英米学会、1990年3月31日、pp. 101-124.
  6. “Saul Bellow's *More Die of Heartbreak*: A Companion Piece to *Humboldt's Gift*.” 『英米研究』第18号、大阪外国語大学英米学会、1992年3月31日、pp. 101-130.
  7. 「ヘルメスの贈り物—ソール・ベロー「銀の皿」試論」『英語圏世界の総合的研究』、大阪外国語大学英米学会、1993年3月31日、pp. 87-101.
  8. 「〈反〉祝祭としての『ビックリハウスの迷い子』—「夜の海の旅」の反復をめぐって」『英米研究』第19号、大阪外国語大学英米学会、1994年3月31日、pp. 187-213.
  9. 「Saul Bellowにおける富と贈与交換—*Humboldt's Gift*を中心に」『アメリカ文学研究』第31号、日本アメリカ文学会、査読有り、1995年2月25日、pp. 57-71.
  10. 「〈癒し〉としての騙り—*Seize the Day*における「貨幣」、タムキンをめぐって」『英米研究』第20号、大阪外国語大学英米学会、1995年2月28日、pp. 115-137.
  11. 「大統領と総統とシミュラクラ—デリーロとエリクソンに見る「アメリカ史」」『世界文学』第2号、大阪外国語大学、1996年3月29日、pp. 363-397.
  12. 「書物からハイパーテキストへ—変容する「文学空間」」『大阪外国語大学学内LAN利用の実態と今後』、大阪外国語大学英米学会、1997年3月31日、pp. 131-135.
  13. 「ポストモダン・オズワルド、ポストモダン・アウラー—JFK暗殺とドン・デリーロの『リブラ』」『英米研究』第23号、大阪外国語大学英米学会、1999年3月31日、pp. 163-189.
  14. 「広告の物たちの国で—ドン・デリーロのスペクタクルの日常」『EX ORIENTE』第4号、大阪大学言語社会学会、嵯峨野書房、2001年8月31日、pp. 67-96.
  15. “Welcome to the Imploded Future: Don DeLillo's *Mao II* Reconsidered in the Light of September 11.” *The Japanese Journal of American Studies* 第14号、アメリカ学会、査読有り、2003年6月30日、pp. 69-85.
  16. 「ドン・デリーロにおける〈死〉のデザイン—オリエンタルな意匠をめぐって」*AALA Journal* 22号、アジア系アメリカ文学会、査読有り、2016年12月1日、pp. 29-55.
  17. 「ドン・デリーロの惑星的想像力の場としての“Convergence”—『ゼロK』における「ポストヒューマン・ボディー」とアース・アート」『エコクリティシズム・レビュー』第11号、エコクリティシズム研究学会、査読有り、2018年8月6日、pp. 1-13.
  18. 「ポストヒューマン・デザインの地平—ダン・ブラウンの『オリジン』におけるAIと「かぐわしき科学」のゆくえ」『英米研究』第43号、大阪大学英米学会、2019年3月31日、

pp. 31-59.

19. 「蘇るポストヒューマン・バトルビー—ドン・デリーロの『ボディ・アーティスト』を導きの糸として」『英米研究』第44号、大阪大学英米学会、2020年3月31日、pp. 29-57.
20. 「遺伝子のデザイン、記憶のデザイン—『オリクスとクレイク』における黄昏の代理「神」、スノーマン」『英米研究』第45号、大阪大学英米学会、2021年3月31日、pp. 39-64.
21. 「アメリカン・デモクラシーの逆説とそのゆくえ—*Mao II*と*The Silence*における自己免疫と来るべき「未来」」『英米研究』第46号、大阪大学英米学会、2022年3月31日、pp. 1-26.
22. 「躍動する無限「ホテル」の闇の奥—『ウェイ・イン』におけるアクターネットワークの生成と変化」『英米研究』第47号、大阪大学英米学会、2023年2月28日、pp. 1-19.

## 翻訳

1. ウェイン・ブース著『フィクションの修辞学』米本弘一・服部典之と共訳、書肆風の薔薇、1991年2月25日、pp. 337-484. pp. 515-531.
2. ソール・バロー著「銀の皿」、『世界文学』第1号、大阪外国語大学、1995年3月20日、pp. 237-299.
3. エモリー・エリオット編『コロンビア米文学史』共訳、山口書店、1997年1月10日、pp. 65-76.
4. ドン・デリーロ著「アメリカ人であることの不思議さ、ドン・デリーロへのインタビュー」『世界文学』第5号、大阪外国語大学、2000年3月30日、pp. 359-86.
5. ドン・デリーロ著『マオII』本の友社、2000年4月28日、pp. 1-304.

## 書評

1. スティーヴ・エリクソン著『彷徨う日々』、「記憶のシネマトグラファーエリクソンの『青の時代』」『週刊読書人』1997年5月30日、第2面。
2. 上岡伸雄著『ヴァーチャル・フィクション—マルチメディア時代のアメリカ文学』『アメリカ文学研究』第36号、日本アメリカ文学会、2000年2月25日、pp. 131-137.
3. 海外新潮「Paper Palaceの迷い子」『英語青年』第150巻1号、研究社、2004年4月1日、p. 46.
4. 海外新潮「「ブッカー賞とスモールタウン・テキサス」」『英語青年』第150巻3号、研究社、2004年6月1日、p. 30.

5. 海外新潮「燐光を放つtrivia」『英語青年』第150巻5号、研究社、2004年8月1日、p. 37.
6. 海外新潮「カオス理論とポストモダン・アメリカ小説」『英語青年』第150巻7号、研究社、2004年10月1日、p. 40.
7. 海外新潮「Unlucky Pierreとセルロイドの詩神たち—Robert Coover のシネシティ探訪」『英語青年』第150巻9号、研究社、2004年12月1日、p. 41.
8. 海外新潮 "Wrong Day's Journey into Celebrity: Don DeLillo's Valparaiso" 『英語青年』第150巻11号、研究社、2005年2月1日、p. 40.
9. Walter Benn Michaels著 *The Shape of the Signifier: 1967 to the End of History* 『英文学研究』第82巻、日本英文学会、2005年12月1日、pp. 209-213.
10. 下河辺美知子編著『アメリカン・テロラー内なる敵と恐怖の連鎖』『英文学研究』第87巻、日本英文学会、2010年12月1日、pp. 77-82.
11. 三浦玲一編著『文学研究のマニフェスト—ポスト理論・歴史主義の英米文学批評入門』『アメリカ文学研究』第50号、日本アメリカ文学会、2014年3月31日、pp. 137-138.
12. 赤祖父哲二著『アメリカ—三つの顔』『週刊読書人』、2013年11月8日、第7面。
13. 諏訪部浩一著『アメリカ小説を探して』『アメリカ文学研究』第55号、日本アメリカ文学会、2019年3月31日、p. 113.
14. 森有礼・小原文衛編著『路と異界の英語圏文学』『アメリカ文学研究』第56号、日本アメリカ文学会、2020年3月31日、p. 100-101.
15. 広瀬佳司・伊藤雅彦編著『ジューイッシュ・コミュニティ—ユダヤ系文学の源泉と空間』『アメリカ文学研究』第58号、日本アメリカ文学会、2022年3月31日、p. 140-141.

## 大学教科書

1. David Lodge著 *The Art of Fiction* (『小説の技法』) 英宝社、内田憲男と共編注、1996年1月10日、pp. 93-123.
2. *Masterpieces of Contemporary American Short Stories* (『現代アメリカ作家傑作選』) 英宝社、伊藤貞基と共編注、1996年1月10日、pp. 119-40.
3. Michael Kowalewski著 *Popular Classics of American Literature* (『名作を語る—アメリカ文学への誘い』) 英宝社、編注、1997年1月10日、pp. 97-123.
4. Adrian Beard著 *The Language of Sport* (『スポーツとことば』) 英宝社、早瀬尚子と共編注、2000年1月10日、pp. 71-83.

## 論評

1. 「魅力的な副専攻語英語教育のために」『新しい副専攻語英語教育』、大阪外国語大学、2000年3月31日、pp. 9-15.
2. 「"To be, or not to be"—英語教育における文学テキストの位相と理想」『大阪外大全体の効果的な英語教育』、大阪外国語大学、2001年3月31日、pp. 28-36.
3. 「アーネスト・ヘミングウェイと儀式」『英語青年』第152巻第12号、研究社、2007年3月1日、pp. 19-20.
4. 「アメリカ文学におけるヒューマン・エンハンスメントの進化と「幸福の追求」の未来学」『アメリカ文学研究』創刊50周年記念フォーラム「日本におけるアメリカ文学研究—その過去・現在・未来」『アメリカ文学研究』第50号、日本アメリカ文学会、2013年3月31日、pp. 39-41.

## 学会シンポジウム講師

1. 日本英文学会第58回全国大会シンポジウム：「老いと文学」、司会、講師：谷口陸男、講師：原口遼、谷本泰子、渡邊克昭。「ソール・ペローにおける老い」1986年5月18日、関西学院大学。
2. 日本アメリカ文学会第39回関西支部大会フォーラム：「最近のアメリカ小説を考える」、司会：伊藤貞基、講師：多賀谷悟、若島正、渡邊克昭。「ドン・デリーロとスティーヴ・エリクソン」1995年12月9日、立命館大学。
3. 日本アメリカ文学会第39回全国大会シンポジウム：「二つの世紀末—意識と表現」、司会：佐々木隆、講師：大井浩二、若島正、好井千代、渡邊克昭。「廃物のアウラと世紀末—封じ込められざる冷戦のUnderworld」2000年10月15日、同志社大学。
4. 日本アメリカ文学会第45回関西支部大会フォーラム：「身体、ジェンダー、エスニシティ—1990年代以降のアメリカ文学に見られる主体の変容」、司会：鴨川卓博、コメンテーター：伊藤貞基、講師：古賀哲男、馬場奈美子、山本秀行、渡邊克昭。「メディア、ジェンダー、パフォーマンス—*The Body Artist*における時と消滅の技法」2001年12月15日、立命館大学。
5. 日本アメリカ文学会第43回全国大会シンポジウム：「神話のスパイラル—アメリカ文学と銃」司会、講師：花岡秀、講師：中良子、貴志雅之、辻本庸子、渡邊克昭。「蘇る標的—DeLillo文学の弾道」2004年10月17日、甲南大学。
6. 阪大英文学会第37回大会シンポジウム：「わたしが選ぶ英米文学のこの1冊」、「ドン・デリーロの『アンダーワールド』」2004年11月6日、大阪大学。

7. 日本アメリカ文学会第46回全国大会シンポジウム：「共振する/交錯するメディアとアメリカ文学」、司会：山下昇、講師：森岡裕一、田口哲也、山本秀行、渡邊克昭。「メディアの亡霊—9. 11と「灰」のエクリチュール」2007年10月14日、広島経済大学。
8. 日本英文学会関西支部第4回大会シンポジウム「<伝・染>と英米文学」、司会、講師：仙葉豊、講師：新妻昭彦、花岡秀、渡邊克昭。「敗北の『鬼<sup>イット</sup>』を抱きしめて」2009年12月20日、同志社大学。
9. アメリカ学会第44年次大会部会A：「逆説のアメリカ核政策と核意識を中心に」、司会：竹内俊隆、報告者：梅本哲也、黒崎輝、上岡伸雄、渡邊克昭。「『囚人のジレンマ』におけるバイオ・ポリティクスの逆説」2010年6月6日、大阪大学。
10. 日本アメリカ文学会第55回関西支部大会フォーラム：「Natural Disasterとアメリカ的想像力」、司会・講師：中良子、講師：林以知郎、松岡信哉、石本哲子、渡邊克昭。「噴火・蒐集・生成—*The Volcano Lover*における歴史のポイエーシス」2011年12月3日、武庫川女子大学。
11. 日本アメリカ文学会中・四国支部冬季大会シンポジウム：「アメリカ文学における幸せの追求」、司会・講師：新田玲子、講師：塩田弘、貴志雅之、渡邊克昭。「『幸福』のこちら側—Richard Powersの*Generosity*に見るExuberanceとResilience」2014年12月13日、県立広島大学。
12. 日本アメリカ文学会東京支部12月例会シンポジウム：「『保守』の諸相」、司会・講師：山口和彦、講師：中谷崇、深瀬有希子、渡邊克昭。「囁き続ける水滴—ドン・デリーロの『ゼロK』における生命の保守」2016年12月5日、慶應義塾大学。
13. 阪大英文学会第50回大会シンポジウム：「藤井先生のご講義と『思想としての空間』」、司会：服部典之、講師：大森文子、川嶋伸博、足立賀代子、渡邊克昭。2017年10月28日、大阪大学。
14. 日本アメリカ文学会第63回 関西支部大会フォーラム「メルヴィルとホイットマンの時代—生誕200年を記念して」、司会・講師：橋本安央、講師：入子文子、堀内正規、渡邊克昭。「蘇るポストヒューマン・バートルビー—ドン・デリーロの『ボディ・アーティスト』を導きの糸として」2019年12月14日、龍谷大学。
15. 日本アメリカ文学会関西支部例会シンポジウム「変容する〈ホテル〉の時空間」、司会・講師：池末陽子、講師：後藤篤、千代田夏夫、渡邊克昭。「錯乱のコズモポリス—『マーティン・ドレスラー』におけるポストヒューマン的身体としての「ホテル」」2020年10月24日、オンライン。
16. 日本アメリカ文学会第60回全国大会シンポジウム「アメリカ作家たちのデモクラシー—

危機の時代を超えて』、司会・講師：渡邊克昭、講師：西谷拓哉、三杉圭子、岡本太助。「アメリカン・デモクラシーの逆説とそのゆくえ—*Mao II*と*The Silence*における自己免疫と来るべき「未来」」2021年10月3日、オンライン。

17. 日本ソール・ペロー協会第35回大会シンポジウム：「“A Silver Dish”を読む」、司会・講師：渡邊克昭、講師：大場昌子、伊達雅彦、近藤佑樹。「「世界は善なるものに満ちて」—「銀の皿」における「生」の創造的進化」2023年9月2日、大阪大学。
18. 日本アメリカ文学会第65回関西支部大会シンポジウム：「AIと小説との出会い」、司会：木原善彦、講師：大内真一郎、莊中孝之、大曾根宏幸、渡邊克昭。「ウィンストンは「<sup>エラン・ヴィタル</sup>生の跳躍」の夢を見るか?—ダン・ブラウンの『オリジン』におけるアクターネットワークの生成」2023年12月2日、京都女子大学。

#### 招待講演

1. 福島大学招待講演「幻想としてのアメリカフィクションが文化と交わる場所」2005年11月12日、福島大学。
2. アジア系アメリカ文学研究会第24回フォーラム招待講演「ドン・デリーロにおける〈死〉のデザイン—オリエンタルな意匠をめぐる」2016年9月25日、神戸大学。
3. 京都大学大学院人間・環境学研究科招待講演「破局と生成のアレンジメント—デリーロ文学における微粒子とメディアの亡霊」2017年7月14日、京都大学。
4. エコクリティシズム研究学会第30回大会招待講演「ドン・デリーロの惑星的想像力の場としての“Convergence”—『ゼロK』における「ポストヒューマン・ボディ」とアース・アート」2017年8月5日、サテライトキャンパスひろしま。
5. 日本英文学会関西支部第12回大会招待発表「囁き続ける水滴—『ゼロK』における「器官なき身体」」2017年12月17日、京都女子大学。
6. 日本ソール・ペロー協会第30回大会招待講演「呼び交わす巨匠たち—ペロー、ヘミングウェイ、デリーロにおける〈死〉のアポリア」2018年9月5日、専修大学。
7. 大阪市大学英文学会第48回大会招待講演「21世紀デリーロ文学におけるポストヒューマン的転回—アトウッドとの比較において」2020年12月12日、オンライン。

#### 研究発表

1. 日本アメリカ文学会関西支部例会「「マキャベリアンのペイジェント—『オーギー・マーチの冒険』をめぐる」1984年5月26日、大阪市立大学文化交流センター。
2. 日本アメリカ文学会第32回全国大会「Saul Bellowにおける富と贈与交換—*Humboldt's*

*Gift*を中心に」1993年10月9日、弘前大学。

3. 阪大英文学会第29回大会「ノイズから『ホワイト・ノイズへー死がメディアと交わるころ』1996年10月26日、大阪大学。
4. 日本アメリカ文学会第37回全国大会「『群衆』の時代と小説家の肖像 —*Mao III*における死とメディアの神話学」1998年10月17日、広島女学院大学。
5. 日本アメリカ文学会関西支部例会「時の砂漠—惑星思考の『ポイント・オメガ』」2010年11月6日、京都女子大学。

### 学会活動

1. 日本アメリカ文学会（1982年4月1日～現在）  
 関西支部長：2013年4月1日～2017年3月31日、本部代議員：2011年4月1日～現在、  
 本部編集委員：2010年4月1日～2014年3月31日、2018年4月1日～2020年3月31日、  
 本部編集委員長：2020年4月1日～2022年3月31日、本部事務局代表幹事：2008年4月1日～2010年3月31日、関西支部評議員：1997年4月1日～現在。
2. 日本英文学会（1986年4月1日～現在）  
 本部編集委員：2010年4月1日～2012年3月31日、本部編集副委員長2013年4月1日～2014年3月31日、関西支部理事2023年4月1日～現在。
3. 日本ソール・ベロー協会（1989年4月16日～現在）  
 理事：2001年4月1日～現在。
4. 日本アーネスト・ヘミングウェイ協会（1992年4月1日～2021年3月31日）
5. 大阪大学言語社会学会（1997年11月6日～現在）  
 理事、編集委員：2007年10月1日～現在。
6. アメリカ学会（2007年4月1日～現在）  
 評議員、年次大会プログラム委員：2009年4月1日～2010年3月31日。
7. 日本ウィリアム・フォークナー協会（2009年4月1日～2021年3月31日）
8. 日本マーク・トウェイン協会（2010年4月1日～2021年3月31日）
9. 日本アメリカ演劇学会（2010年4月1日～現在）

### 文部科学省科学研究費補助金 基盤研究C

#### 【研究代表者】

1. 「現代アメリカ文学におけるメディアと死の関係」（1997年4月1日～1999年3月31日）
2. 「現代アメリカ文学における『アメリカン・サブライム』の表象とアウラの発現に関する

- る研究」(2001年4月1日～2004年3月31日)
3. 「アメリカ文学における銃の表象とアメリカの神話の関係に関する研究」(2005年4月1日～2008年3月31日)
  4. 「20世紀アメリカ文学における進歩のデザインと破局の表象に関する文化史的研究」(2010年4月1日～2013年3月31日)
  5. 「アメリカ文学におけるヒューマン・エンハンスメントの進化と「幸福の追求」の未来学」(2014年4月1日～2017年3月31日)
  6. 「21世紀英語文学におけるポストヒューマニズムの思想史的展開—物質としての生命」(2018年4月1日～2023年3月31日)
  7. 「ポストヒューマン文学における異種混淆とデモクラシー—アクターネットワークの生成」(2022年4月1日～現在)

**【研究分担者】**

8. 「現代アメリカ文学における身体意識の変容とメディアと研究の関係」(2004年4月1日～2007年3月31日)
9. 「アメリカ文学と写真/ドキュメンタリーとのインタラクティブな関係に関する学際的研究」(2009年4月1日～2012年3月31日)
10. 「アメリカ文学におけるホテル的空間の文化史」(2019年4月1日～2023年3月31日)

**その他**

1. 科研費第2段審査委員(第2部会文学小委員)(2013年4月1日～2014年3月31日)
2. 高大連携：京都市立堀川高校生とのワークショップ・講演、「国際文化への誘い」2023年3月17日、大阪大学。

## 渡邊伸治 履歴・業績

### 【履歴】

|                  |                                        |
|------------------|----------------------------------------|
| 昭和53 (1978)年 6 月 | United World College of the Atlantic卒業 |
| 昭和53 (1978)年 7 月 | 国際バカロレア取得                              |
| 昭和54 (1979)年 4 月 | 東京外国語大学外国語学部ドイツ語学科入学                   |
| 昭和57 (1982)年10月  | ゲッティンゲン大学 文部省交換留学生（昭和58年 7 月まで）        |
| 昭和59 (1984)年 3 月 | 東京外国語大学外国語学部ドイツ語学科卒業                   |
| 昭和59 (1984)年 4 月 | 東京大学人文科学研究科修士課程独語独文学専修課程入学             |
| 昭和61 (1986)年 3 月 | 同修了                                    |
| 昭和61 (1986)年 4 月 | 東京大学人文科学研究科博士課程独語独文学専修課程進学             |
| 昭和62 (1987)年 3 月 | 同退学                                    |
| 昭和62 (1987)年 4 月 | 東京大学教養学部助手着任                           |
| 昭和63 (1988)年10月  | 大阪大学言語文化部専任講師着任                        |
| 平成2 (1990)年10月   | デュッセルドルフ大学 DAAD奨学生（平成 3 年 7 月まで）       |
| 平成6 (1994)年 4 月  | 大阪大学言語文化部助教授着任                         |
| 平成11 (1999)年10月  | ミュンヘン大学 フンボルト財団研究員（平成12年 7 月まで）        |
| 平成17 (2005)年 4 月 | 大阪大学大学院言語文化研究科助教授に配置換え                 |
| 平成19 (2007)年 4 月 | 大阪大学大学院言語文化研究科准教授に職名変更                 |
| 平成24 (2012)年 4 月 | 大阪大学大学院言語文化研究科教授着任                     |
| 令和4 (2022)年 4 月  | 大阪大学大学院人文学研究科教授に配置換え                   |

### 【主な業績】

1. 「hin/her+gehen/kommenの考察 —ニーベルンゲンの歌とトリスタンの原文/現代語訳を資料に—」『言語文化共同研究プロジェクト2022 時空と認知の言語学 (12)』（大阪大学）2023年, p. 50-59.
2. 「gehen/kommen とhin/her における ダイクシス性と視点性 —現代ドイツ語と中高ドイツ語の比較対照的考察—」『ドイツ文学』166（日本独文学会）2023年, pp.52-70.
3. 「現代語版ルター聖書/現代語版チューリヒ聖書におけるgehen/kommen —マタイによる福音書を対象に—」『言語文化共同プロジェクト2021 時空と認知の言語学 (11)』（大阪大学）2022年, p. 49-58.
4. 「ニーベルンゲンの歌におけるkomenの用法 —同じ環境で現れるgânとの対照の観点か

- らー」『言語文化共同プロジェクト2019 時空と認知の言語学 (9)』(大阪大学) 2020年, pp.31-40.
5. 「ニーベルンゲンの歌における *gân* の用法 —現代語訳では *kommen* で訳されている例を対象に一」『言語文化研究』45 (大阪大学) 2019年, pp.125-142.
  6. 「*go/come* のダイクシス用法と非ダイクシス用法 —具体的用法の場合—」『言語文化研究』42 (大阪大学) 2016年, pp. 219-239.
  7. 「直示とコンテキスト」澤田治美 (編)『ひつじ意味論講座第6巻 意味とコンテキスト』2012年, pp. 1-18, ひつじ書房.
  8. 「引用助詞「ト」と「ッテ」の機能と相違について」『言語文化共同研究プロジェクト2010 言語における時空をめぐる (9)』(大阪大学) 2011年, pp.71-80.
  9. 「Zur Deixis von *gehen*」『Akten des XII. internationalen Germanisitenkongresses Warschau 2010』Vol. 15. 2012年.
  10. 「クレルの用法分析」『言語文化共同研究プロジェクト2007 言語における時空をめぐる (6)』(大阪大学) 2008年, pp.41-49.
  11. 「ダイクシスを捉える枠組み」『月刊言語』2月号2007年, pp.32-39, 大修館.
  12. 「日本語フィクションにおける自由間接話法」『言語文化研究』33 (大阪大学) 2007年, pp.121-142.
  13. 「Zu Definitionen direkter und indirekter Rede im Deutschen und Japanischen」Harweg, R. et al. (eds.)『getriwe ân allez wenken: Festschrift für Shoko Kishitani zum 75. Geburtstag』2006年, pp. 212-224, Kümmerle Verlag, Göppingen.
  14. 「時間把握と時間表現」『言語文化共同研究プロジェクト2005 言語における時空をめぐる (4)』2006年, pp.41-50.
  15. 「引用節に現れる視点要素とスタイル要素」『日本語文法』3/2 (日本語文法学会) 2003年, pp.181-193.
  16. 「「前」の用法 —統一的説明試論—」『言語文化共同研究プロジェクト2002 言語における時空をめぐる (3)』2003年.
  17. 「Zur Deixis von *kommen*, *bringen* und *mitbringen*」『Zeitschrift für germanistische Linguistik』30/3, 2002年, pp.342-355. De Gruyter.
  18. 「「視点」諸概念の分類とその本質」『言語文化研究』25 (大阪大学) 1998年, pp.389-402.